

川柳塔

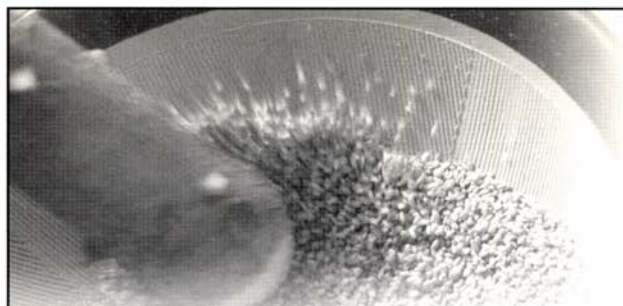
平成十九年三月一日発行
創刊大正十三年 通卷九五八号



日川協加盟

No. 958

三月号



オニザキの すりごま



自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。
オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。

株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00
土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)

縁起のいい話

河内 天笑

平成十九年一月五日、高槻市立五領公民館より高齢者教室二月例会の講師依頼としての書状が届いた。テーマは「みんなであつくり川柳入門」で「個性的な表現で川柳遊びを楽しもう」とあり、とり敢えずOKの返事をFAX。その後先方より確認の電話があつた折に「出来ればひとり何句かずつ作句して当方へ送って下さい」とお願いしたところ「むつみ会では川柳は初めてですが五・七・五で作るよう言っています」とのこと。

講座の開かれる三日前に公民館からパソコンで打った三枚綴りの作品が送られて来た。会員60名中18名から匿名や本名で54句だ。これまで何回か初心者講座を受け持ったが、生徒さんの半数以上はいわゆるサクラ。然し作品を見た限り純粋な初心者というのが見て取れ、講座の進め方を組み立てるのにとて参考になる。その内いくつかの添削例を紹介しよう。

○だんだんと減ってる年賀さみしいな

↓すこしずつすこしずつ減る年賀状

○しんねんをむかえてひとつとしがふえ

↓しんねんにまたふたりともしがふえ

○めじろ来てえさをついばむ番かな

↓梅咲いて今日はめじろがふた番

○秋空に飛行船飛ぶ運動会

↓運動会オヤ飛行船浮いている

○むつみ会だんだん皆んな年をとり

↓むつみ会皆平等に年をとり

こんな具合でみな素直で純粹で真白な画用紙のような印象を受ける。

18人もが54句も作句して頂いた御礼に川柳塔の大先輩である須崎豆秋さんの句を思い出せるだけ——約30句——ゆっくりと味わって頂いた。豆秋作品自身どれをとっても素晴らしいので頗る反応が良かったが、中でも「アメリカの仰しやる通り判を押し」にはとても敏感に領いてくれ、終戦当時の作品なのに今も充分生きている事に気付かされた。

また、句会のなりたちと作品集の出来るまでの作業などを説明するため「川柳堺」を配布し高槻市在住の同人指宿千枝子さんと月子の手を借りて、簡単な模擬句会を試みて皆さんに体験して頂いた。参加者は45名で二対一で女性が多かった。私の作品を30句程コピーしたものを渡し「興味ある作品を3〜5句ハガキに書いて私宛送ってください」とこの地に初歩教室の生まれん事の望みを残して公民館をあとにした。

自選句

天笑

瞑想に耽るかたちで寝てしまい

することがたんとあるのでふて寝する

手の届きそうな夢から手をつける

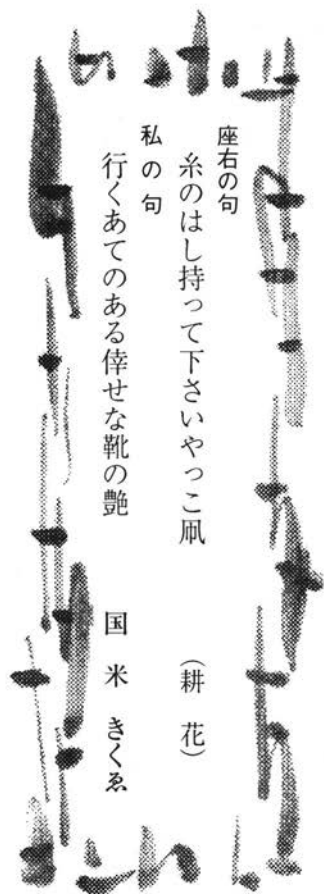
隔日とした晩酌に馴らされる

〃

〃

〃

〃



座右の句

糸のはし持つて下さいやつこ風

(耕花)

私の句

行くあてのある倅せな靴の艶

国米きくゑ

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「冬樹(三田市)」

■巻頭言 縁起のいい話

芸術の出前講座

河内 天笑 ……(1)

川柳塔(同人吟)

小林 由多香 ……(2)

川柳塔の川柳讃歌(27)

河内 天笑 ……(4)

自選集

木津川 計 ……(50)

水煙抄

奥田みつ子選 ……(55)

愛染帖

新家完司選 ……(78)

誹風柳多留二一篇研究 19

川上大輪・松本文子共選 ……(82)

檸檬抄「満 足」

川上大輪・松本文子共選 ……(84)

芸術の出前講座

小林 由多香

子供たちの目の輝きがかわいくて頼もしい。しかし二日間の講座で川柳の基礎基本、そして実作というスケジュールに反応してくれるだろうか、少々不安も感じられる。

小学生にナマの文化芸術を楽しむ体験してもらおうと、鳥取市の委託を受けた鳥取市文化団体協議会が、会員を講師として各芸術分野について指定された小学校へ指導に向くのを「芸術の出前講座」と言う。

今回は鳥取市の「平成十八年度芸術の出前講座実施計画書」により、小学校四校の子供たちに川柳や水墨画、演劇、吟詠など十五分野の講師が当たった。

川柳の出前をした先は鳥取市立美保小学校三年生一〇三名へ。一日目一時間は一組三十五名、二時間二組三十四名。二日目一時間は三組三十四名を対象に、それぞれ四十五分間の授業で一応川柳が詠めるまでにと子供たちにも、講師にも真剣な時限であった。二時限目は大い教室に三年生全員が集まり川柳の実作に挑戦。課題は「傘」。しゃべる子は一人もいない。男の子

一路集 「駅弁」……………相馬一花選……………(86)
「咲く」……………小川てるみ選……………(86)

初歩教室 「年度末」……………水野黒兎選……………(87)
「渡る」……………三宅保州……………(88)

秀句鑑賞 「同人吟」……………西口いわゑ……………(90)
「水煙抄」……………小川注湖……………(92)

沖浜正宏さんを偲んで……………小島蘭幸……………(93)

二月本社句会…………………………(94)

各地柳壇(佳句地十選/野下之男)……………(98)

■句集紹介 ピンチにはうつむかないで空を見る……………(98)

奥田みつ子著……………田中正坊……………(112)

柳界展望…………………………(113)

三月各地句会案内…………………………(114)

■編集後記(ひとこと/相見柳歩)……………希久子・尚士……………(116)

座右の句

雪達磨春を迎えに行つたきり

私の句

下駄履きで行けるところに母がいる 山下節子

(螢)

も女の子も習ったばかりの五・七・五のリズムに指を折っている。締め切りの時間が過ぎてても列を作つての投句、作品がまたすばらしい。

かさ買つて雨が降るのを待っている
雨の日にかさをさすけど背がぬれた

友達とかさをさしたがきゅうくつだ
かさ持つて登校したら雨ふらず

雨の日にかさを忘れて雨やどり

句の発表を興味深く聞いていた子供たちから「もつと作りたいです」との要望に「くせ」を出題した。子供たちの反応は早い。

お母さんいつも長ぶろ早くして

先生のだじゃれのくせはなおらない
兄弟でまいにちけんかしているよ

十歳の子供たちの素直でさわやかな川柳に出会えたことに感謝したい。

担任の先生、そして子供たちから講座の感想やらお礼の手紙を沢山もらつたり、更に夏休みに詠んだという川柳の批評を頼まれるなど、一回の講座だけで終りもしない学校の取り組みもうれしく、校長先生からは「教員では教えられないことを教えてもらった上に、子どもたちにとつてもさまざまな方と触れ合えるいい機会。今後も継続して実施したい」との話を聞いている。不安を感じながら始めた講座が楽しい講座になって来た。芸術の出前します。



河内天笑選

富田林市 池 森 子

定年に立つ団塊の向い風

一秒の中に葬く金銀銅

深呼吸すればするほど冬になる

奏でると踊ってくれる春の風

五感みな豊かで春は極上に

初夢の中で踊った麻痺の足

東大阪市 谷 口 義

人生は賭けだゆっくり散歩する

世の中に倦きないように手を繋ぐ

近頃は伊達や粹狂で生きている

お守りをぶら下げている影である

継続は力 机を拭いておく

往生際が悪いいつも思ってる

海南市 三 宅 保 州

卒業も入学もありおぼろ月

乗リかかった船はどこまで行くのやら

まず種を蒔いてみないと始まらぬ

それにしても烏鷺^{うろ}に拘る多数決

ご詠歌も小節を利かすおとうさん

大切に仕舞ったものもゴミになる

松山市 高 橋 宏 臣

行間に置いてあるのは白い雲

残照の中で繕う道化面

行列の途中で待つ生あくび

自動ドア開いて一人広すぎる

計算をされた涙に乗せられる

妥協するつもりはないが押され気味

黒石市 相 馬 一 花

食肉に生まれたことを豚は悔い

クロールに憧れている青蛙

荒れ肌を美肌にするというチラシ

スタミナが切れる男の太鼓腹

堅物もつい油断するみだれ髪

受験子が石焼き芋に起こされる

倉吉市 最上和枝

福袋嘘も宝も入れてある
パレットに赤しほり込み悪女たり
物に囲まれ生きてゐる不幸せ
おめでとう望んでいたネ突然死
擦ったら電波をつくる黒い髪
魚の群れ電波探知器掴まえる

愛知県 早川盛夫

五十万まで貸しますとティッシュくれ
人間の約七割は水である
百均の傘なり諦めも早い
ふる里は十年振りの五平餅
その気なら風はいつでも吹いている
ひっ越した近所の風が暖かい

四條畷市 吉岡修

神様に裏返されたらしい絵馬
成人の孫と今日から晴れて飲む
今までもこれから先も妻だのみ
ジャンプして落ちたところにバラダイス
アメリカの水が合うのか帰らぬ子
大方の噂どおりになる人事

枚方市 海老池洋

ソプラノの妻には勝てぬ口喧嘩
大根にも個性守口桜島
店選って番号選って宝くじ

高い酒試飲して買う酒の粕
世に揉まれ作り笑いぐうまくなる
機転きき過ぎて上司にうとまれる

松江市 銭山昌枝

患って夫のやさしさに触れる
魔除けにと口実つけて名画買う
大観に元氣を出せと励まされ
痛くない方の足から上り下り
川柳の仲間がくれる応援歌
青汁飲んで顔にハチミツ塗ってます

羽曳野市 三好専平

浪花節俠氣の喉に聞き惚れる
談合で闇に流れて消える税
生物も歴史も知らず卒業し
厳罰に傾いてゆく世がこわい
美しい嘘だからこそ観る映画
ITが万能という落とし穴

弘前市 高橋岳水

注ぎ零す酒も目出度い新春の膳
味噌汁で絆が太る凡夫婦
生きていてこそ花実と思うべし
体験が荒野に道を造り出す
矢面に立たされているのは外様
いたずらが過ぎていじめになることも

鳥取市 中村金祥

未履習をこなし螢の光聞く
怨念がますます募る改革だ
一国に弄ばれているんだな
故郷の出口に心置いてきた
なくなつた母校の歌を口ずさむ
無事定年満足感がこみあげる

羽曳野市 安芸田 泰子

肝心な話忘れた長電話
好奇心青い果実が熟れ急ぐ
距離おいて見ればいいとこ見えて来る
雑念が消えて仏に近くなる
辻褄を合わせる嘘に汗をかき
旬の味だんだん消える四季の国

堺市 石堂潤子

言ひ分は有るが言い訳などはせぬ
聞き流す事も大切深呼吸
ふんわりと友と結んでます絆
助け舟出さずに居れぬ友なりし
自分だけを信じるなんて侘しいよ
一山に葉っぱの命見切られる

和歌山市 古久保 和子

夫婦別姓墓のカタログ取り寄せる
語尾下げて気配を読んでみることに
足音の高い男の空気抜く

スカートの端ファスナーに噛みつかれ
空缶を蹴って収める腹の虫
襟元を詰めて歩いて春を待つ

豊中市 吉田 あずき

影だけがスタートラインに立っている
生きる辛抱老犬と目が合うて
反省がわが身にあつて叱れない
盗人のようにあちこち探しもの
正確な時計がどうも煩わし
落日を見守る明日は無限大

鳥取市 春木 圭一郎

通い合うものあり言葉生きてくる
背中押す言葉に今日もやる気増す
愛のある叱り方なら子も聞くよ
迷ったら視点を變えて考える
回り道失敗無駄なことはない
前向きに生きれば運もついて来る

橿原市 安土理恵

うっかりもちやっかりもいい孫誕生
さよならをしてからどつとまわる酔い
三日月に嘔われている酔っている
かち合つた行事楽しい方へ行く
見抜かれぬうちに封印します 恋
生前葬素敵な形かも知れぬ

東広島市 福島 万年

人間の臭いを消しに山へ行く

地響きは猪か戦車か防衛省

プロ並みの妻の散髪五十年

美しい国の崩れは見たくない

お早うさん監視カメラに手を挙げる

病人を見舞って元氣いだいた

鳥取市 夏目 一 粹

ほどほどの不便が人を人とする

辛口のことばの中に沈みそう

ケチンボも惚れると金に糸目ない

記憶力使い果たしてしまいそう

人と人向き合うことは窮屈よ

いじめてもいじめられても母は泣く

鳥取市 近藤 佳子

傲慢なところは死んでから直す

トンネルをくぐって草笛のくにへ

老い進むしつかり歩いてるつもり

子の意見一旦褒めてやる事に

苦手にはつい目札で遣りすこす

海 夢見ているのだろ目刺したち

堺市 宮本 かりん

ついうっかりなどと誤魔化す物忘れ

ばあちゃんも弾けるような笑い声

その内にわかるだろうと五十年

えくぼもう笑い皺へと移行する

うぬぼれの勘に頼って火傷する

ふんわりと春の息吹が風に乗り

鳥取県 谷口 次男

列島の血圧上げる法改正

政治家が生活保護を受ける気か

思い切り叩き直せよ政所

冬眠を忘れたクマの放浪記

政治家よ保身離れを潔く

六カ国お手々つないでバラバラだ

尼崎市 田辺 鹿太

某月某日脳こうそくにて入院

怖いねえ脳を輪切りにする器械

終日をベッドで暮す空しさよ

何処へ行くにも点滴を道連れに

年甲斐もなく女房が恋しいよ

生きている証ばつちり目が覚める

三田市 堀 正和

せめぎ合うまだの頭ともうの足

肝臓が週休二日主張する

カラオケが終るマナーとして拍手

ただいまの声で勝ったとすぐわかる

心理学学び未だにひとりもの

またラッパ吹いてるきつと楽天家

シドニー 坂上 のり子

美しい国という語がばやけてる

美しい日本をダメにした政治

富士山のように日本を誇りたい

差別語になりそうメリークリスマス

職人を目指す迷いのない二十歳

国分寺市 野崎 勝

おらが年猪里を駆け回る

合理化の波に母校も消えていく

好景気年金者には絵空事

パソコンの賀状に個性消えていく

見せられる背であつたかと振り返る

さいたま市 星野 育子

ガラス窓微かな曇り温かそう

過不足を調整しつつ余白埋め

批判してじゃあどうするか言わぬまま

全力投球今ラストチャンスだ

武器はまだ未使用のまま女坂

日高市 根岸 方子

香水を変えて一気に春が来る

自信ある農産品に顔写真

青臭い意見も入れた祭りごと

チャーハンに松の実入れる息子流

ガイド嬢寝言にまでも節がつく

柏市 河野 桃葉

譲歩した言葉の中に棘を見る

先走るメディアに地球退化する

胎動のうねりに耐えて生をうけ

ふくよかなお尻に椅子が耐えている

充電の時間は嫁と花を分け

柏市 永峰 宣子

良心はどこに払わぬ給食費

継続は力ファイギョアに華が咲き

機内泊眠れず着いたのは昨日

病弱の妻よしっかり主夫をやる

正月の生花に庭の菊も足す

佐倉市 岡井 やすお

靖国へ行くなと念を押しに来る

防衛省元来た道をトテテタ

お笑いとスポーツに現ぬかす民

高校駅伝外人さんの展示場

瓜坊とラッキーマンへ真つしぐら

東京都 岸野 あやめ

ばあちゃんも子供に還る雛あられ

捨てるもの捨てるにしても礼儀持つ

ひとりでも平気映画も指定席

カラオケを褒められ焼け木杭に火

痛み止め注射を受けて出る法事

東京都 長谷川 康子

咳の人避けてソートと息を吸い

健診日マスクだらけに逃げ帰る

指揮官はママ年末のお買物

初詣で小切手混ざるお賽銭

シミの手にファンデーションを塗りたくり

東京都 清原 悦子

土壇場で思わぬ人の手が伸びる

漂白で汚れがおちぬ子の元氣

風と泣き風と笑って人の道

まだ夢があるから出せる絵具皿

効き過ぎる薬に不安ふと思う

東京都 小川 賀世子

孫受験少しはずんだ初詣で

合格祈願絵馬に心を通わせる

亥年生まれ守りに脆い男です

度忘れに一人芝居の日も増える

バッグからヒョイと眼鏡が現われる

八王子市 播本 充子

新しいパズルと過ごす三が日

悪気などさらさらないが無関心

時どきは正氣に戻る洗濯機

大根を漬けねば義母さんの忌明け

オカリナを習っています淋しがり

横浜市 菊地 政勝

出てこない言葉を濁す薄笑い

前例がないと提案反故にされ

成長がまだ続いている爪と髭

寛大なお咎めですむ酒の席

褒め言葉副作用などない薬

横浜市 小野 句多留

合席の子連れが睨む昼の酒

小競り合う果てに男とゴミ袋

まあまあで話題をそらす年の功

百均でうん千円の馬鹿を買う

紅白を文句タラタラまた見てた

可見市 板山 まみ子

嬉しくて寂しくて飲む琥珀色

その先を聞きたい酒が酌にくる

納豆を完売にするテレビジョン

改制をずっと待つてる離縁状

連れだって今年も拝む初日の出

可見市 鶴留 百合

迎春の旅行はじける親子の目

元旦も営業してる冷蔵庫

ひとり夜のやはり残ったおせち食べ

携帯へしかと納める初日の出

孫が去りまず温泉で腰伸ばし

犬山市 関 本 かつ子

大津市 中 宗 明

身の丈の幸せ孫にお年玉

皆帰りやつと炬燵で寝正月

たつぷりの湯舟素直になれと言う

長靴を揃えて雪の初句会

職歴は聞かず語らず趣味の会

犬山市 金 子 美千代

猫の手をはめておだてて大掃除

湯気たてて帰りを待っているおでん

遺産分け平等という不平等

まだけんか出来る元氣な夫婦箸

引つ込め時探してる私の角

犬山市 吉 田 幸 子

夢足して歳だと言わせないパワ―

どん臭いけれどじわじわ味が浸み

朝市の訛りが効いて買う土産

タイミングはずさず酔って愛を告げ

踏んばれる若さ宝の山と知る

静岡県 蘭 田 猿 杵

お疲れさんほつと安らぐ除夜の鐘

初売りへ猪突猛進福袋

綿入れを着た猛進はたかが知れ

名刺にガイド余分なことを言う

ダイエット10キロ痩せて胃を失くす

限界を妻が決めてる酒煙草

飲むほどに大言壮語きりが無い

指名され慌ててページ探すふり

路地裏は線香花火主役です

どっこいしょいつの間にやら出てしまひ

京都市 高 島 啓 子

亀もまた上昇気流待っている

水を得て石久びさに動きだす

冷や飯を食って石ころ道を行く

料理本そろそろおからたいしている

電子レンジ味方にカレー出来上がり

京都市 都 倉 求 芽

たつぷりの冬陽へ辻地蔵こくり

石ころもその氣で見ると精こもる

二合炊く一日半の食い扶持に

マンションの水で神棚お仏壇

マンションの二階で底冷えから浮上

京都市 三 宅 満 子

美しい国美しい家まず掃除

へだてなく注ぐ初日があたたかい

横文字を使って値上げはぐらかす

初夢も見ないほど寝るお正月

初詣でいくつになっても福が欲し

京都市 榎本宏子

魔法には魔法で返すおつき合ひ

いつの世も大奥はある女偏

一輪の花に会いたく登る山

同居して知りすぎたこと幸不幸

平凡を嫌い池から出たカエル

亀岡市 井上森生

孫毎に子孫繁栄の守り札

遣伝子が喜ぶようにいつも笑み

丁寧に書けば返事に喜々の文字

ガム噛めば秘密パワーが呑み込める

生かされて佳句も没句も万句帖

長岡京市 山田葉子

ふるさとの匂い流れをさかのぼる

流されたところで幸せ紡いでる

辛い日々寄り添うことが出来ただけ

ロボットに教えてやろうストレッツ

ロボットもそのうち恋をするだろう

大阪市 神夏磯典子

大寒波守ってくれる皮下脂肪

即答がないから望み捨てずいる

食べるのと喋るのはまだ達者なり

出張の靴に妻がかくれてる

褒められてまだ続いているボランティア

大阪市 川端一步

九条と書いたコップでティータイム

文化予算そんなに削りどこへやる

初選挙どんな絵を書く孫二十歳

列島が右へ行くので左向く

七十路の十年日記迷ってる

大阪市 古今堂蕉子

目出度くもないが乾杯するグラス

うまかったな高かったわね価値のずれ

ほめてほめて夫に家事を教える

慈雨求め写経の寺に行ってみる

福袋こりずに三つ買いました

大阪市 前 たもつ

聖子展まあほちの句に出会い

僕の漢字今年は悠と決めている

誰とでも無理に付き合うことはない

かゆいところに届いてくれるいい歯科医

熊猪猿も食べもの欲しいだけ

大阪市 岩崎公誠

迎え酒男の意気という錯誤

返盃に嘘がぶかぶか浮いている

邪魔になる歳まで生きて邪魔にされ

嫁紀香陣内のギャラはね上り

三月は本がゆつくり読める月

大阪市 榎 本 日 出

思いきり化けてみたいな厚化粧
色いろなベツトボトルと暮してゐる
友達の輪をすっかりと変えた趣味
食べもので命の長さ決まりそう
淑女です喋らぬ方が良いらしい

大阪市 川 原 章 久

こつこつと昔が匂う法善寺
利き酒は白地に紺の渦の盃
背中から金に追われて息が切れ
妻の手に踊るとゆとり湧いてくる
飛行機雲帯解けに似た遠い空

大阪市 西 川 更 紗

久方の里の雑煮に母想う
新年に誓った言葉もう忘れ
難病と闘う子等のたくましさ
人らしく生きて悩みがたとある
許さねば闇のトンネル抜け出せず

大阪市 福 岡 末 吉

十の指数える願ひ神に告げ
年代の櫓の鴨居父の影
なけなしの知恵も妻には底を突く
二倍生き父の歩みし道半ば
人はみな人の謎解き道拓く

大阪市 渡 部 さと美

清水寺にわか舞妓も美しい
初もうで神に石段ためされる
天上の女神雪まぐ笛太鼓
大阪に転ばぬほどの雪ほしい
ゆりかもめ群れとぶまるで動く花

大阪市 中 村 叡 子

欲張らず運にまかせて八十路まで
正月はひねもすのたりテレビづけ
成人の式にありあり地方色
毛利さん宇宙と南極さわめます
南極の基地夏さ中白夜なり

大阪市 板 東 倫 子

春の音七草粥を煮る土鍋
留守電に旅の誘いと従弟の計
リストラの団塊にまだ親が居る
我が家では孫がパソコン大先生
好景気ほんまかいなと戎さん

大阪市 星 野 きらり

落ち椿流れながれて川遊び
落ち葉踏む足音楽しドレミファソ
佗しいがでも健やかにバースディー
ひとり者冬至南京もて余し
正月は老いもお神酒でさくら色

大阪市 清水絹子

陋屋も春が来たよと青畳

朝刊を捲る指先真人間

猪突猛進時に自戒を子に伝え

お金ある人ほど目先思慮深い

元気でさえあれば年金思うまま

大阪市 近藤 正

イラク参戦反省しない国一つ

心棒がぶれた頭の独楽が舞う

任命者責任辞書にない総理

褒められるよりも小遣い欲しい孫

目途立った一番槽に彬の碑

大阪市 榎本舞夢

人が好き声がかかるととんでゆく

会うたびに元気な友の氣をもらう

迷惑にならぬ程度にハメはずす

一張羅でかしこまってるやんちゃくれ

亥の年と言えどゆっくり楽しもう

大阪市 小谷 集 一

いじめではない腕白の正義感

七癖の一つひとつが親譲り

間違うと振じれてしまう思い遣り

慟哭の涙は胸の底で湧く

いつも夢食べているから若返り

大阪市 奥村 五月

母ひとり過疎で聞いている除夜の鐘

財布まで師走にうかれ走りだす

離れずにビタリ寄り添う貧乏神

脳味噌が体に悪い酒を呼ぶ

還暦の母もごそごそ泥バック

大阪市 升成 好

あいまいに笑って敵をつくらない

損得を考えている生返事

使い道だけはできてる万馬券

ご意見はともかく爛が冷めてます

輪がまるいきつと誰かが譲ってる

大阪市 大川 桃花

昼食には帰ると猫の置手紙

捨てるのが嫌で人形買わぬ主義

手を広げ待つ人が居て走る犬

あての無い旅です走ったりしない

風呂もなく文化住宅などと言ひ

大阪市 伊藤 博仁

年越のそばを買わずにチョコレート

娘の悩みまともに受けて胃腸薬

仲人の死ぬまでくれる金箔酒

服を着てボチはその気で構えてる

乗り遅え無事に帰って胸を張る

大阪市 松尾 柳右子

大阪市 井丸 昌紀

夕方ウォークのために昼寝する

閉店へ役所保健所目が回る

河原に若者犬とサッカーする

青年はポスト知らずにメール打つ

団欒に励まされてる受験生

大阪市 津守 柳伸

親孝行する気にさせる露の臺

初日の出拝み上昇気流読む

シルバーへ苺届いた盛り上り

天国へ紡ぐ命のボランテア

凍てついた月へ団地の窓明かり

大阪市 津守 なぎさ

山奥の野生に触れる奇絶峽

蕾から袋をかける桃の花

音読のカレンダー読みなつかしむ

何もせんのに如月の手が荒れている

萩焼きの湯呑みと萩を恋しがる

大阪市 池上 清治

脳血管異常は無いがよく忘れ

おみくじは凶 福引きはテレビ当て

節料理食べ尽くす孫やって来る

料理だけ心に残る寺巡り

昇り降り手と手取り合う足になり

後悔がたつぷり詰めてある日記

二三日行方不明になつてみる

忘れたい事あり今日も酒を酌む

煽てられこき使われる鍋奉行

二日酔いものの坂が登れない

大阪市 小糸 昭子

外泊は子の贈り物クリスマス

干柿に込められている手間と情

ベッドでは加速してくる失語症

血を採られ針を刺されて払わされ

汚物洗う若い白衣はけなげだな

大阪市 岡本 久峰

美しい日本赤字どないする

夕張の破綻にかいま見る未来

平成の龍馬一体どこにいる

生きのびて何の未練も無い浮き世

消費税上げて赤字が減るのやら

大阪市 小泉 ひさ乃

激安にバラ百本も夢じゃない

テレビ消しひとりの音と水の音

降り続く師走の雨を持って余す

一言の重さに迷いふつ切れる

美しい国は雑巾絞りから

大阪市 熊代菜月

思い出が遠退いてゆく昨日今日
母眠る身延の山の虎落笛

上寿までまだ間があるとフラダンス
雑草の強さにおくれ取っている
うっとりとして見とれてしまう娘の若さ

大阪市 津村志華子

母の情包みこんでる握りめし
ひとりでは侘しすぎますおでん鍋
啓蟄に虫も私も動き出す

深爪に心をよぎる悔いがある
意地悪な鏡わたしにあかんべえ

池田市 栗田久子

はだか木の枝をこぼれてきた朝日
わけあってあなたを招かないという
後悔が心にかけて残る

思い一新もつれた愛をときほぐす
やぶこうじ冬枯れの中春の色

和泉市 横山捷也

ウソつかぬ鏡が怖くなりました
母が逝く真相教えてくれぬまま
クシャミ出て旅のプランを練り直す

兄弟の亀裂を深くする遺産
一寸だけ肩書き欲しい席に居る

和泉市 西岡洛醉

女房のお荷物だった陽が落ちる
安楽に暮らす余生に椅子きしむ
妻の知恵一ぱい詰めて市場籠

ロマンズがあるのか猫のうなり声
朝刊の匂いに今日のドラマ開け

泉佐野市 山本蛙城

有難や四季折々の花の国
マグロ産む大学が好き理屈なく
労りの一つかお茶が淹れてある

単細胞自認チャンバラ破邪が好き
君が代のB面に聞く海征かば

茨木市 藤井正雄

引継ぎに部下の酒量も聞いておく
先方の都合に合わし借り返す
七人の敵一人逝く数珠を持つ

孫を見に来いと留守番頼む腹
ためらいをうなじに見せて縦に振る

大阪狭山市 矢野梓

初詣で先ずは去年の札を言い
引くみくじみな吉ばかり松の内
初日記ペン弾ませて夢を描き

仕舞場所変えたところをもう忘れ
石頭相手の石頭を笑い

交野市 田岡 九好

いとけない子に打ちつける身の不如意

まだ生きていますとだけの年賀状

荷物持つ手で雨傘はさしくい

プロイラーみたいになぶ牛井屋

はれものに触るようなり祖国愛

交野市 山川 日出子

剣道の達人強い目の光

癒やされる孫の手作りオルゴール

大賞を部屋のお掃除ロボットが

田舎の娘都おどりをうつとりと

雨の日に茶柱立つて心晴れ

交野市 森本 弘風

ばあちゃんの黒豆が好きお正月

三億円かすりもしないジャンボくじ

金婚へまだ五年ある妻の古希

長髪を切つて井川のニューヨーク

スーツ着て正座に耐える一周忌

河内長野市 水谷 正子

大切な人にぐたぐた文句言う

夕刊のないのも正月らしい刻

達筆な賀状に少し嫉妬する

戎さん晴れで景気が盛り上る

寡婦一人時間たつぷり思うまま

河内長野市 山岡 富美子

大切なものを見えなくするお金

春菜の芽摘んで残った指の冷え

たつぷりと日和見主義に塩胡椒

思い出を大切にしてゴミ溜まる

大切な友が旅立つ冬銀河

河内長野市 坂上 淳司

日和見を嫌い冷や飯ばかりなり

日和見を馬鹿な奴だと風見鶏

いい日和老いらくの恋芽生えそう

神籤吉さてバチンコに出掛けるか

神籤吉も一度引くと凶だった

河内長野市 村上 直樹

おいお前口が裂けてもいえません

腹の虫もう騒ぐなと迎え酒

変化球投げてあれこれ風を読む

ほとぼりが冷めたら他愛ない喧嘩

返盆に男の意地をなみなみと

河内長野市 植村 喜代

晴着きて精一杯に袖をふり

いつ見ても京はゆつくり秋が行く

お正月時間ばかりが経って行く

人生はこんなものかとままならず

リーガロイヤルに任せてお正月(お節)

河内長野市 井上喜醉

がむしやらに亥年を生きる喜寿の春

本名を隠しふたまた好きな趣味

箸紙に恋のいたずら走り書き

モンゴルとハワイに欲しい相撲部屋

天気図のダルマが凍る寒気団

岸和田市 原

さよ子

春くれば養老院となるわが家

立派とは言えぬがやつと一人立ち

目薬をさしつゝ趣味の腕磨く

玄関の菊ご主人の趣味を知る

入れ歯まだ出来ずランチはパンにする

岸和田市 井伊東吉

腹減らし兼ねて歩いた初詣で

友が逝く礼服仕舞う暇なし

初春に猟奇事件がまた起きる

数の子の味を覚えた十五歳

チーム力不安の過るタイガース

岸和田市 岩佐ダン吉

九条を語る熱なら惜しまない

人間の数だけ人を好きになる

聞き上手だけが持味だと思ふ

目の光る男が梓に入らない

逃げるなとまた母さんの声を聞く

岸和田市 土橋房枝

病む人に笑い勧める治療法

人ひとり説得出来ぬもどかしさ

我が家には我が家の歴史子に伝え

旅に出て我が家の良さに気づく夫

飽食の反動がきて慌て出す

岸和田市 森元ふみよ

セールスが美味しい言葉置いて行き

いのししのえとの彼女はおしとやか

リフォームで亡母のコートが生きている

看板に湯豆腐あると貼つてある

古稀が来て自由な空間たんとなる

岸和田市 雪本珠子

我儘なわたしを諭す丸い月

苦も楽もあつて迎えた金婚譜

花言葉信じた時代セピア色

長電話見兼ねてそつと椅子をだす

移りゆく季節が色を変えてゆく

岸和田市 堤 檣代

ふれあつてみれば味ある人ばかり

ちよつとだけ口紅を濃く胸をはる

肩みあげとれた孫の目見あげてる

なにもせずまたきやはつたお正月

ひたすらに使つた膝がわらつてる

堺市村上玄也

拝まれて頭擡げる義侠心

人間が世話する老いた介護犬

年寄りに食い放題は高く付き

酒とろり話だんだん大きなり

惜しまれてディープはラストラン飾る

堺市矢倉五月

膝痛む話にみんな寄って来る

はしゃぎ過ぎ傍へ気配り忘れてる

頼ゆるむほどのお世辞に殺される

調子づきしゃべり過ぎたと悄気ている

転機だと言われるほどの怪我で済み

堺市山本半銭

お願いを控え目にした神詣で

年寄りの恋物語すがすがし

月中天噴水は今伸びに伸び

旅人へ月は夜毎に満ちてくる

誰彼に感謝する事ばかり増え

堺市源田八千代

初詣で木彫猪ゲットする

還暦を祝い十年日記帳

還暦に腹八分目物足らぬ

受験子へ郵送にするお年玉

亥年こそスローライフをモットーに

堺市加島由一

つんとして成人式にゆく着物

おとろえも老いも流れる川のように

陽炎の如く三月去ってゆく

成人式何をしてたか記憶ない

子の意見笑顔たやさぬように聞く

堺市柿花和夫

ジーンズの穴で心を隠してる

乾盃のあとは手酌でおれおまえ

悠悠とタナボタを待つ深海魚

生きている限り明日を迎え撃つ

究極のウォームビズだ猿だんご

堺市西村りつえ

花持たせ笑い転げる古希の坂

ハッスルに我が身忘れる勇み足

悔しさに火中の栗が飛び回り

セールスに心よまれた無駄話

移り気の弾む心を持て余す

堺市齋藤さくら

里帰りゆつくりできたのが土産

団塊のラベル死ぬまで付いてくる

お茶の間で溜息ついた高い膳

うっとり晴れ着姿もいいものだ

お茶漬けの用意している二日酔い

堺市 志田 千代

エッフェル塔よりも通天閣あたり
庭の松三毛が爪とぎしています

金魚鉢洗って客を出迎える

うつとりとさせてはくれぬアンコール

ガラクタはまあだゴミではないのです

堺市 奥 時雄

ファッションショー着ては歩けぬものばかり

大病で贅肉とれて喜べず

パソコンの一日削除から始め

幸運の女神がよそへ行ったきり

中座する頃合ですと目で報せ

吹田市 早川 棲世

句を学ぶ今年も一年生である(八老 八憲)

三が日飲み今年への自信とす

世は捨てていないが賀状は雅号

賀状くる絆の一つ悔いを秘め

自分史の半分 診察券の束

吹田市 山本 希久子

損したような得したような二月尽

春便り母に絵本を読んでやる

前頭葉海馬に喝を入れてやる

現実はあることなし大根煮る

春のポスト華やかそうで淋しげで

吹田市 穴吹 尚士

世知辛い世なのに寿命だけ延びる
いつまでも貧乏神に絡まれる

この国の恥の文化が消えていく

叱られる味を知らない子供たち

イエスマンばかり集める社長室

吹田市 大谷 篤子

賑やかな妻がだんまり続けおり

騒がずに運命線をながめてる

バラ色の噂ふんわり雲に乗り

打楽器がちよつと鳴りだし恋終る

気の置けぬ人どどつぷり話し込む

吹田市 瀬戸 まさよ

あな楽し百均の店散歩する

古稀迎え京の顔見世明日オペラ

法事より日々に拝めと和尚さん

料亭の屠蘇で正月老夫婦

大国のエゴ潰したい地球です

吹田市 野下 之男

どんぶらこ美しい国何処へ行く

いざなぎを探してみたい寒の町

団塊が心ならずも早ゴール

お互いの弱点を知る円い仲

ボクチャンが俺に変われば持て余し

吹田市 太田 昭

図書館の隅に団塊吹き溜まる
吊り皮に祈る形で終電車
軍靴の響き知らぬ世代の戦論
妥協する握手こぶしが固過ぎる
故郷の水コンビニで買わされる

吹田市 須磨 活恵

焦らずに自分に合った風を選ぶ
ライバルは何時でも私自身です
どんどんと進む時代に眩暈する
一日が無事で終れば善しとしよう
まだ元氣歳を気にせず赤も着る

吹田市 木下 敏子

生駒山いつもの顔で初日の出
書き初めの命を太く一字書き
やりたいこととしてふわふわと早や十日
のびのびと書くわたくしの一行詩
振り袖に包まれ孫はもう大人

高石市 浅野 房子

正月も雑煮も一人馴れたもの
唐突に自分が可哀想になる
どさくさに紛れ着て行く服がない
雑用に追い回されているのろま
席ゆずるやさしい人が嫁ならば

高槻市 井上 照子

ロボットも愛のことばを仕込まれる
注目のハンカチ王子学選ぶ
鍵一つ持った一人の責任感
思春期の低年齢化憂いあり
八十路にもおしやれ楽しむ春になる

高槻市 瀧本 きよし

転がってきた運の端っこギユと掴む
終りまで視ようとするが寝てしまふ
子どもらの声が聞こえぬニュータウン
刺身買うマドンナと会うマーケット
夢だけで終ってしまうジャンボくじ

高槻市 乙倉 武史

初夢の期待萎んだ悪い夢
書き初めへ親の過保護を垣間見た
賽銭の額とは別にねがい事
大吉は悪い氣せぬが信じない
息災を祈り七草粥啜る

高槻市 西谷 治三郎

師の影を踏まずと言った頃が華
関節痛無理してなんとか赤暖簾
やっこらさ二階へ来たがなんのため
軽々と最敬礼する社長さん
歩道橋りハビリ代わりに使ってる

高槻市 指宿 千枝子

わが心遠い記憶の旅に出る

念願の此処は地の果てロカ岬(ポルトガル)

バルト海の夕日日本と同じ赤(サンクトペテルブルグ)

雨の日は雨の姿でノルウエー

三峡を下る船中李白の詩(中国)

高槻市 執行 稲子

やんわりと芯の強さの京言葉

片想い握手のうずき忘れない

嫁もはやばあばの似合う負んぶ紐

苦勞性嫌われながら世話を焼く

弟のやんちゃに慣らされて兄貴

高槻市 峯村 勲弘

過疎の里時はゆっくり過ぎて行く

ミラノ発ファッションですかいまいちね

DNA朱に交われどマイペース

年金のニュースに耳をそば立てる

いじめられ大きくなった僕だって

高槻市 左右田 泰雄

痛いところ突かれ返事も上の空

聞かれても予定は未定とはぐらかす

今日は良く歩きましたね万歩計

古い殻脱げば明日が見えて来る

バスが来たけど走れない重い足

高槻市 傍島 克治

いい夢を見るに枕が堅すぎる

花片が流れ小川に春が来る

神々しさは大和三山春霞

ゆとりある教育ゆとりなき家計

花よりも医者の許しを待つお酒

高槻市 生田 義一

紅白も老いては遠き過去の夢

幸せだ今年も拝む初日の出

初詣で知らぬ同士でおめでとう

老いたなあ賀状の数がぐんと減り

故郷帰りあんたはどこの誰だっけ

高槻市 富田 美義

くじ外れお蔭で道を誤らず

雲流れ人も流れて忘れられ

出来ちゃった仲を引き裂く家の紋

流れ星恋の行方は問いません

ゆさぶって命の音を確かめる

高槻市 佐甲 昭二

大声で怒り心に穴が開く

時よ止まれ今夕焼けが美しい

細腕でやんわり迫る変化球

仲間の背見てから渡る丸木橋

呪縛解け気ままに走る縄のれん

捻挫して安近短の旅も夢

家事全て忘れて仰ぐ旅の空

叶うなら時間と金が少し欲し

談合も天の声には逆らえず

天二物与えずとかを真に受けず

高槻市 杉本義昭

燃えるよな真つ赤なシャツの彼が好き

雑草の恋は可憐で美しい

パンジーを植える幸せ呼びたくて

もう一句出るまでコーヒー入れましょう

耳よりな話どこかに落とし穴

豊中市 安藤寿美子

ひとり酒川柳上戸とはいかず

百歳まで生きる気はない安心しろ

福袋なるもの買った事がない

健康であれば何でも美味しくて

手抜き料理心中忸怩たるがあり

豊中市 山門タミ

三が日過ぎればもとの寒い日々

私の良しも悪しきも親ゆずり

親子孫揃いぶみだよ当り年

年寄りの話の種はポツクリ死

青春を懐かしんでる老いた猪

ばけぬよう店の存続老いませ

社会人増えて年玉支出減り

祝儀にと赤兎に包むお年玉

決算と正月返上店籠る

硫黄島迫力もらう元軍人

豊中市 水野黒兎

とろろ汁とろりと過去をつなぐ味

ホチキスの針一本も燃えぬゴミ

戦後派はもつたいたいと食ベすぎる

痕跡のカケラ残さぬ削除キ

ケイタイは通信機器の枠を越え

豊中市 藤井則彦

上役の臭いも取れたサウナ風呂

旅先の空に聞かせる悩みごと

舟を漕ぎながら聞いたシューベルト

自画像を描くたび見えてくる短所

うっとりとするほどよくも化した妻

豊中市 江見見清

幸せな証拠だ早く目が覚める

好きな人にちよつとお酒を注ぎこぼし

揉め事を棚上げにしてペアルック

無防備を守りの武器として生きる

うらおもてないので少し頼りない

富田林市 藤田泰子

低気圧神経痛が目覚ます

スケジュールみんなこなして次の夢

こぼれ種ちんげん菜のうまいこと

まるい月イライラしない無理しない

二人きりなのにテレビが二台ある

富田林市 中井アキ

誉められているのか耳がこぼれ

得をした事だけメモに残しとく

ハンガーにプライドひとつぶら下げる

生真面目な夫にいつも泣かされる

想い出を手繰り寄せると雨の音

富田林市 大橋鐘造

二人ならきつと渡れる丸木橋

前向きに生きる男の広い視野

人間が変ってしまう袖の下

平成の乱れにほしい目安箱

まっ白な心で春を祝う酒

富田林市 片岡智恵子

信号を待つ間に思い出す用事

薬漬けほんとの長寿とは言えず

方向音痴地図を見てなお迷い

老人会の旅世話人が疲れ果て

二歳ずつ年をとるよう老いの日々

富田林市 稲川恵勇

ありがとうたつた五文字の温いこと

職下りて凡夫は妻に嫉けられ

あいまいにしとけば済んだ妻の乱

忘年会ハシゴが出来た若かった

朝が来てスツピンになるネオン街

寝屋川市 江口度

介護しておこう自分の老後のため

頼りたよられやってくる介護

蔭の部分へ光をあてるボランティア

一人暮らしの人へ弁当持つて来る

一声にみんな集まるボランティア

寝屋川市 太田とし子

山よりも大きな猪と戯れる

リサイクル頭にリボン掛けてみる

ゆつくりと歩いて急ぐかたつむり

春ですねチークダンスもいいもんだ

さあやるぞ猪鹿蝶もハーケヨイ

寝屋川市 籠島恵子

至福だろう家の中から初日の出

平穏を願い忘れた初詣で

お話のついでと用意されている

盛り上げるころには丁度お開きに

川柳を語る色気を語りあう

寢屋川市 森

茜

羽曳野市 徳山 みつこ

路の蔓繻く在りし日の微笑

決心がついてまっ赤にななかもど

雁風呂のぬくもり貰う北の宿

戦争を知らぬ首相へ抱く不安

まっさらの自転車ずつと雨ざらし

寢屋川市 平松 かすみ

公園に大人の遊具出来ました

体重は子供並でも大人券

捨てる物出来てよろこぶ仮住まい

宅急便届く便利なケイタイだ

郵便は番地シールで届けられ

寢屋川市 坂上 高栄

怪我の神心の油断ねらつて

車椅子我が物にするむずかしさ

この年齢になつて味わう紙おむつ

合掌の指のすき間をじーっと見る

4階の空滑空の鳩番

寢屋川市 富山 ルイ子

友からのお年玉つい頬ゆるむ

気くばりがありおらかな友を持つ

三連休孫の料理に舌鼓

妹も優しさを持ち合わせてる

高架から見る西成は静かすぎ

亡き親に代り蠟梅出迎える

温暖化ふと懐しむ虎落笛

美しい国を汚しているアナタ

二人して一人前でよしとする

贅沢なことに米ならたとある

羽曳野市 酒井 一壺

あいまいな顔をしてるが決めている

生き方の原点謙虚さ忘れない

満点の妻で心が休まらぬ

限りなき愛の深さに溺れてる

好きなので弱点すべて見せておく

羽曳野市 吉川 寿美

明日という日を信じては傘を干す

わたしが吊つた棚から落ちて来た寓話

考えて思い直して赦せない

結論は出ぬまま鉦とれたまま

なす菜すずしろ姑から嫁へ口うつし

東大阪市 北村 賢子

気のおけぬ男と交わすうまい酒

ありのままの自分に戻る二〇〇七

メル友も出来て一人前の六十路

居てほしい時には居なかった夫

昇る陽を拝み夕陽に感謝して

東大阪市 中岡 妙

朝焼けに今朝も元氣と弾む足
玄米に馴れたが白米旨いこと
天の邪鬼抑え込めずにまだ迷い
油断した日記の頁埋まらない
物足りぬ温さで丁度良い夫婦

東大阪市 笠井 欣子

伝来の珍味も入る祝重
丸い背傘寿の厨守つて
人事と思つた傘寿来てしまひ
御神酒も頂けません運転者
横綱が負けて何やらホツとする

東大阪市 米田 水昇

ふくれ面見せなくなった餅の顔
網で焼く餅のむこうに母がいる
覚えてたはやほやの字で子の賀状
空みくじ枝に結ばれ花になる
おしゃれしてどこまで続く空元氣

東大阪市 佐々木 満作

厳かに歌会始め朗朗と
運不運巡り合わせは紙一重
この盃を受けると裏がありそうだ
運勢の流れに棹を取られそう
前進の号令あの日甦る

枚方市 宮川 珠笑

目で苦痛告げる介護をするホーム
死は前に見えず後にしのび寄る
剃った毛が生え揃わない再手術
父戦死信じないまま逝つた母
薬漬けされてホームの主になり

枚方市 寺川 弘一

ジグソーパズル完成したらつまらない
通過する駅の名を読む一人旅
昼の酒理由をつけて飲んでいる
生きている間背伸びを止められぬ
迷わずに成仏しろと他人事

枚方市 丹後屋 肇

一善を果して胸が軽くなる
食べながら眠ってしまう孫の守り
昨日今日明日も我流で押し通す
最後尾夢遊病者のゴールイン
列島のくびれたあたりに故郷の名

枚方市 森本 節子

八十八回いろんな正月無事すごし
二日からパンと珈琲で朝食を
天津甘栗爪たてながらテレビ見る
聞えない分しっかりと見ておこう
桃源郷か浄土だったか綺麗な夢

枚方市 二宮山久

正月は孫から元気もらつてる
お正月電話鳴る鳴る人もくる
お正月妻は元気で孫のせわ
幸せな顔がそろつて三が日
年賀状出さぬ人からつぎつぎと

枚方市 伊達郁夫

網渡り上手になつてからの鬱
鯉と僕手の鳴る方が気に掛かる
輪の中に誘われスベアーだと気づく
終着駅旅の疲れを捨ててある
トリックの箱の中だとまだ知らず

藤井寺市 鴨谷瑠美子

花の名は知らず香りは覚えてる
平服で良いとはとても難かしい
浮ついた話題もなく疲れます
脇の汗悟られた時負けていた
こつそりと逢いにゆきたい腰が浮く

藤井寺市 高田美代子

顔の皺にアイロンかけているエステ
座布団が土俵に舞つて綱に土
ストレスを溜めてないのはホームレス
やさしい人を待つてる野良猫の目
まだ勘に頼れるボクの目分量

藤井寺市 太田扶美代

失敗を溜めてしまった小抽出し
内緒ですロングブーツを買ったこと
私を旅好きにした山野草
しきたりを変えて今年は寝正月
玄関を飾る世間体を飾る

藤井寺市 鈴木いさお

今朝の夢思ひ出してはひとり笑む
気にしてる一重瞼が僕好み
人恋し今夜もネオン街をゆく
姑と一緒に墓は遠慮する
二日酔いの朝は禁酒をマジ思う

藤井寺市 中島志洋

福耳が儲け話を聞きもらす
鐘一つ自慢の鼻をへし折られ
大関が揃うて勝てば大見出し
やんわりと痛いところ突く京訛り
好きな人母に会わせる雛祭り

藤井寺市 若松雅枝

一昔前の晴着で初詣で
孫が来て笑い溢れる窓灯り
食べて寝て遊ぶわたしが髄鞘炎
病院へ行く時だけはこざっぱり
好奇心あつて実行力が無い

箕面市 出口 セツ子

夫より何でもできる子が頼り
後悔をせぬ生き方を子に願う
頼りがいないが甘えて欲しい親
教えてはくれても使えないネット
パソコンを本能的に拒否をする

守口市 井上 桂 作

気休めの言葉に弱い老いの坂
人間を味わう古希の詩楽し
居酒屋をであれば歩いてとほとほと
お互いに信じて生きて半世紀
電卓で棚から消える国語辞書

八尾市 宮崎 シマ子

あれ以来酒の量まで妻監視
働きものかどうかみている福の神
何にでも首突っこんで友が増え
自由になるプライバシーは畳一枚
ほどほどがぎりぎりになりそして諦め

八尾市 高杉 千歩

きれいごと並べて春を呼んでいる
底ぬけたように笑って芝居です
各停で膝を休める老いの杖
風呂敷に傘寿の知恵が生きている
美しく老いる明日も明後日も

八尾市 吉村 一風

余生もう少いけれど竹を踏む
ゆっくり二人歩み揃えて冬の雲
生き延びた十指それぞれよく傷み
生かされてありがとさんと手を合わす
妻の付録と思えばとても気楽です

八尾市 山本 宏 至

春一番河内は楽し桜色
絶叫マシン公園の花散らしてる
長生きをしてるいい耳持ってる
割り込みでやつとケリつく長電話
同居して慣らされました嫁の味

八尾市 村上 ミツ子

差別なく皆に正月やってくる
わが家の景気回復はまだ見えず
宝船沈まないかと気にかかる
派手な服纏ってこころ老いていく
幸せ色を塗り重ねたい余生

八尾市 生嶋 ますみ

一族の笑顔混ぜこむチャンコ鍋
後ろ向く勇氣もなくてただ走る
息子たちの暮しを覗いたらあかん
山を出る猿は人科にあこがれる
かくれんぼすぐにしたがる財布です

八尾市 長谷川 春 蘭

背をのばし休める鋏に赤トンボ

寺社めぐりバッグの底にペンとメモ

再会に遠いえにしがよみがえる

歳月は夢の如くに消えて春

とりどりの花息ついて春一番

大阪府 初 山 隆 盛

就職へ年玉一つ二つ減り

お湯の花名湯秘湯はしごする

歯みがきがよく減り家族みな笑顔

年金が老妻の扶養を認めない

立ち枯れの松にわが身をダブらせる

大阪府 米 澤 俣 子

同心団の家族の絆弛まない

煮こごりに遠い昔の母に逢う

只でさえまわらぬ首を寝違えた

マクドよりうどんの好きな戦中派

ペガサスのようだったねディープリンパクト

大阪府 野 田 栄 呼

年一度遠い友から来る元氣

気にかかる日毎ファッション変るアナ

子の朝寝甘い親です冬休み

山村に夢を与えた宝くじ

皺の顔眼鏡にオシヤレ託してる

大阪府 桑 田 ゆきの

金盃を宝としての父参寿

よく笑う娘といて心丸うなる

父と子の絆を手繰る風の天

遠回りしても探梅する歩幅

風邪神にお洒落心を奪われた

大阪府 前 田 ゆい

夜明けから夜更けまで開け寺の門

和尚さん駆け込み寺を自負してる

鑑定団家宝の夢を打ち砕く

一千万の積りの家宝二千元

無洗米だんだん怠け者がふえ

大阪府 澤 田 和 重

美しい国で弱者が泣いている

いつからか指にツバつけページ繰る

損してる顔はしてない五割引き

新しい姓で娘の手紙着く

野心家のニコニコニコに乗せられる

奈良市 天 正 千 梢

自然とは長雨つづく日もありて

道草がこやしになったとも思い

池涸れて民話は何処へ行ったやら

あすという未知の世界に夢をだき

あなどった浅瀬溺れたこと内緒

奈良市 米田 恭昌

賀状だけのつきあいだけどホツとする

定退は通過点まだまだやる気

通過する車内から見捨てる里

リハビリの豆と格闘してる箸

ベナント奪回虎の目が炎える

生駒市 飛永 ふりこ

羽子板と弾む姉との遠い日よ

愛犬の息の早さに寝付かれず

颯爽とサーファー達の白い波

潮の香に笑みが生まれる露天風呂

七草粥ぎくしゃくなども咀嚼する

香芝市 大内 朝子

カレンダー春の予定を待っている

親が子に心のおんぶしてもらう

とげとげの心が和む深呼吸

いい出合いハートに赤い花の咲く

早春の風に押されて逢いにゆく

橿原市 居谷 真理子

なみなみと注がせておくれ春の酒

青い目がこなす敬語と謙譲語

人間で笑いすぎて出る涙

おーい雲君も凍えて空を行く

人間の数だけ悲劇また喜劇

大和郡山市 坊 農柳 弘

燃え滾る男ロマンのお水取り

自分史に自己陶醉の夢一つ

煩惱をゆるりと解く写経堂

泣きごとを言えば軋み出す肋

火の折り水の祈りの二月堂

奈良県 渡辺 富子

かなくぎの母の賀状にある温み

売り切れへ納豆菌がせかされる

刃物みな隠して眠ることにする

しんしんと私の胸へ雪積る

民のかまど上昇気流待っている

神戸市 両川 無限

好奇心妻の本能かも知れぬ

本能を隠しストレス溜めている

出口まで来て確かめる忘れ物

天罰のようにとときどき恥をかく

人類の証ときどき不眠症

神戸市 伊勢田 毅

初詣で時には神を変えてみる

風評に郷里の牡蠣が揺れ動く

十二年亥年刻んだ災害史

あれからは少しの揺れもすぐテレビ

政治家の釈明ニュース欠伸出る

神戸市 山口 光久

相槌を打った時から狂いだす
わたくしをふんわり包む月の暈
凡人も期待されれば血が騒ぐ
折半した妻の名義が太りだす
試供品アンテナ張って風を読む

神戸市 山田 婦美子

お雑煮の湯気にゆつたりする気分
目が見えることそれだけでただ感謝
謙虚さを忘れず老いの境に入る
少子化で里に子供が見当らぬ
寒い夜は孫を炬燵にして眠る

神戸市 山口 美穂

寝正月かなわず忙しく日が過ぎる
ダイエツト暫くおあずけ春を待つ
パソコンの海豚がわたしを嘲笑う
言い訳が咽に詰って出て来ない
百均であちこち見てから買えばよい

神戸市 田中 章子

お正月雑煮でつなぐ姑と嫁
年変わる一瞬が好き除夜の星
田舎から星を土産に持ち帰る
一人の子産むにこんなに金かかり
いつからか母より妻の味に慣れ

相生市 中塚 礎石

力こぶ七十路八十路しわが増え
寝たきりへ花も一年四季めぐる
赤紙が父の文箱の底にある
立ち話水が入った雨一つぶ
宝くじ抽選の日を忘れてる

芦屋市 黒田 能子

凝りすぎた暗証番号出てこない
気持よく同じことなら引き受ける
実り多い生き方今日も汗流す
趣味ひとつやればやるほど奥ぶかい
予告なしもしものが起り出す

尼崎市 春城 武庫坊

八十路中ばを二人で越して来て至福
生き抜こう二人で米寿あと二年
整理整頓すると要る物かくれんぼ
風飛ばず羽根も踊らぬお正月
お正月どこにも聞かぬ下駄の音

尼崎市 春城 年代

あるかなきかの粉雪舞うと声を立て
運だめし今年は神を頼るまい
老いの命を無為に過ごしてなるものか
惜しむべし若い命のゆらぐとき
平和の願いごまんといてもいくさ尽きず

尼崎市 林 昭三

三浪がまた東大と勝負する
留守番の猫が擦り寄り抗議する

盃は要らぬ現場は紙コップ

合併の市内に昨日猪が出た

同期会車座で酌む俺お前

尼崎市 軸丸勝巳

駅伝に元気を貰う三が日

左手で投げる賽銭妻の分

成人式私の頃は祝入宮

切なくて見れぬ戦場硫黄島

夕張は他人事でない日本地図

尼崎市 長浜美籠

兄ちゃんの白髪も増えた干支の春

そもそもの事の起りは雪の花

自立して娘にも出てきた人間味

口角がこころ模様をうつし出す

プラトニッククラブかも知れぬ青リンゴ

伊丹市 山崎君子

陽のめぐみ宝のような福寿草

団塊世代吉と出ました初みくじ

今年こそ身辺整理年おんな

いもたこなんきんチョット猛進聖子さん

幸せを今年もくれる好い寝顔

川西市 米原雪子

スキヤンダル期待されてた人の名が
しっかりと覚えたはずが出てこない

親の恩幼い頃を語り合う

ひ弱だが子育てだけはしっかりと

五姉妹でカラオケ行きがすぐ決り

川西市 西内朋月

食べるのも本を読むのも掘炬燵

本棚の百科事典が邪魔になり

ちよつとした言葉で出来た隙間風

母と妻一緒に頼む十三回忌

高血圧症薬も酒も飲んでいる

三田市 久保田千代

海染めて今スタートの初日の出

暖める夢あり今年のカレンダー

組板のリズムに残る自尊心

国家情報すぐに世界を駆けめぐる

からまった話の元が見つからず

三田市 北野哲男

薬より胸の痛みに酒が効く

リストラがないのは警察だけに

診察券カード嫌いも必需品

紙めんなよ天下を握る浮動票

こめかみに立つ青筋を消すお経

三田市 石原 歳子

宣伝にひかれて買ってみた石榴
北朝鮮の拉致は昔の人攫い

入社して今日から夢のワンルーム
大雑把だから明るく生きられる
空き家ではない大根が干してある

西宮市 西口 いわゑ

騒がしい元日だったそれによし
開けゴマ笑い袋をとりにゆく

昨日より明日の蕾にかけてみる
水たまり昨日は跳べたはずなのに
真つ白がすこし汚れて好きになる

西宮市 山本 義子

三月の風とても良い子ぶっている
たんぼぼはすなおに飛んで現住所
最初から花は咲こうと気負うてる
春が来た蝶は只今化粧中

山の雪春と出会うて散華する

西宮市 門谷 たず子

今すこし遊ばせてはし春の風
主なくて菊水仙も乱れ咲き
もう三年はや三年のひとり言
楽しいことだけを拾って生きてゆく
ボケットの隅の俵せかき集め

人生を上手に渡る人との輪

小さな種花は癒しにみる美学

ボクは古い 古い写真を持っている

一杯の水真夜中のボク待っている

理髪店無口の主人とうまが合う

西宮市 片山 忠

妻よりも早起きすると墓穴掘る

無駄口をたたける数がボケ防止

暇だからいじめに回る奴もいる

不器用な貴男を残し死ねませぬ

ひつつき虫死ぬまで従いて来るらしい

西宮市 秋元 てる

老いた手に昔のままの指輪あり

ひったくりに気をつけなさいと孫六つ

受付に何時もの女が居ぬ不安

貰い泣きにあの娘の弱いところを知る

一声で集まるチヨイ恵仲間たち

西宮市 菊池 トミエ

不自由を知らない少年のナイフ

山笑うそんな季節に想い馳せ

五臓六腑よじる笑いに飢えている

皆静か酌も忘れて蟹させる

やわらかく老いてゆきますさくら草

西宮市 亀岡哲子

兵庫県 大谷幸次郎

餅米を二合買います嬉しい日
デパートのおせちで賀正嫁姑
豆の蔓天向いている初日の出
始業式終えた子を待ち戎さん
お手伝いこんにやく千切る小さな手

西宮市 牧 渕 富喜子

柊の花に触れるは風ばかり
また少し縮んでいます初鏡
数え年書いて下さい護摩木札
連日の事件の裏の親思う
一番機空に響けば朝動く

西宮市 井 上 松 煙

初春にスーツ誂え夢あらた
目にするか舌にするかで迷う旅
たわいない昔をおぼえ今わすれ
仏滅はせめて明るい友を選び
冀真面目一途の旅を慈しむ

姫路市 古 川 奮 水

束縛を緩めてくれた三が日
一筆の文字が嬉しい年賀状
誕生日ケーキが揺れる火が笑う
二日酔い咽を潤す里の井戸
点滴を嫌う静脈逃げまわる

なかなかの姑に仕える嫁でいる
雪の夜はやはり熱爛だと教え
人の道拓く気持で雪を掘る
右顧左べんするな賀状の猪が言う
姿さえ見えぬトップを追いかける

和歌山市 榎 原 公 子

子に逆らう気力も失せて冬の雨
煮こごりがご飯の上で溶けている
意地だけは現役靴を光らせる
一人寝の布団へ海老も大の字も
北へ追う恋を一度はしたかった

和歌山市 堀 畑 靖 子

歳月の無情をうつす初鏡
外面にこだわりすぎていた私
らしくない私を捨てに行く岬
不幸でもないけどオモロくないなんて
失言の山を築いた若かった

和歌山市 木 本 朱 夏

巖かに霊峰富士に陽が昇る
甚五郎の猫が目覚めて春近し
仏壇の父に加勢をしてもらう
向き合えば石に目があり笑いだす
提灯になると無邪気な河豚の顔

和歌山市 田 中 み ね

猪の音頭で初春の幕が開く

それにしてもよく食べました三が日

一年ぶり杵振り上げのお餅つき（白浜のホテルにて）

芋たこのような医者ならとんで行く（NHK朝ドラ）

大リーグへ猫も杓子も行ったがり

和歌山市 松 原 寿 子

ときめきをキャッチしている心電図

傾けた耳から纏れほどけ出す

ウインクで花粉を避けた訳でなし

寒いさむいと孤立している車椅子

読み取れば奥の深さへ吹く嵐

和歌山市 喜 田 准 一

押しつけるほどの熱意にほだされる

流暢な舌だが胸に響かない

躊躇する割に掛ってくる電話

歌い切る度胸がたのもしい音痴

遠回りしてもやっぱり民主主義

和歌山市 福 井 桂 香

転んでも華麗に滑る女王たち

ニューイヤークンサートウイーンへの想い馳せ

風林火山いつ聴いてもよい言葉なら

病を乗り越えて千の風になりたい

盆梅展春の匂いがもうそこに

和歌山市 楠 見 章 子

雨音が止むまで夢をみていよう

雲ひとつ無くて鏡も澄んでくる

羽衣を借りたら旅を始めよう

物干し場幸せそうにそよぐシャツ

七草粥する明日を生きる音

和歌山市 福 本 英 子

師も友も鬼籍へ移り春が来る

雨に止め風にも休む万歩計

私の歩幅誰にも教えない

お赤飯炊いて独りの誕生日

消費期限やつぱり当てにならないだ

和歌山市 松 尾 和 香

川柳に酔って人生おもしろい

人間の弱さを包む酔ったふり

誕生日家族の愛に酔う夜半

人恋し手酌で酔った寒の月

こっそりと貯え旅に出る時間

和歌山市 上 地 登 美 代

ばんぶつの命を照らす初日の出

かくれんぼ好きな眼鏡と明け暮れる

死ぬ勇氣あればなんでも出来るのに

寂しくて転がってきた紙コップ

でんぐり返り一つ覚えの砂時計

和歌山市 山口 三千子

経験がないから言える奇麗事

自分だけ泥を被らぬ位置にいる

不都合な時には狸寝入りする

ストレスが思考回路を麻痺させる

下着セールス喜寿だと言えば詫びて切る

和歌山市 武本 碧

共稼ぎジャンケンをする風呂掃除

知らんぷりしても働く妻の勘

打たれても懲りない面を持つもぐら

弱いからすぐに尻尾を巻きたがる

愚痴ってる暇に神様通り過ぎ

和歌山市 宮本 三喜夫

談合であちこち揉めた年でした

無駄遣い知事の選挙で金動く

やり直し棄権が増えて情けない

揉め事も無事話あい落ちついた

復党はややこしいこと揉めそうね

海南市 堂上 泰女

家庭菜園夫はプロに負けてない

年玉の諭吉見分ける三歳児

青春で響き合ってる初電話

木枯らしを連れた寒波に歳を知る

家の中でリズム体操する寒さ

鳥取市 山本 益子

事故のたび最敬礼の詫びは駄目

朝鳴きのカラスにどきり訃報来る

鍋突つく絆の深さしみじみと

持ち前の本能見せる手長ザル

押し問答どうどうめくり出口無い

鳥取市 山宮 愛恵

うきうきと暖めていた恋ごころ

ゆで卵つるりとむけて飛び立った

使い捨てなんてできない世に育ち

老いるほど雪が厄介ものになる

普段着の持て成し長居してしまう

鳥取市 宮脇 道子

病院に残る人生預けてる

ありがとう今年の願い感謝です

朝の掃除出来た感謝で母生きる

私の宝兄弟全部が健在ね

老いの谷間拓いて種子を蒔く心

鳥取市 永原 昌鼓

恙ない今日へ感謝の日が落ちる

母の膝つい居眠りをしてしまう

人間へ戒め地球よく荒れる

人類の歴史へ美女が絡みつき

スポーツに愛国心が盛り上がる

鳥取市 土橋 はるお

ひねつても絞つても出ぬ空財布
手頃かと始めた趣味も尻を割り
裸婦像を見つめる訳は何もない
美人画にウインクされて悦にいる
生きている今日もトントンならいいよ

鳥取市 岸 本孝子

早春賦唄って春を引き寄せる
腹七分守れば着れるMサイズ
無我夢中で走るが芸の亥年です
その先を言つて話をこじらせる
あれこれと塗つてはみたが消えぬシミ

鳥取市 岸 本宏章

貧乏をすると地縁も薄くなる
有り余る金の苦勞もしてみたい
墓参り安い線香所望する
惚けに効く笑いぐすりを処方する
裏金の引継ぎもある年度末

鳥取市 富山 檳榔樹

新春に明鏡止水胸に抱く
阿弥陀経唱え溜息吐いている
ぐさり刺す言葉に返事かえせない
喉ぼとけ大吟醸を呼んでいる
地球には澄んだ空気がお宝だ

鳥取市 植田 一京

うたかたの恋賀状だけまだ続き
飼ひ猫に癒やされている寒い冬
吹雪く夜も風呂で一句のいい気分
七十路まだ燃えるものあり歌を詠む
百歳を生きて宿題解くつもり

鳥取市 武田 帆雀

人間の栄養源になった猪
お隣のおきやんが巫女へ早変わり
叩いたらあかん埃の出る金庫
火を近づけると危ない年賀状
売るものがあつて旧家の美術品

鳥取市 福田 登美

添え書きのなんと嬉しい年賀状
おしゃれして実家へ年始家族連れ
年重ね祈る願ひも深くなる
街は春動き始めた人の波
季は移り会釈に春の香りくる

鳥取市 平尾 菜美

猪と折り合いつけて突き進む
ピンピンコロリン逝くまで元氣おさんどん
レンジがチン馴れ初め思う戦中派
一夜漬け母のしんなり立ち直る
神の子と思う一矢に報いてる

鳥取市 土橋 睦子

情報に流されまいと知らん顔
搗きたての餅に笑顔もとろけ出す
寄せ植の鉢に自信をつけた姑
サービスに貰ったペンに励まされ
泣きごとと言うまい扉開けて待つ

鳥取市 倉益 一瑠

勝ち負けを洗い流しているお風呂
ぎりぎりを生きて転んでばかりいる
ロボットの赤ちゃんを抱く冬景色
どうしようわたしの影が縮んどうる
闇の中出口ここだと母の声

鳥取市 有沢 せつ子

爪切ってお節作りに取り掛かる
洋風の味も交えるせち料理
細ぼそと暮して蟹は良く貰う
家計簿に愚痴を残さぬ努力する
笑い声嫌で病魔が出て行つた

鳥取市 加藤 茶人

掃除する褒美へそくりまで見付け
あの痛さのどもと過ぎてつい忘れ
友として最高 伴侶には欠ける
箱物の数だけ市町村赤字
ワッハッハ笑っていれば福は来る

鳥取市 杉本 孝男

味方さえ半分ほどは敵に見え
現ナマが舞うと生傷きつと生む
ケイタイを持つと自由を縛られる
レジ嬢がとても美人のコンビニへ
名を成して故郷へ飾る夢を織る

鳥取市 西川 和子

マドンナも寄る年波に逆らえぬ
ライバルを意識しながらどっこいしょ
まだ脳も手足も動くから使う
冬ごもり糖尿病に狙われる
水溫む山も私も生き返る

鳥取市 福西 茶子

紅白のハレンチ見るにしのびなく
二百段ひいはあ登る初詣で
イザナギを超えてるなんて嘘のこと
こんなにもあつた自伝の浮き沈み
五十年やっぱりアナタ頑固者

鳥取市 奥谷 彩子

金杯で七福神を回し飲み
さかずきに笑顔泳がせ雪見酒
泣いたり笑ったり明日も生きられる
ダイエット同窓会に的しぼる
母の背な拝むかたちに丸く老い

鳥取市 録 沢 風 花

夕張を偲んで我慢する暮らし
犬の声だけが聞こえるお元日
仏壇と猫が相手の冬籠り
ようこそと言つて八十路の門が開く
演技する涙なかなか出てこない

鳥取市 福 島 庸 二

燻されて無病息災とんどさん
絵手紙の良さが一句で光つてる
意地になり孫と競り合う独楽回し
再検査オーケーが出て食べ過ぎる
風邪の神心の透きに忍び寄る

鳥取市 吉 田 弘 子

この歓喜冷凍保存できないか
プロさえも歌詞を忘れる晴れ舞台
運不運プラス思考で生きたいな
礼服も線香の匂い強くなり
マドンナがおとこ言葉で仕切つてる

鳥取市 下 田 茂 登 子

年明けて若い娘の逝つた家
仮面の下仮面を付けて出るかぼちゃ
老いという背中に銭がついて来ぬ
大器晩成四十の子にもかけてみる
新年に一人欠けてる寒い膳

倉吉市 米 田 幸 子

爪に火をともした父が億の寄付
青い目の嫁は我が家の御法度だ
子のために貯めた預金は泡銭
風邪引いて職場にでかい穴をあけ
この町で育つた恩を返したい

倉吉市 松 本 よ し え

大砂丘画布いっぱいに風の詩
娘の家を訪う日は婿に吟醸酒
いざなぎ景気どこ吹く風か畑を打つ
本紙より重いチラシを持って余す
遠くから来る子等待つて松葉蟹

倉吉市 牧 野 芳 光

温泉に浸つて洪を抜いている
煙草吸うたんびに檻に入っている
退屈な日はセールスも寄つて来ぬ
壁を背にすると世間がよく見える
老人を物干し竿にぶら下げる

倉吉市 山 中 康 子

病棟に裏も表もない介護
病棟のみにちに溶けこむ勇気だす
病棟の一举一動お見通し
電波からこの世に生きること学ぶ
病棟の山も民家も絵にそまる

倉吉市 猪 川 由美子

年いつて守りの姿勢加速する
耳学問すぐにメツキが剥がれ出し
お雑煮で早速揉める新夫婦
柔ちゃんママでも金へ頑張れよ
りんご頬つぺ鼻タレ小僧とんと見ぬ

倉吉市 野 田 節 子

年明けに脳のお手入れから始め
孫達が笑い袋をさげて来る
仏像が優しくれた京の旅
感性が豊かですぐに血がのぼる
ハートまで盗んでくれたカメラアイ

倉吉市 山 本 玲 子

手の届く範囲に小物おき座る
物忘れウフで茶化すこと覚え
あすなろのあすは檜になる理想
雑草も春は理想の花咲かす
矢印に出口強制されている

米子市 政 岡 日 枝 子

病む者へ一枚岩となる家族
途中下車遊んでこいという時計
寒波くる時計を止めて丸く寝る
認知症の友から毎日くる電話
満足の目盛り追いい低くなる

米子市 門 脇 晶 子

ファッションが米寿になつても目に映る
会合を重ねて耳をふとらせる
三人が黙ると急に風が出る
内緒の話やっぱり猫がきいていた
傷口の深さで覚悟出来てくる

米子市 青 戸 田 鶴

箱根駅伝日本ひっぱる若者たち
菜の花が咲く頃クシヤミなおるだろう
人間が神にそむいた温暖化
なつかしい昭和の歌を聞いている
夕暮れの鐘が私をさそいます

米子市 林 瑞 枝

にんげんに戻す故郷の空が澄む
待つことに馴れた医院の温い椅子
沸騰点おんなは明日へ火をかざす
予告ないドラマ始まり乗る電車
福を播く友の童顔バラを愛で

米子市 白 根 ふ み

初日の出楷書の朝が肅々と
使い捨て繕うことがなくなった
ブナ林を伐り湧き水の会社建つ
ハプニング思わず気力よみがえる
今日を得てきのうを忘れゆく挽歌

鳥取県 田村 邦昭

くらし向き支えてくれる妻という
眩しさが邪魔して愛を言えぬまま
ひと工夫すればまだまだごみじゃない
飽食に馴れて無駄など気づかない
それなりの出口見つけて強く生き

鳥取県 深田 俱久

行草相ミッチーさんの御曹子
なんとマア成果乏しい○六年
失点のドミノで暮れた戌のとし
中道を往くぞ亥どしの万歩計
格上げの省でも軍の轍踏むな

鳥取県 竹信 照彦

足腰を鍛える覚悟釣りのため
ウォーキング第一日目初詣で
車では距離が測れぬ路地歩き
コンクリートの歩道にもある水溜り
餅搗き機男の出番ひとつ消す

鳥取県 山下 節子

母逝つて母の教えが生きてくる
夕支度カエルコールを聞いてから
留守電の伝言なぜかかしこまる
好物も制限される病持ち
自動ドアぎしぎしなんか無いだろう

鳥取県 蔵本 悦子

こんな世にしたのは誰だ神様か
愛犬と私こたつで冬ごもり
老人と同じ目線で介護する
つるし柿根性見せて粉を噴く
北風に出合い甘味が出る私

鳥取県 石谷 美恵子

知らぬ間に咲いたろう梅香で気付き
車間距離いい友達でいたいから
しびれのきれた足を畳に嘔われる
一畳の畳で見れる夢の数
目的はやっぱり金の無心ごと

鳥取県 佐伯 やえ

シクラメン忘れ得ぬ人つれてくる
雪積もる大山から笑い声が降る
はけたふりたまにしている日々平和
前には子うしろに孫がいてくれる
母の年こえて勿体なく生きる

鳥取県 太田 幸枝

寄せ鍋に猪入れた亥年春
嫌な事昔話で流します
茶柱を信じかすかな期待する
百薬の長とビールと焼酎と
一ランク下げて気楽な生活する

鳥取県 盛田夢路

花まるをたまにはやろうわたしにも
凸凹に耐えて人間丸くなり
へそくりがいつのまにやら羽をつけ
あり余る光の中で飢える子等
どん底で羽を繕い爪を研ぐ

鳥取県 山本正光

喫煙が勝手にできぬ不満もつ
脱線するかも知れぬ一升瓶
足腰は負けると知るが気はたしか
年寄り口出しするなどは無礼
何度でも言うぞ命は尊いと

松江市 佐野木みえ

沈丁花忘れず春を咲いてくれ
おはようと言えばにつこりシクラメン
エルニーニョ雪が降らないスキー場
鈴虫寺お礼参りにまだ行けぬ
甘栗を食べてテレビと仲良くする

松江市 津川紫晃

ごめんねの一言出ないまだ孤独
無器用な男が描く冬の地図
ポケットへ適度に詰めた愚痴の玉
信頼の絆で結ぶ親子の和
過去言わぬほこらず語る苦勞人

松江市 安食友子

虚言だと知りつつピエロやってます
格言もジョークも通じない神秘
腐れ縁などと言うなよなあ家紋
童顔にコールマン髭如何かな
食欲よ目を丸くするのは止して

松江市 川本 畔

夕焼けの空は一途な思い込み
七転びしたらとうとう起きて来ぬ
こだわりを捨てるに惜しい柚子の肌
はぜ紅葉あれもこれもと燃えながら
純情な男は受話器持ち直す

松江市 小川 注湖

憧れの女の話をしつと聞く
手配書に鼻筋高い美形とは
泣くことが多かったのも母の背な
背を見せて育てた子には悪い
雑兵もと金の夢に一步ずつ

松江市 三島 湊丘

古日記練れば青春よみがえる
新しい夢で余生を塗り替える
晩学の道ゆつくりと一人旅
焦るのも諦めるのも僕自身
人間のエゴに歯向かう猪も熊も

松江市 松本 知恵子

ゆつくりと亀に聞いている過去未来

あけ・おめのメールで済ますお正月

新年のファイトの数の餅食べる

きらきらと猪突もしたい五十坂

冬晴れの空にうきうき布団干す

出雲市 佐藤 治代

芋たこなんさん大阪弁が好きになる

たこ焼きもあんまんも好き老夫婦

穏やかな日を願いつつまた喧嘩

メール打つたよたよたと送信す

ふる里の夕陽にはっと旅終える

出雲市 吉岡 きみえ

めでたくも春を迎えて春の唄

せせらぎの音にも春の近き知る

小春日にカーテンあけて陽をもらう

十匹のせみを飼ってる耳の底

肥満体抱えて春の土手散歩

出雲市 小玉 満江

玄関に人待ち顔のシクラメン

合併で猿猪も町に出る

三千円初めて当った宝くじ

お寒や灯油の値段登り坂

おそろしいニュースが続く昨日今日

出雲市 石倉 美佐子

続きがらは妻と書きたい二輪草

骨粗鬆きりと帯が結べない

もう御菓子食べないなどと三日間

今年からはアクセルばかり踏まぬこと

エンジン全開八十路の春はうららかに

出雲市 森 茂美

落葉掃く尼僧の足袋の白さかな

採りたての大根匂う朝市場

敗北の味がぐくりと通る喉

深い皺一つ一つにある歴史

除夜の鐘なんとか今年越せました

出雲市 富田 蘭水

歎異抄心ゆさぶる午前二時

効能はどうあれ温泉いい所

神だのみ人間なんて弱いもの

定命に生きて雑煮のうまいこと

松の内金粉酒に癒される

出雲市 園山 多賀子

素晴らしい夢を購いたい春財布

足袋履いて女が匂う白い自負

野仏に蜜柑が一つ花いちもんめ

余生今一人芝居の脆い夢

ストレスを解く独り言他意はない

出雲市 持田多輝子

日を追って喪中ハガキの来る師走
鬼だとして知った鬼なら恐くない
どうせなら笑って生きる事にする
信頼の都知事でさえも二枚舌
物価高医薬費までも追いかける

出雲市 小白金 房子

正月へ杵餅農家の音で搗く
楸餅胚に御神酒戴く初もうで
縁あって子宝並ぶおとし玉
子宝を乗せて漕ぎ出す新春の海(ひ孫九人)
牛飼って気がねいらすのコップ酒

出雲市 城多喜

歳貰い忘れ上手になつてくる
我儘で関白でいい 夫居れば
同じ血を分けても違ふあね いもと
百均でちよつと散財したような
満面の笑みを湛えている仮面

出雲市 岸桂子

揺れに揺れもとの笑顔をとり戻す
この道を歩いて今も自問自答
かたつむりかなわぬ旅の地図なぞる
過去形で語る別れも美しい
決然と遺書を書く気になる世相

出雲市 小豆沢 歌子

残照にゆつくり溶けていくひとり
今やつと枯れて真価が分かり出す
ネジ巻いて今日も出掛ける冬帽子
束縛と自由のはざま日が暮れる
約束は遠く流れる雲にのる

出雲市 伊藤 玲子

初春に風も光っている出雲
いい出会いあったか靴も艶つぽい
強がつたばかりに退けぬ曲り角
転けるなよ家中で看るおばあちゃん
降る雪を白水仙もじつと見る

出雲市 多久和 敬子

真つ白な雪に心も洗われる
新年の夢ちよつびりと日記帳
女房のハートの中を覗きたい
お年玉五人の孫に配る幸
大吟醸と一緒に息子待っている

島根県 伊藤 寿美

蓮如さまの法話有縁の真ん中に
千両の赤悲しみは不意に来る
終い湯に今日の鱗が浮いている
びつくりせぬよう夜明けを待つて電話する
流された首本流に戻れない

雲南市 毛利 幸

色々な悩みを置いて年が行く
音のない世界に時に憧れる
子が強く親の出番が宙に浮く
年の瀬で暦が後を追いかける
熱燗にはのぼの酔うて紅が射す

岡山市 井上 柳五郎

米寿越え屠蘇に寿ぐ四代宴
ゲームに夢中曾孫二人はそっけなし
身に覚えあるから饒舌貝になり
戦力外に指を折られた元エース
残留孤児ら致被害より手抜きされ

倉敷市 撰 喜子

曇りないコップに主婦の自負がある
富士山がはつきり見えて旅終る
快進撃裏にしつとの火を浴びる
衰えを知らぬ八十路のスクワット
頑固親爺母は我が家の潤滑油

美作市 山本玉恵

今日までの命の中の雨季乾季
妻の変身びっくり箱が拗ねている
いつまでも女のつもり母卒寿
もう過去は切り捨て明日へまたあすへ
一ひらの名残りを置いて舞い立とう

美作市 小林 妻子

恙無く越えた丁亥の寝正月
追い越しもせず三つ違いの夫婦です
敗けいくさの語り部聞いてなぞくれぬ
安売りも出来ず売れ残りのいのち
棚卸し仰山詰めた福袋

美作市 福原悦子

細々と向学燃えている余生
万歳と小さな初孫抱き上げる
バイキング心の飢えは満ち足りず
無人駅花一輪が活けてある
本開く耳ない世界好きになる

真庭市 国米 さくゑ

まだ燃える血が流れてる八十の新春
胸に描く夫婦の道はまだ半ば
遠距離の恋実らせて孫華燭
親王誕生列島明るい年が明け
しがらみも鍋を囲めば解けてくる

真庭市 福嶋 智恵子

独り居て孫帰省まつお正月
独り満ち一人のご飯炊いている
日が暮れて案山子一人が残される
道半ば刺客に遭うて譲る椅子
駈けすぎの人生半ばちびた脛

竹原市 石原 淑子

宇部市 平田 実男

菜の花笑う大地が笑う真つ盛り
沈丁花に誘われて来た佳い報せ
このところ繋がりにくい糸電話
老いてゆく怖さ切なさ抱く人形
病床のあちらこちらに置く狂気

竹原市 森井 菁居

高層ビルのとまりで影をもてあます

美祢市 安平次 弘道

採血と言われてびびる検査前
予約取り消した途端に楽になる
炒飯の美味さは一生忘れない
汗をかいてすすする茶づけの美味いこと

竹原市 時 広 一路

欠伸する携帯だけど持ち歩く
相部屋で争いも無く神ほとけ
早寝でもするか目薬日に四度
雲のどか私に出来ぬ旅をする
もう古い身体だ故障気にしない

竹原市 岩 本 笑子

いい事も忘れてくれるのは男
川柳の海であっぷあつぷする
どうでもいい事を夫の気にさわり
他人めく娘思いながらふとん干す
豆餅の塩は夫の舌加減

裏表ないから大臣にはなれず
半分は戦力外の永田町

継続は力にならぬ二世議員

スポーツが余計国境意識させ

コマーシャル代は売値の方へ入れ

負け犬でもよしアドリブは健在さ

一行で終る日記に愛も冷め

情報の渦に自由を奪われる

さりげない言葉人生考える

振かれているのは政治かも知れぬ

東かがわ市 池内 かおり

夫婦にも手話で事足る電話中

ウロウロの夫婦廊下ですれ違い

休日は避けて格安カニツアー

笙の音に浮かれて覗く丸い月

先細る福祉に長寿音を上げる

東かがわ市 原 賢

怖いのは妻の無口が開くとき

もう一人の自分見付けに登る坂

ライバルに見透かされてる腹の底

独り居の行く末淋し底のなさ

初恋のルーツは故郷のかくれんぼ

東かがわ市 川崎 ひかり

東かがわ市 成重 放任

大役を果し安堵の茶をする

合鍵を渡した悔いところごと

宮参り大志握っている拳

孫が来て元氣の種をおいてゆく

光つてはならぬ脇役カスミ草

東かがわ市 伊勢 八重子

いい人に出逢い俵せ倍になり

顔見せるだけで安らぐ母独り

庵治石に生きた証の句を刻み

ふり向けば過去という名の忘れ物

熱爛が水に流したわだかまり

東かがわ市 神保 坊太郎

中古品は売ってませんと言う命

窓の外のぞいてごらんナルシスト

難聴とコンニャク問答して帰る

負けたのはいつも鼻の差だと思う

天辺に来て尺取は程を知り

東かがわ市 清川 玲子

白菜漬おえると姑の冬が来る

順調に老いて初孫抱えている

大きさは計り切れない親の恩

たたかれる度に大人になっていく

そばに居るだけで安らぎくれる人

集金にヘソクリが減るお留守番

オクターブ上げ話し合う老夫婦

よっこらしよ膝の叫びが口をつく

一報に一人暮らしの母安堵

吉報に消える年金脳かすめ

松山市 古手川 光

まさかの時になって払わぬ保険金

防護柵築きたいのは熊の方

ワーキングプアーに景気支えられ

子を産まぬ社会が悪いことにして

ようあれだけトコトン白を切ってはる

松山市 宮尾 みのり

宝とも思う出会いに恵まれる

片親の恋を多感が許さない

久し振りの会話もあつて通夜の席

人間の欲が予想を甘くする

真ん中は妻だと知った定年後

西予市 黒田 茂代

残月の影が淋しい冬木立

それぞれの名前が意味を持つ和菓子

年中でも飽きないわたし蜜柑好き

書齋から見る窓動く風景画

一人では生きてゆけないからふたり

大洲市 中居善信

4Bで書くとき大きな字が書ける
黒だとも白とも言わぬ曲者で
根っここのとこに動かない反戦歌
紅白のあれは確かにストリップ
麦飯を食えとそろそろ言いそうな

高知市 小川てるみ

福の神来そうで窓は開けてある
しきたりが廃れ寂しいお正月
大根の甘みやっぱり冬の味
ポケットに二十の夢がまだ残り
パソコンに馬鹿にされるし遊ばれる

高知県 小澤幸泉

人の世の苦楽八十路の祝い坂(義母参拜)
こだわって五年日記を買い求め
障害の友が乱れたメモ残す
冗談が本当になった恋の道
子が生まれ中絶の子を思い出し

高知県 赤川菊野

書き初めに命という字書いてみる
今は亡き恩師の賀状額に入れ
バラ色の人生でしたありがとう
リストラが転機実家の農をつぐ
ほどほどという物差しがむずかしい

唐津市 宗水笑

老い猪にやる気をくれる初日の出
若水が五臓にしみてやる気出る
初詣で巫女の袴の朱が眩し
言わいでものことまで吐かす聞き上手
百歳で走る人あり膝を揉む

唐津市 山口高明

自画自賛体調褒める菜食者
公団は企業努力をしないとこ
兄嫁は日本語習う異人さん
赤ん坊にママを盗られて一寸妬き
身ふたつになっておんなの艶が増し

唐津市 井上勝視

水道が埋めてガス屋が掘り返す
代筆で妻の友の名覚え込み
寄り道も無駄じゃなかった処世術
鵠なみに勝鬃あげたい酔い心地
人の世に通貨が出来て墮落した

唐津市 久保正剣

ドクターストップ怖いものなし八十五
預かった仔猫に座椅子奪われる
マジシャンに飼われスリムになった鳩
ニュージランドに何の視察か村議員
知らぬ間にいい娘になっていた転婆

唐津市 市丸晴翠

熊本県 岩切康子

傷だらけの辞書は私の伴侶です

やり残し探して登る傘寿坂

元旦の計家計簿が引き緊まる

働いた千円札だ皺伸ばす

粗食です長寿の家系と言われます

唐津市 坂本峰朗

見て見てと花競いあう狭い庭

花時計そばで見ている腕時計

慰めの言葉も言えず共に泣く

やあと手を挙げて飲む真似街の中

一度だけ過ち妻が持つ手綱

唐津市 樋口輝夫

寒波襲来予定変更おでん鍋

倦怠期犬に優しい妻の声

縄暖簾仮面の剥けた顔ばかり

子育てに終点のない母の愛

嫁が奪る初孫ゆきのお年玉

熊本市 永田俊子

家だけの日の丸すこし低く揚げ

屠蘇を酌む賀詞しみじみと独り言

数の子の億の命をめだがり

トーストがとび出し促す初出勤

万華鏡の花野に遊ぶ嫌な世だ

歳知らせ歌への誘い断った

流感にリハビリ休み予防する

事終えてこの一と時の嬉しさよ

押し迫り遠方から書く年賀状

孫たちの剽軽振りに初笑い

熊本県 高野宵草

強くなれ耐えて生きてけ日本の児

計算が苦手妻から袖引かれ

手を胸に隠れば自惚れ見えてくる

思い切り喋って故郷にウツ捨てて

運命とや満身創痍背負って生く

砂川市 大橋政良

鈍い音たてて一円玉貯まる

会釈してどこか淋しいプロフィール

いざこざの火種やけどをしてしまふ

理屈ではわかるがやめれないお酒

胸底に積上げてあるざんげ録

弘前市 今愁女

老梅の散り初めし頃香のあり

健やかに老いて味わう桃の酒

駈け落ちのごと流しやる対の雛

せめてもの亡母に夢もち雛あられ

啓蟄の虫よ出でよと春の雷

弘前市 高瀬霜石

八起き目はぎっくり腰になるだろう

ライバルはいつも鏡の中にいる

小旅行宿も小さな方がいい

ダイレクトメールで埋まる寒い部屋

犬よりは猫です生まれかわるなら

弘前市 櫻庭順風

国のため工業学校建てました

児童にはでかい顔して仮住まい

終戦で金食い虫を殺したい

目的を失ったよきに計らえ

廃校で茫然自失する生徒

弘前市 須郷井蛙

ワタクシに元気をくれた放浪記

場所ごとに外人勢が増えてゆく

白い壁あるからいたずらしたくなる

郊外へスーパー中心街が空

食い荒らす猿にも生きる地上権

弘前市 岡本花匠

防寒服替えて良かったふぶく路

寒月とわれを諫める津軽富士

春陽に悟り切れずの惑う日々

春さんさん笑福願うまんじ風

デジタルに替えて笑顔の絆の輪

弘前市 福士慕情

長生きの処方箋を亀に説いている

ぼつかばかり猫は日向を動かない

ジャンプして空の広さを知った雑魚

風向きが途中で変わる赤ワイン

恙無く今日のいのちを折り畳む

弘前市 相馬銀波

もう少し私に欲しい冬時間

本音だけ並べてしまう酒になり

古傷を抱いて手酌になる夜長

腐葉土の一枚ほくの旅に似て

限りある時間忘れていた情眼

黒石市 佐藤古拙

あほらしとつぶやきながら見るテレビ

鐘を撞くことは離村ないように

老いの腰いたぶるように雪が降る

利殖には無縁で候DNA

おぞましい記事に四コマが手をのべる

十和田市 阿部進

何よりも心の絆大切に

世渡りの上手な方と酒をくむ

帰ろうかちよつと寄ろうか縄のれん

聞えない振りして生きる老夫婦

普段着で入る温泉なつかしい

(小寺花峯氏の句は54頁に掲載)

川柳塔の

川柳讃歌

②⑦

木津川 計

餅肌がサメ肌になり枯れてゆく

錢 山 昌 枝

「やわ肌のあつき血汐にふれもみでさびしからずや道を説く君」と曠子は鉄幹を挑発したのです。数人の五十代の人妻が不倫をし得るや否やと語り合ったものの、結局できないとなった理由は「肉体に自信がない」だったそうです。やわ肌の餅肌がザラザラのサメ肌になっては、ためらいもするでしょう。他方、枯れる肌のオジンの上半身は痒くなり、人知れずボリボリ、僕も掻いています。

にもかかわらず昌枝さん、潤いつづけるため、恋心を失くさないことです。

ストレスがあるのは呆けてない証拠

穴 吹 尚 士

同居していた義母の髪は純白でした。ある日、学校から帰った僕の息子がびっくりしました。純白が真っ赤になっていたからです。既に痴呆の義母は椿油の代りに口紅を髪全面

に塗っていたのです。

物忘れもひどく、ストレスもあるなどと自覚できている間は大丈夫です。シエクスピアも「今が最悪の事態だ」と言える間は最悪ではない」と述べています。皆さん、ある日、尚士さんが真っ赤な髪で句会に現われたら、即刻メモリー外来にお連れください。

順調な老化と診られほつとする

菊 地 政 勝

すくすくと順調に成長しているのは幼児です。であれば、死の準備に対して準備する僕らも順調に老化せねばなりません。ところが不順ですから、こんな笑い話が生まれました。「先生、わしの右足はなんでこんなに痛むのですか?」「年齢故です」「それやったら左足も同い年やのに、全然痛まんのは何です?」。政勝さん、もし右足が痛んだら医者にそう聞いてみてください。

過去形にかわると苦勞糧となる

山 本 希 久 子

山本周五郎は名作『日本婦道記』の中で不運の主人公をこう見詰めています。「人間にとって大切なのは『どう生きたか』ではなく『どう生きるか』にある。来し方を徒勞にするかしないかは、今後の彼の生き方が決定するのだ」と。希久子さんのいう通り、大方の

来し方は苦勞の重荷を背負いながらの道でした。ならば「徒勞」にしないためには「どう生きるか」僕に言い聞かせます。

どん底に居れば空しか見えてこぬ

牧 野 芳 光

「井の中の蛙大海を知らず」と申してきました。先日、京都の旅館ホテル業界の方たちに話したのです。貴船の有名な料理旅館の経営者が僕の質問に答え、「旅館業界の宿泊者数は、やっぱり減っているのではないでしようか」に驚きました。この十年で三三%の激減なのに、どこ吹く風です。どん底だけでなく、盛業もまた全体を見えなくさせます。木を見て森を語る、いつも大きな視野の大切さです。

雑踏に入り立ち泳ぎで抜ける

白 根 ふ み

全く同じ抜け方を僕も経験しました。数年前の神戸ルミナリエでした。通りはぎつしりで足の踏み場もない押すな押すなの大群衆です。危険を感じ横道に抜けようにも歩けず、立ち泳ぎで脱出したのです。

幼い子連れ、ある家族センターのプールへ行った昔も「芋を洗う」とはこのことを知りました。狭いながらもわが家の畳の上で、大の字になって寝る、天下太平の喜びです。

『上方芸能』誌代表

自選集

両川 洋々

合掌の両手に棲んでいた夢よ
スッポンボンの僕で企み何もない
六本木銀座冬眠などしない
美しい幕切れでした友が逝く
妥協した男おとこに戻れない

阿萬 萬的

理屈っぽい癖にパソコンには弱く
まとまらぬ思案へはらはら散る枯葉
すぐ妥協するのも年かなと思う
天の声も時には無茶なことも言う
ハッタリも仮面もいらぬ老いの坂

石川 侃流洞

いわし雲みすずの詩の音がする
孫の歩に合わせ手を引く初詣で
年金をもらって大事にされてます
有難いことに何でも美味しい卒寿坂
卒寿まだ叱ってくれる妻がいる

板尾 岳人

案ずれば消えてしまった影法師
何も言うことがないので爪を切る
滝の水流れて母を悲しませ
思案するたびに微熱をくり返す
愛と言う文字が一番好きな薔薇

奥田 みつ子

震災日何事もなく朝の風
窓開けて今日が始まる深呼吸
思案尽き薬一本を掴んでる
無になれば思わぬものが見えてくる
言いすぎて書きすぎて空しさの果て

河井 庸佑

追憶に必ず浮かぶ歌がある
綻びを隠す小細工から疑惑
キャンパスへまだ落ち着かぬ海の青
ベン休め想をまとめるたばこの輪
視点換えやつと掴んだキーワード

木村 あきら

啓蟄に地球全てが目を醒ます
只管に海を目指している小川
セセラギが春を告げてるフキのトウ
早ワラビが拳を挙げて春を告げ
定年で扶養（不要）家族と言う身分

小島 蘭 幸

自由人になったらきつと瘦せるだろう

秋刀魚二尾焼いたら妻にほめられた

退職をしますと言うておく

妻よ子よ記念日ばかり増えてくる

モーニングコーヒーひとりぼっちにされている

小西 雄 々

雪溶けの山の裾野で聞く讃歌

猪が猪愛し美学とす

蠟梅の香りへ媚びることは無い

奥歯まで噛みしめて飲む吟醸酒

嫌だなあ弥生へ義理がまた届く

小林 由多香

正月の絵に羽子板も独楽もない

和洋中豪華なおせち箸まよう

暖冬へ冬の商いいじめられ

暖房を低め一枚厚着する

暖冬へ除雪車出番ないまんま

斉藤 嘉

みどり子が笑う葉牡丹まで笑う

木の芽みな冬日を拝む姿して

寒空を唸り続ける七十路風

ほうれん草の生命力を戴こう

戦争も平和も見たな老松よ

塩満 敏

年賀状だんだん少なくなってきた

紅白のヤングの歌は知らないぞ

孫達の食欲嬉し鍋奉行

本年は地方と参院の選挙です

本棚の隅から出たよ亡母の文

新家 完 司

お日さまが笑う奇特なお元日

テポドンが飛んでこなくておめでとう

猪も狸も熊もおめでとう

血糖値しばし忘れて祝い酒

本年も消え去らぬこと目標に

田中正 坊

巻頭の一句それから斜め読み

愛国者すぐ教室に手をつける

保険みな満期となった幸不幸

相次いで友の訃を聞く砂時計

生かされた今日一日よありがとう

玉置 重 人

煩惱はまだ捨てきれぬ鐘の音

生きてます大波小波あたりまえ

ストレスがいっぱい溜まる待ち時間

趣味ひとつ認知症から遠くいる

引きぎわを考えている負けている

恒松町紅

故里をつなぐ山なみ絵に描ける
五体満足つい忘れてる休肝日
待っている時間メモ帳離さない
病院で逢えば上には上がある
温かい声かけられた雪の街

遠山可住

石ころに当ってホールインを決め
結論は背丈が少し低いだけ
暖冬へ寒椎茸のストライキ
祈りという奇跡が母の掌に宿り
九十まで生きると思わざり艶子

土橋螢

命いま七十八歳 初詣で
限りある命に今日も掌を合わす
初夢に出てきた女に逢いにゆく
鶯がこの世の善を呼び寄せる
青春を追って二 三步後退り

西出楓楽

発酵が過ぎて酸っぱくなった夢
思い出の中に積った塵芥
化粧する今更ながらさりながら
まっとうに生きて時計は遅れがち
曇りのち雨さて豆を火にかける

仁部四郎

民草の記憶に残る重い税
重いはずです政治家の罪と罰
見舞客葉袋が重たそう
前任の名で責任の重い椅子
世の中でやっぱり重いものは箸

波多野五楽庵

思い出が途切れる雪の風媒花
心にも雪降りつもる不倖せ
したたかな顔に手古摺る黙秘権
糟糠の二字を信じて裏切られ
一本の小骨で修羅を抜け出せぬ

芳地狸村

どの道もバイクでうまる朝の街
学問の神に祈りの手を合わせ
台南の歴史を語る赤レンガ
日本の顔を見せてるパチンコ屋
いろいろの旗がたのしい市長選

宮口笛生

金粉酒ぐいと正月やって来た
足腰が手にも震えが来てしま
賀状書けず悪いことしたなと思
う
良い日和正月じっとしておれず
渋滞の中へ飛び込む初詣で

宮西弥生

折り返す道もきびしさある掟
ひとつずつ許して向こうが見えてくる

春の芽がひよいと背をノックする

検診も受けて今年は羽ばたく気

改札を出たら晴れてるひとり旅

森下愛論

無にかえる肩の重荷がずり落ちる

もひとりの私が何度も叱咤する

凜と背を伸ばして悟る幸福感

闇の狭間へ影を落として羽ばたこう

九十過ぎ快気の夢を持ち続け

八木千代

百年で我が家の樅の木を伐った

切り株にさみどりの芽が噴くように

生きてきたからこそ巡る椿の季

生きて枯れたあたりまえではあるけれど

朽ちてゆく空の何とも晴れやかな

八十田洞庵

異文化をやたら持ち込む子の育ち

下積みに耐えた靴だよ捨て切れぬ

女流作家男の数と著者の数

モノリザに似るほは笑みで大火傷

生きたとは何ぞや時に首かしげ

初代川柳立机250年記念
川柳額奉納作品募集

あなたの川柳が扁額になって奉納・永久展示
されます

各課題の特選15句(各題3句)を扁額にして
龍宝寺に奉納した後、川柳会館(無名庵)に
永久展示いたします

課題と選者(各題2句・字結び可)

「万」	竹本瓢太郎	選
「合」	尾藤三柳	選
「選」	大木俊秀	選
「立」	今川乱魚	選
「机」	磯野いさむ	選

投句料 2000円(定額小為替)発表誌呈

投句締切 5月31日 消印有効

投句先 川柳人協会川柳立机250年係り

〒157-0065 東京都世田谷区上祖師谷5-21-14-216

投句用紙事務局へ請求下さい

お問い合わせ・川柳人協会事務局

TEL・FAX 047-368-4715

主催・川柳人協会 後援・(社)全日本川柳協会

共催・金剛山 龍宝寺



(つづき)

平川市 小寺花峯

通過点とした昨日を振り返る
休肝日設けて今夜は乾杯
記憶をたどれば青春のつまずき
棘のあるバラだが空気暖かい
反省の酒だが馬鹿は止められぬ

水煙砂

奥田みつ子選

八尾市 赤木 妙子

枯れ芒風の吐息で華になる

沈黙は金とやわたししゃべりすぎ

苦手な人へなだめてすかす腹の虫

悲しくて涙うれしくても涙

ロスタイムわたくしだけの虹を抱く

娘の小言昔の私そのまんま

草加市 飯土井 健夫

湯気の出る雰囲気出来て社に活気

勉強は一生かけて実るもの

新刊書読んでメモ取る話し好き

明治だと甘く見るなよまだ冴える

実力を積んで自信という宝

買ったなら信念で読むのが明治

北海道 小沢 淳

春の海 道雄の琴でしつとりと

妻の愚痴十年前に潮る

年金が瘠せて納豆よく売れる

うぶな嫁母でわが家の司令塔

ふる郷の風なつかしく温かい

食べて寝て健康ジムで走ってる

八尾市 田邊 浩三

子に戻り塗り絵するのも惚け防止

笹舟がぶつかり合って淡い恋

派手かなあ照れを隠した母白寿

憧れた自由を今は持て余し

スニーカーサイズ同じの孫娘

道草という楽しみは過去の夢

羽曳野市 森下 一知

振り過ぎた尻尾に溜まる脂かす

折り返し此処から先の向かい風

生き残り昨日の敵と肩を組み

沸点を越えて始まるぬかる道

遠くまで飛びたい種が風を選ぶ

泉佐野市 稲葉 洋

啓蟄はも少し先にする老軀
見てご覧小さな春が土を裂く
夕焼けの例え方にも出る世代
諸々の悲喜を溶かして日が沈む
目盛りには見えねど重い人の情

八尾市 笹倉 ひろし

落書きの方が真実衝いている
義母と嫁共に安堵の冷める距離
亥の年も幸せ求め暮れの寺
朗らかで煮詰めたような妻のキヤラ
良い話エキスばかりが漏れてくる

枚方市 二宮 紫鳳

孫バワ―もらって今年も猛進だ
大好きと孫は打算のない瞳
年女一步下って吉と出た
もみじの手何を祈るか初詣で
平穏な亥年が明けて和を祈る

紀の川市 辻内 次根

自覚して広く取ってる車間距離
車椅子見れば心で押している
拭いている時幸せと思う汗
雑踏で叫んでみたい時がある
散りぎわをのがしてならぬ花のいろ

岐阜市 平野 あずま

金箔の酒に長寿を言祝がれ
ゲーム機の指で回せぬ木の実独楽
人生の余白を飾る一行詩
水茎の香り匂わぬEメール
頑な心を溶かす妻の酌

大阪市 森田 明子

朝ごとに春の予感のチューリップ
雪解けて偽善の仮面はがされる
磨かれた鏡が少し疎ましい
似てるのが嫌だった亡父懐かしむ
朝市で胸を張ってる青菜買う

大阪市 岩崎 玲子

価値観が似たり寄ったり集う友
薬より友と笑って病飛ぶ
遠慮なく断わることのできる仲
いつの日も自分らしさの手のひらで
わかっている笑顔涙もわかっている

日立市 加藤 権悟

燃え上がる初日万歳して帰り
列島を豆で日本の邪気はらい
裸木の新芽やがての春に耐え
あめ色の軒を彩どる凍み豆腐
例会に急ぐ歩幅をうらやまれ

香南市 桑名孝雄

一領具足粗野だが卑ではない誇り

五年間生きねば損をする日記

晩酌で総括あすも良い天気

年金を下手に弄くるのは止して

安中散でことが足りてる胃が健気

和歌山市 柏原夕胡

五体満足だけど心に傷がある

空を見上げること忘れていたところ

結んで開いてところは今も開けない

思いきりはしゃいで忘れた昨日

泣きたくて泣いてるわけじゃないのにね

田辺市 大峠可動

出血性潰瘍妻の身は重し

朦朧とただ朦朧と我を呼ぶ

命綱日に十本の注射針

生きているいや生かされている初春

道づれは君と定めて千の華

大阪市 原田すみ子

どうであれいつもどおりに日は暮れる

日常がいつも同じの幸せ度

のし袋出番はいつも突然に

運命とあきらめる時出来ぬ時

冴える月見とれて歩きくしゃみ出る

奈良市 乾春雄

老いの幸百の賀状で支えられ

十人十色波調合う人合わぬ人

落ち葉舞う両手広げて子ら遊ぶ

鳩も私も帰る巢がある夕茜

雑踏に今日も同じ雑魚でいる

西脇市 七反田順子

大観も見た初冠雪の富士の山

初デート箕面の猿と戯れる

小さい足初めて大地踏み締める

ぎこちない挨拶だけど温かい

皇帝という名のダリア見上げてる

今治市 塩路よしみ

言い訳をすればこころに氷雨降る

喜怒哀楽過去には触れぬいまが幸

生きている証し塗り箸はげてくる

夢も愛も持たぬ女のほつれ髪

触れあえばいのち崩れるぼたん雪

紀の川市 宇野幹子

煮え切らぬ男直火で焼いてみる

惜別の雨は斜めに降ってくる

生真面目に生きて尻尾は振らぬノラ

命とやこれほど重いものはない

頂点の天狗梯子を踏み外す

札幌市 三浦 強 一

お茶漬がこんなにうまいコマーシヤル

酔いました本音言わせてもらいます

改憲へ鳴かなくなった鳩時計

肩パッド取ってる妻のリニューアル

ほけ具合時々妻に試される

取手市 葛西 清

安心の出来る眉毛でもてもせず

くしゃみして誰のウワサか気付かない

おつもりでお猪口すぐ置く損な質

つらい椅子と知って譲ってひとり酒

ケセラセラ決め込んでから前が見え

東京都 井上 つよし

青空がくれた落葉の舞扇

風呂敷は融通無碍で四角なり

カラオケのマイク自分の歌に酔い

日清日露明治の人は偉かった

卒寿から電話もらって若返り

昭島市 野口 忠

生きている証しに恐い夢も見

遣り残し見つけに一人旅に出る

女房の正論いつもシヤクの種

黒は灰灰は白だと言いくるめ

満点のムコ殿やはり煙ったい

横浜市 巖田 かず枝

八十の母は流行の服が好き

寒中の見舞いに添える甘い物

死ぬ時も生まれた時もありがとう

ホーム越し今日のおさらい手話講座

団塊の仲間たろうビートルズ

横浜市 中尾 哲代

警戒を忘れるセールの笑顔

寝言では上司にだつて言い返す

飼い主に性格が似るベツト犬

三浪がやつと万歳してくれた

肉じゃがに木の芽を添える客料理

佐渡市 高野 不二

血糖値カタカナの粉呑んで見る

雨三日体重計が元通り

長男は徳だ一番先に喜寿

ひや酒の味いっぱしの呑みっぷり

びんで出すからほどほどで止められず

北名古屋 片岡 文男

同じとこ老眼鏡が読んでいる

年寄りに財布持ったか孫が聞く

鏡より老けて写った免許証

餅つきの音消え季語が一つ減り

夕刊の来ない夕暮れ何しよう

京都市 清水英旺

除夜の鐘の余韻はこぞの走馬灯

カウントダウン今年の澱がはじけ飛ぶ

元旦は道行く人の声透る

添書のある賀状には顔がある

ペンだこがいまだ健在頑固者

京都市 中野六助

赦されてまたも夕日に照らされる

写真派には任せたくない肖像画

ニートにはなれぬ勤勉にもなれぬ

無言なり無欲なり雪ふりつづく

母のごと雪はひたすら柔らかき

京都市 西村益子

脳も骨もスカスカですとレントゲン

思いやり贈られました誕生日

重箱に姑の見栄詰めておく

せめてもと入浴剤でリフレッシュ

新聞もテレビも寒い事件事故

大阪市 尾崎黄紅

目印のお地藏さんも消えていた

筆をペンに代えた賀状の老いを知る

お団子を食べるこどもの瞳になつて

言うなかれ元軍人の泣き上戸

兵眠るとは大嘘眠れない無念

大阪市 三浦千津子

手を合わすことより明ける亥の年

年寄りに手強すぎます説明書

飾らない言葉で酔わすいい話

投げかけた話を丸く揉み解す

愛なんて危ういものよシャボン玉

大阪府 若月祐作

笛吹けど民は踊らぬ師走です

天の声次々椅子を奪われる

金かねと命を奪うやからふえ

生を受け一つの命守りぬく

おもしろいぞ浪速の寄席に師走くる

大阪府 畑中節子

健康のご褒美ゆつくり句と遊ぶ

まともな世に戻れと祈る初詣で

餅搗きもお祭りさわぎ年の暮れ

色あせず咲いて行きたい夢さげて

散歩道梅一輪にホツとする

大阪市 伏見雅明

栄光を背にして影が長くなり

影ふたつ覗かれぬよう傘を差す

どつぷりと妻の温度に浸りこむ

着せられた妻の濡れ衣乾かない

おしやれ染めしている内に白髪ふえ

大阪市 寺井弘子

泉佐野市 備後三代子

子役出て大人の人気かつ攫う

生き過ぎた言いつつ飲んでいる薬

懐が深いと褒めて高いつけ

ストレスを晴らすお酒が酒を飲む

花時計四季折々に癒される

池田市 上嶋幸雀

新しい私に変わる初日の出

元旦は他人行儀になる夫婦

正月の酔いが吹つ飛ぶ寒の入り

ふがふがと焼き芋分けて食う平和

着服れた妻の本音が分らない

池田市 北出北朗

国民を相互監視の隣組

産めよ殖やせよ戦場に兵が要る

ハチマキに滅私奉公女学生

戦場で人間面は通らない

殺らなけりや殺られるそれが戦です

泉大津市 助川和美

買いたいな平和を入れた福袋

熱燗で鍋つつくああ幸せだ

先ず明かり單身赴任寒い部屋

クラス会年金介護話沸く

いつもかも呑み会下戸が運転手

あごひげを伸ばした孫とする握手

つんのめり歩の定まらぬ老いの靴

責任の持てるわたしでありたいが

忽然と若き主治医の逝き給う

あの人を残して逝けぬ妻だもの

河内長野市 木太久正一

初詣で土鈴と色紙お土産に

賀状来ぬ安否気になる友があり

囲碁川柳公民館に仲間あり

マルチーズ三ヶ月飼いわがいのち

一日が大切になる八十路すぎ

岸和田市 中岡香代

奉納の絵馬が重いと桜散り

お互いを想って待った初デート

譲れない線に凭れる几帳面

鵜呑みした話のあとの胃の凭れ

要点をつまむつもり of 早とちり

堺市 大久保伸子

たんぼぼの絮の行方は誰しらず

歳月は去りゆくものか積むものか

へそくりが棚の奥から顔を出す

政府殿ペーパープラン多過ぎる

目一杯空を翔ぶ夢捨てられず

吹田市 二宮 栄子

しがらみを捨て晴ばれと夕茜
一年の苦勞忘れる児等の顔
独り居の自信もついてよく笑う
譲られた席がむずむずこそばゆい
笑う種さげて友達やって来る

吹田市 藏田 光子

毎日が相変らずに過ぎて幸
頭では解っているが出る吐息
言い訳に心の奥を見透かされ
どの子にも同じく愛をかけたはず
失うてやっと分った深い愛

吹田市 早泉 早人

旨いのはやっぱり母のおせちだな
解決の糸口見えて床につく
お誘いを受けてみようか春の風
諍いもこころの窓は開けてある
妻の嘘あとが恐くて黙ってる

高槻市 笠原 乃りこ

それなりの二人一匹パラダイス
六十には六十なりの未来あり
悩み去り冬のおいも美しい
頼みごとまずはネクタイはめてみる
欠けた皿味は上等ガード下

高槻市 安田 忠子

大掃除済んで落着く十二月
飲み会のお誘い増える十二月
十二月予防接種も済みました
犯罪の手口詳しく書きすぎる
真夜中に次から次へ過去のこと

豊中市 荒巻 夢

核持って持つなと迫るこの矛盾
専用車年の制限ないのかな
子には言え夫には言えぬ褒め言葉
本好きは母が遺した贈り物
生と死に思いが至る初日の出

豊中市 神野 宇乃子

つましい暮らしにもある湯沸かし器
生姜湯と焼きねぎ味噌で風邪退治
あの音は雪が震になったよう
七草を刻みつつ祈る遠くの子
息災を願いつつ炊く小豆粥

富田林市 古田 千華

奏でてる十年日記の一ページ
久しぶり焚火の匂い人恋し
校庭のプールの底に冬銀河
頼りない柱助けて家族愛
もう少し牙を研いてラッタッタ

寢屋川市 小嶋 みさと

セレブ妻心の奥に潜む闇
穏やかな年であれかしゴミ袋
意気込みが先走りするスタート時
悔いのない年にするには今大事
激しさを秘めて仮面のひと演じ

羽曳野市 福田悦子

おたやんの鼻が歪んだ福笑い
豆撒いて心の鬼も追い払い
物忘れ忍び寄り出す認知症
生きています唯一行の年賀状
白旗はまだまだ振れぬ老いの坂

羽曳野市 吉村 久仁雄

練り上げた案が無策に蹴散らされ
歳月に痛みを増した胸の傷
川柳欄今日にもらった生きた覇氣
身のうちの悪飼いならし好々爺
男にもある別腹で食う茶漬け

枚方市 小林 わこ

大器晩成そろそろ期限切れそう
衣食住まだまだ昭和同居して
結び目を解くとゆっくり緩む頬
兄弟喧嘩したいと思う一人っ子
浮いてごらん違う世界が待ってるよ

藤井寺市 増井 ヨシ枝

リハビリの指にやさしい春の風
燃えるもの抱いて真つ赤な落椿
年ひとつ捨てて春から翔んでいる
三が日やっぱり犬の散歩する
水仙のひらく音する霜の朝

藤井寺市 津田 シルク

流行に溜息が出る戦中派
酒好きが今日は飲まぬと言う不安
派手着れば生き方少し変るかな
蝶が舞う五七五が後を追う
古い師骨太の指まらずは褒め

八尾市 脇 俊子

年女何時の間にやら向い風
煩惱が背中を押して日が暮れる
好き嫌い省いて戦士老いふたり
その齢になつて分ると祖母の言
あるだけの思いを文字にこころ晴れ

八尾市 松葉 君江

家の味忘れ予約のせち料理
空白にひと言ほしい年賀状
人生の滋養栄養なる読書
欠かさない日記心の安息所
認知症お金の記憶からうすれ

八尾市 中島春江

神戸市 木村忠義

初風呂に五体満足しみじみと
七草粥今年も無事にありがたし
お年玉もらって嬉し八十路坂
お正月こんなに美味いにぎりめし
ひとり居もパツと華やぐシクラメン

八尾市 西川義明

抱きあげた母がだんだん軽くなる
励まして叱って褒めて母介護
鰯大根互いに惚れて四十年
漕ぎ出した小舟に母が岸づたい
八起き目の度胸と運で築く城

大阪府 神野千恵子

あはははは笑うしかないこの痛み
流水のようにも見える今日の雲
少しだけ騒いでみたい酒を飲む
縁取りがちよっとかわいい夢を持つ
にわか雨相合傘のチャンスくれ

大阪府 谷川勇治

雑草におうおうというその温み
雑草に春がくるだろ私にも
蹟いた石が山もり八十五
雨降って洗い出された愛がある
ペン先の割れ目に潜む青春譜

一年が短くなった定年後
平等な時間ついついなおどりに
工事音我が家からだと耐えられる
親切が過ぎると誤解されそうだ
ほどほどという親切のむずかしさ

相生市 村木信子

初釜がたぎりゆったり濃茶練る
返杯の軽さでわかる敵味方
去るものを追うから絆きしみだす
面白くない日手鏡伏せたまま
北風が昨日の怠惰打ちにくる

尼崎市 小池幸子

元旦や胸ときめかし賀状待つ
生活のリズム守って風邪予防
年新た気合を入れて八十路旅
眼科医に先ずは安堵のお墨付き
老いの坂余生の夢は何の色

尼崎市 河津正治

茶目つけを入れてホテルのディナーショー
ご免ねの一言欠けて残る悔い
響き合う一期一会を懐かしむ
泳法を変えゆつたりと明日の夢
二度の職ノルマ気にせぬ棒グラフ

加東市 黒崎 美紗子

バンザイで眠る赤子の頬のツヤ
誰かれに似たと外野の騒がしい
カラオケで恋する歌詞も声になる
外出が多くて病寄りつかぬ
ゆつたりと正月気分露天風呂

篠山市 谷田 多美子

曾孫に慰められてはげまされ
亡夫の写真喋ってほしい三が日
老人ホームまだ行かない予定表
屋根の雪一期一会の延暦寺
初詣で気合を入れて延暦寺

三田市 阪本 藤朗

入学の祝い安堵と引き替えに
年金が減って体重増えている
酔眼で酔顔見てる終電車
腕時計横目に読経聞いている
急ぐ時気の利かぬ奴自動ドア

三田市 辻 開子

化粧法替えて六十路に春の風
立話時間の無駄にもらう知恵
今朝もまた暗いニュースに顔ゆがむ
検診の異常なしです足軽い
外孫が心みすかし泣きにくる

三田市 白井 二英

錆ついたネジを捻ると折れました
高速道眠気を誘う下り坂
エビせんの匂い充滿バスツアー
メール良し電話の声も捨てられず
外れたら風邪ひきそうで群れにいる

三田市 上垣 キヨミ

川柳と遊ぶ炬燵の小正月
百円で家族五人の初詣で
初詣で終えると足が軽くなる
ばあさんの出番おせちの目分量
スランプにゆっくり休めと神の声

宝塚市 河津 寅次郎

敵役年年まるくなる素顔
守るものあるから今日の身繕い
お手玉をしそうな野手へ狙い打ち
リベンジへ敵には見せぬ武者震い
戦力外はゴミ扱いの大掃除

西宮市 藤本 直

魂に水をやります笑いなさい
くちばしのついている風春の乱
破調だが人それぞれの心唄
前頭葉細かい指図しなくなり
また一人記憶の小径辿って

奈良市 矢野良一

孫六人元氣至福のお正月

初詣で出店気にする孫と妻

炭で焼く餅食べたくて火鉢買う

心地好い台詞はやはり七五調

イントロに聞き惚れ歌が出遅れる

和歌山市 たむら あきこ

校庭のあすなろの木が聴いた初志

追憶の森に昇ってくる初日

電池切れ時計わたくしも休みたい

旅ひとり駅に溜息捨てて発つ

阿修羅像と光の中で響きあう

和歌山市 土屋 起世子

雑煮餅家風通りに丸くする

ぼちぼちと出来ることから始めてる

嫌なこと嫌とも言えず日向ぼこ

一張羅を着て番犬に吠えられる

娘の気持まして息子の嫁までは

和歌山市 根田 よしこ

忘年会わすれたくない想い出も

にっこりと笑顔をくれた初日の出

初夢が気になりすぎて寝付かれず

孫つれてきた娘にもお年玉

無理にでも笑えばちよつと楽になる

和歌山市 田中 すす

気分転換回想日記読み返す

駆け引きは如何と弱い鬼が言う

手の内を明かしてからの共犯者

しばらくの疎遠で判り合えたこと

飾り物はずせば明日が透けてくる

和歌山市 堀 富美子

手の鳴る方に寄れば思わぬ罫がある

鍋囲む子に招かれた大晦日

痛み分けた療友今も訪う温さ

子にもろた年玉亡夫に供えてる

子等帰り抜け殻のよな日が暮れる

海南市 小谷 小雪

卒業へ少年の瞳に青い薔薇

燃える灯をかざして平和祈ってる

正月もあなた頼りと言っておく

北風へ翼ととのえ子が巣立つ

母編んだマフラーいつもあたたかい

和歌山県 森下 よりこ

採り終えた畑を飾る木守柿

裏庭に植え足す一本の椿

意地捨てて杖をついたら楽になり

仏様といっしょに祝うお元日

古い家リフォームさえもむつかしい

紀の川市 木村 徑子

ちやきちやきの江戸っ子が来て偏頭痛

反抗期もにんまりさせたばかり袋

淡彩画光る賀状にまた見惚れ

早口の子にメールなら返事する

もう少し生き残りたく詩を食べる

鳥取市 山口 千代子

煩惱を消して平和の鐘をつく

子孫の幸を祈って合わす母の数珠

お年玉二歳の曾孫が抱き締める

ありがたい米寿過ぎてまだまだ達者

春という季節を待つて耐える日々

鳥取市 谷 岡 清 子

初春や笑い袋は開いたまま

生きていく命の限り泣き笑い

雑煮たべ丸い体がなお丸く

八十路坂人生我流道拓く

老い夫婦話せば耳は一人言

鳥取市 横 田 春 名

初詣で病後の夫は足軽い

歳月は痛む想い出淡くする

待つてよ亡き娘ささやき我老いる

お若いよ煽てにのつて跳んでみる

太陽と月の恵みを忘れてた

鳥取市 岡 田 信 恵

老いの母力ゆるめる肩たたき

初売りに福を求めて長い列

落葉踏む音に喜ぶ孫の足

身の丈の暮しわすれず今日がある

飲みすぎも三が日だけ許される

倉吉市 前 田 喜美子

お正月アツと言う間に梅だより

福は内鬼も入れと呼んでやる

八十路来て残る時間は宝もの

年輪がやさしく見せる顔のひだ

星空に呼べど遙かな父と母

倉吉市 酒 井 芙美子

平凡な暮らしが出来て有難い

内緒ごと壁が薄くて盗まれる

いくつもの壁を乗り越え生きて来た

三行半書いては破りふんぎられぬ

約束を破り友情こわれちゃう

境港市 遠 藤 那珂子

寒波など吹き飛ぶような気力持つ

時計みず魂趣味に打ち込んで

角たてず丸い家族で乗りきれる

急ぐ旅あせる気持がくい残す

ウォーキング二人連れだと歩もはずむ

米子市 小 塩 智加恵

手作りの賀状を続け二十年
七草で胃袋やつと落ち着いた
三代目猪やさしパンを焼く
初春の日和にコート出番無し
銀婚の嫁がおせちを仕切つて

鳥取県 橋 谷 静 江

一日が早く過ぎ去る幸せよ
番号に自信があつた宝くじ
犬病んで家族みんなで神だのみ
カラオケでストレス溶けた甘いお茶
五十年夫婦で蒔いた花を見る

鳥取県 小 飼 和 代

土壇場へチャンス訪れドラマ生む
露草も情けがほしい野辺の道
初夢の続き見たくて早く寝る
這い上がるチャンスの網が見えたらぬ
長寿でも薬漬けでは情けない

鳥取県 岩 崎 和 子

重ね着が多くなつても気が若い
シクラメン鮮やかピンク陽を仰ぐ
笑い皺それが何よと化粧する
新年も変らぬ家事で明け暮れる
一月の陽も柔らかに蒲団干す

松江市 松 浦 登志子

もう一人自分がいたらシアワセか
新年に怠けのツケがそこかしこ
小豆雑煮出雲の女になつていく
手をつなぎ共に白髪の団塊に
ラジオから歌えや踊れ脳刺激

松江市 山 根 邦 代

賀状より声聞きたいと弾んでる
お年玉中味気になる孫の顔
エプロンの休みゆつくり貰います
動かずに頂いた分重くなる
先のばしするから困るあれやこれ

出雲市 川 島 和歌子

部屋飾る宝はないが子は育つ
残したい言葉を飾る五七五
飾らない似た者夫婦共白髪
大人にはなり切れないでいる大人
もどかしい想像ばかりが先走る

出雲市 荒 木 英 子

喪中なり訪ね人なく亥年明け
寒空に北山霞む侘住居
袖風呂のアイディアもらう美人の湯
新年に余生ますますおしやれする
八十路坂好きな服着て初デート

雲南市 菅田 かつ子

宇部市 高山 清子

雨の駆わたし待つてゐるジャンボ傘
平等に育てたはずのみな違い
賑やかな家族勝手な愚痴を言い
貸すほどの顔でなし顔でなし
携帯をモードに変えて法話聞く

雲南市 福岡 博利

大洲市 花岡 順子

コーラスへ出るとき鏡笑つてゐる
衣食住足りて氷雨の音をきく
白い霧出雲の国をつつみこむ
驚ほどはないが背中が丸くなり
短略語どこまでちぢめいくのやら

府中市 馬場 利子

東かがわ市 赤澤 貞月

初心を忘れず生きるペンを抱く
思うこと吐いて小さい夢拾う
白い雲なぜか私を呼び止める
欲一つ捨てると靴が弾み出す
孤独さに呼べば答える母の風

府中市 藤岡 ヒデコ

香南市 近森 功

幸せは昨年ほどに初詣で
文明も立入り出来ぬ神の域
オイシイがすぐ表れる体重計
大小の歯車が合う晩ごはん
亥と共にまず順調に走りだす

細くなった絆賀状で太くする
儉約も我慢も死語となる時世
まだ女ほんのり紅をひく卒寿
考えておくとやんわり断わられ
瀬戸際で度胸がすわり立ち直る

そろそろと歩くのもいい蟻の列
待っているだけの時計を母は持つ
不便さが難点だけど田舎好き
賛成はしないけれども笑つとく

まっすぐに走るだけです年女

背を押され負けず嫌いに火が点いた
メル友の電話で携帯捜し出す
予定など無くて口紅引き忘れ
大喝采稲穂までもがイナバウアー
可も不可も無く安らかに老いの春

羽化をする孫へ晴着が間に合わず
諦めな何れ芽を吹く春が来る
丸い背な曾孫にも貸し祖母は老い
戦友は未だ生きていたのだ賀状来る
大正へ寄り添うように昭和妻

香南市 百田 幸

結び目を解きたい時もあり夫婦
お酌する妻も少々いける口
父親も共に泣いてる負けいくさ
毒舌もお世辞もおなじ口が言う
面白い大根洗う手が真赤

高知県 いの静草

自己破産させた嫁でも孫の母
十二歳離婚へ父の背なを押す
お年玉貰つてこいと送り出す
ご馳走より宝はふだん着の暮らし
気張るまい既に刀も錆びている

北九州市 岡田 幸生

少子化を案じブランコ風に揺れ
孫に買う玩具にママの許可が要る
苦勞した妻と金婚日を祝う
親になる資格が欲しい虐待死
言いすぎたことを悔いつつ傘たたむ

唐津市 岩崎 實

自分の名書かぬ賀状が舞い込んで
なつかしむだけでは昔泣きますよ
変わる世をじつと眺めて除夜の鐘
ミスばかりしている夢に起こされる
爺様と呼ばれるほどの顔が欲し

山鹿市 米加田 恭代

他人事とは思えない夕張市
捨てたらば新しい物入ります
遊ぶためスケジュール帳管理する
罪犯し過去の言動暴かれる
ふくよかな母そっくりな芋届く

メルボルン 藤原 ポン吉

除夜の鐘百八聞いた事がない
紅白という名の除夜の鐘ひとつ
長寿にと年越しわざと蕎麦のばす
お雑煮の味付けもある西東
年明けの夢見悪くて二度寝する

シドニー 内山 佳代子

ピーハッピー今年もこれで通したい
受話器から流れる母の声やさし
いとしくて寝顔をそつとなでみる
理想など追えば一生ひとりの身
愛されて女はまるくなるのです

シドニー 森本クックバラ

知事になりや天上人になれるらし
商魂が団塊サマと持ち上げる
戦争を知らぬが誇り団塊ら
負け組よ徳俵ある踏ん張つて
日本へ帰国と言わず行くと言う

横浜市 金森徳三

年ごとに手抜きが増えて大晦日

娘から養生訓を贈られる

夢で見た知らない町が気にかかる

田舎にもいじめがあった村八分

藤沢市 加藤 スズコ

柚子風呂に老いて至福の湯の香り

街並みに古里想う鬼瓦

賀状から親子いのしし和む初春

冬木立夢の明日へ集う鳥

浜松市 杉浦 恵夢

路地裏を歩く速さで暮らしたい

のんびりとあとに従う三人目

ひらめきはポストに入れたあとに来る

大笑いみんな仮面がずれている

浜松市 中田 尚

気まぐれなペン走らせる日本晴れ

カラフルなペンにハートがはねている

気まぐれなペンに人間おどらされ

マスコミのペンにしつばが生えている

大阪市 平嶋 美智子

雲一ひら浮かせ青空平和です

豪邸をちよつと覗いてみたくなり

目一ぱい鈴をならして運祈る

今日早寝明日の力たくわえる

大阪市 平井露芳

共白髪共年金で老い平和

美しい日本こわす駄目な知事

出る出ると催促してる万歩計

男らしい男がなった骨粗鬆

大阪市 吉内福世

しがらみを吐いて猛進亥の年に

ばあちゃんもメール世界に乗せられる

初みくじ吉をたよりに突き進む

曾孫の笑顔みたまの若づくり

大阪市 澤田 定子

車椅子世話になるまい一万歩

お隣と歩調あわせる募金額

我が家計いざなぎもなし十二月

カラスの知恵一枚上とゴミ袋

大阪市 吉田 富美

病む父を背負い歩いた弟よ

青春は戦で恋も出来ぬまま

ふるさとの味なつかしい忍者鍋

平和の字書けば心も平和です

大阪市 吉川 弘泰

流行のネクタイ締めて汚れ靴

なんでやろ年を重ねりやよく涙

繁昌亭春の着飾り笑い合い

鍋囲む家族の顔にかすむ湯気

池田市 多田契子

金持ちの家は無音のたたずまい
糖尿病理しいですが治りません
密約の詳しい事は藪の中
さあ寝よう朝はむくみのとれる足

門真市 矢阪英雄

笑い初め苦虫なだめ声を出す
下駄の音遠ざかり消え年が来る
瓶の中金箔おどる年初め
過ぎた年愚痴の数だけ蕎麦伸びる

河内長野市 黒岩靖博

散った恋未練がましく追うなかれ
湯煙の切れ間に見えるおぼろ月
失恋は桜のように清く散れ
飽きるまで食べてみたい大トロを

河内長野市 内海綾乃

山盛りバナナ昔は庶民口出来ず
一人暮らし淋しい心自由です
足不自由家の窓から初日の出
老健へ親不孝詫び母見舞う

河内長野市 宮守正博

去年よりきれいになったと呆けていう
贅沢は少し溢れる湯を流す
犬だけが俺のマル秘を知っている
にこにこに油断するなと教えられ

岸和田市 坂口英雄

争いを止めさす神はないこの世
初詣で人には言えぬ願い事
居てほしい帰ってほしい里帰り
世の流れ逆らえないと群れている

堺市 荻野象山

ネオン街歩いて孤独感つりのり
落葉踏み秋の深さを確かめる
病院にマスクあふれる年の暮れ
ギャンブルと知らずに走る競走馬

堺市 羽田野洋介

勝ち組もまさかに足を掬われる
見直せば何のことないコレクシヨン
時流れ絆も揺れる代替わり
予定通り事が運べば苦勞なし

豊中市 源田啓生

いもたこのドラマほのほの良い昭和
困にノロウイルスが笑いおる
電子機器進化しモラル退化する
箸転び笑う少女の消えた国

寝屋川市 森田麗

一人っ子大きな荷物背負わされ
本当はついでに行きたい天の邪鬼
頬笑むところりと参る大男
家計簿に素直に書けぬエステ代

寢屋川市 北田 ただよし

地底揺れ大黒柱凌いだ日（二月十七日の地震）

古釘が芯まで錆びている古家

檀の実何を思うて真っ赤っか

父からもあの日のゲノム子へ渡り

寢屋川市 岡本 勲

ひらめいて買ったが馬券宙に舞う

話し合いのきっかけつかめぬ拉致問題

地図にない道自己流に生きている

シナリオを書きかえ出直す定年後

羽曳野市 仲谷 真一

当たり年飛躍の年にしてみせる

忘年会忘れたいことたとある

金塊をふうふう運ぶ夢をみた

雪に寝た竹を旭がゆりおこす

羽曳野市 永田 章司

利権にはべっとり付いた官の垢

初詣で去年の無事をまず感謝

裏金になると公費が私費に化け

甥姪の世代になった年賀状

羽曳野市 松本 静子

山並に霞たなびき春近し

駒ヶ谷ぶどうの山も眠ってる

六本木眠らぬビルのヒルズ族

いざなぎの景気と言うがどこにある

枚方市 小川 良吉

苦屋消え枯れ松目立つ故郷の浜

松竹梅いつも梅です我が所帯

日本国総飽食の松の内

合わす手が様になる喜寿ありがたし

藤井寺市 俣野 登志子

孫が来て笑顔絶えない三が日

いいにつけ悪いにつけて親に似る

ど忘れをしたのはどっちまあいいか

携帯に孫の写真が詰まってる

藤井寺市 伊藤 アヤ子

玄関の松竹梅が凜とする

書き初めに心をこめてありがとう

ワンテンポ遅れ今年もついてゆく

病んでみて初めて分かる看護の手

箕面市 寺井 柳童

初詣で吉で始まる二〇〇七

花粉症マスクかけてる雪だるま

レジの前払う払わせ揉めている

師の言葉心に刻む今日がある

八尾市 前田 紀雄

一年の反省多し窓研く

近頃はよくかみしめて鮎たべ

幸せは妻の笑顔と旨い酒

孫と鍋一家団欒三が日

八尾市 田中 トシエ

あたたかい湯気の向こうに母笑顔
子たくさん千支の亥年賀来る
今日ひと日生きた証しの初日記
捨て切れぬ物に埋まって生き続け

八尾市 寺川 はじむ

定年に慣れてオールが揃い出す
涙声ボチも演技が上手くなり
荒削り魅せる球児の春を待つ
熱冷ます特效薬を待つ地球

大阪府 大屋敷 婦美子

七十路坂二人三脚またたのし
雪の日は猫と共々部屋の中
無駄遣いするのも生きる意欲から
病窓やいたわりあつて息つなぐ

大阪府 高木 道子

急かされも急きもせぬのに六十路坂
散り方を覚えぬ椿の花むくろ
北風に媚など売らぬ冬木立
記憶力良すぎる卒寿落ちつかぬ

大阪府 西川 冷子

日記には本音を書いていた油断
明けきらぬ湖面埋める蒸気霧
鳥除けのネットもくぐる強いもず
句を書いたメモ紙かくれて二年越し

大阪府 小栢 こずえ

暮れなのにゴルフする人すすはらい
例年の通りに出来た初詣で
ドラマ繰るような一日がすぎていく
三が日過ぎて平和な日が戻る

神戸市 武田 恵美子

てもちふたさ孫たちいない春休み
しずかだなカニを食べてる団体さん
塾帰り階段上る孫の音
兄弟でどうしてこうもちがうのか

尼崎市 桑名 東園

発車待ち最後の客が駆けて来る
おやすみを月に届けて消す明かり
無い袖をさも重そうに振って見せ
老いも好し気軽に司会引き受ける

尼崎市 古川 正子

今年こそテレビ体操始めます
正月に二歳の曾孫来て楽し
小春日の紅い山茶花話好き
銀杏の木新芽ふくらむ青い空

加東市 岩本 美緒子

大丈夫こころの彩は適えてる
百貨店中味区別の福袋
作り亥に下車して拝む安志寺
稲穂像の迎え猪お賽銭

加東市 安達 厚

せなあかん事ではないが忙しい
生きててね言うてくれるの一人だけ

近況の一句を添えて出す年賀

二人して一人前がむずかしい

篠山市 永井 かほる

初日の出昇った昔若かった

お正月孫をかこんでぼたん鍋

小雪舞うおでんぐつぐつ句いする

骨密度ちよつとじまんがしくなり

西宮市 石野 照代

酔ったふり軽くあなたにワンタツチ

離婚だと時々おどしかけておく

大風呂敷ひろげたあとがためたない

ていねいな言葉は何かたのみごと

奈良市 尾畑 なを江

見つめられ瞳を返す無言劇

風雪に耐えた生家の取り壊し

手離せぬ時に続けて電話鳴り

好景気我が暮しには沙汰がない

生駒市 小西 稔

流行を追った衣裳はすぐすたれ

流行にすぐに飛びつく新世代

今の子は鉛筆削る技も無し

身を削り笑顔で渡すお年玉

和歌山市 坂部 かずみ

甘酒につられ遠くへ初詣で

達筆で追加報告年賀状

ハイビジョン美人ばかりで寝不足に

飽食で冷蔵庫から腐りかけ

和歌山市 山田 侃太

肩凝りがレントゲンには写らない

昇給がないのに靴底が減って

フリーズドライ信じているよ明日のこと

秘密基地夢を忘れたことはない

岩出市 村中 悦男

いいんだよ言う老婆のいい笑顔

ゆるゆると朝のスタート古い二人

心配事長風呂の湯がそつとり

音程のくろいが笑い一人じめ

鳥取市 山岡 紀子

母さんがトップ平和な日が暮れる

母さんに似たのか孫も絵が下手だ

ハードルを下げて六十路の夢を見る

笑いじわ増えて今年も弾んでる

鳥取市 近藤 秋星

穏やかな元旦こんな年であれ

ゆつたりとゆつくり行こう本年は

七草を過ぎねば脳が始動せぬ

逝く年よさらばよろしく来る年よ

境港市 中井虎尾

親友は褒貶出来る仲の友

山茶花はばらばら椿ボンと落ち

抜かれても抜いてもいずれ行くあの世

朝の西つかれた月にひかりなし

米子市 猪森 スミエ

ピンピンコロリそんな工夫のプログラム

人は人俺の財布に合う暮らし

過疎暮らしのんきと不便同居する

戦中戦後無事に今日ある笑い皺

鳥取県 岡本幸枝

過去形と今ではすべて許してる

国担う二十歳の仲間夢を抱け

学生着脱いでさっそう自立する

猪よ無事に新年迎えたか

鳥取県 大田勝誉

追っかけるふる里遠い母もなし

おもいやりあげます野菜外交で

クラス会しつかり自己をピーアール

クラス会歳相応の笑いジワ

鳥取県 毎田信雄

頑張ってますねと亡妻が褒めてくれ

時期を待つ狸爺となつており

妖怪も神に納まる港町

指切りげんまんこどもに念を押されます

鳥取県 飯野 菖子

投げ入れて自然を生かす四季の花

小銭から札に変わった孫六人

カーテンを引いてゆつくり月を見る

豊作に足腰痛み忘れてた

鳥取県 北村 稔

新畳ミケがにおいに目を細め

メニユーなどいらぬメザシとワンカップ

つかれた胃七草粥でほつとする

トップでもビリでも命一緒です

鳥取県 岡村孝明

海荒れる予報に料理肉に変え

紙面から川柳の種貰つてる

病いえふらふらの身に夢を追う

勿体ない手持ちぶさたな白い部屋

松江市 柏井日出子

笑顔して義姉ふうわりと逝き給う

残る姉わが人生の道しるべ

負けて勝つ姉に叶わぬ人生譜

百歳の師のかしこくて優しくて

松江市 相見柳歩

君といてやつと分かった恋の道

虹が出た虹と一緒に呼吸する

宍道湖と朱色の夕日抱きしめる

人と花並ぶと華になり生きる

雲南市 武島 ちよえ

何時も会う顔に新年長まり

ばあちゃんの味が好きだと孫の世辞

いつも来る賀状が来ない電話する

目印が大きくなってゐる眼科

府中市 岩本 雅代

臘梅が窓をのぞいて語りおり

新成人晴着姿は桜草

句の仲間年賀の出合い嬉し春

喜寿祝熱い涙で枕ぬれ

今治市 渡邊 伊津志

人と人結ぶ優しい風が吹く

有難うと素直に言つて難逃れ

愛してる照れずに言える良い亭主

裸木となつて恐れるものがない

東かがわ市 中塚 寿々女

バーゲンのセーター一枚春気分

春が来る胸がふり子になり変る

雨シンシンぬれて時節の変化知る

庭先の椿一枝イナバウア

シドニー 三谷 たん吉

添削にむつとしながら頭下げ

政治家を外して政治やらせたい

それとなく不安もあつて明日がある

犬や猫人より人を信じてる

温故知新

大阪市 橘高薫風子

春の雲旅に出よというごとく

四面楚歌故郷は豆の花の頃

キリストの肋に似たる昼寝をし

豊中市 戸田 古方

俵のタバコ一本もろてからねむる

上げ潮にさからいかねているヒトデ

青空の底の知れないのがこわし

大阪市 西尾 葉

交渉はギブアンドテイクの肚でいる

チト低い鼻でサービスゆきとどき

最後の最後の味方は妻なりき

大阪市 西出 一栄

腹案の先手先手を打つてくる

仲よしの今日の欠席気づかわれ

なみなみと酌がれ口から出むかえる

「川柳の雑誌」 麻生路郎主宰
No.400 祝賀記念自選句集より

「各地句会だより」掲載について

表記の欄は平成九（一九九七）年七月号をもって終了していましたが、平成十九（二〇〇七）年から改めて一頁の欄を設けました。

川柳塔社傘下の小集句会で、紹介・アピールをご希望の会は川柳塔社事務所まで原稿をお送り下さい。

会の様子、または会員の集合写真を必ず添付して下さい。（前回掲載した句会も再度投稿可）

なお、掲載順・添削については編集部に一任願います。

内 容―会の特色・行事・これからの予定など

自由

締め切り―随時

行 数―たて20字×54行

（400字詰原稿用紙2枚と14行）

第5回『川柳展望』現代川柳大賞

対象 新作十句 応募は一人一口に限りります。

表 題 表題をつけて下さい。（「無題」も可）

用 紙 B5版原稿用紙（便箋も可）をタテに使用のこと

（応募用紙をそのままコピーします）

応募料 千円（切手可）

発表誌は別途二千円頂戴致します（会員外）

締切日 2007年5月31日

宛 先 〒567-0009

茨木市山手台4-6-3-101

川柳展望編集部

発 表 第11回川柳展望全国大会『川柳展望』131号

表 彰 現代川柳大賞 一名（記念楯と副賞三万円）

同 準賞 若干名（記念楯と副賞一万円）

同 佳作 若干名（記念楯）

審査員

金築 雨学 草地 豊子 佐藤 岳俊

新家 完司 高瀬 霜石 津田 暹

なかはらいこ 天根 夢草

愛染帖

新家 完司 選

病院へバスで通えるまだ元氣
(評) バスに乗って病院へ通える元氣があれば大丈夫。外出する氣力も失せて、朝から晩までテレビにしがみついている人より健康的。

酒二合理想のほくができあがる
(評) 此事にこだわらずニコニコ笑顔。どんなにも愛想良く、まるでほとけさま。酒を飲まないときもこのようであればいいのだが。

切り抜いて試した事のないレシビ
(評) 食器棚の横に貼り付けてある色褪せたレシビ。切り抜いたときは、「よし、チャレンジ!」と、張り切っていたのであるが……。

洋式でないと駄目だと老いている
(評) 膝が痛くなると和式にしゃがめなくなるのは誰しも同じで、恥ずかしいことではない。堂々と、「和式は駄目」と主張しよう。

肝心な個所がカタカナ語で困る
(評) はやりの外来語が多い文章は浅薄。文章の達人はカタカナ語に頼らず、やさしい日本語で、誰にでも分かるように表現する。

イブの日も柏汁で足る老いふたり
(評) もうブレゼントを用意する必要もないし、サンタクロースになることもない。風の音を聞きながら、あつあつの柏汁をフーフー。

古稀なのに今更酒を止めよとは
(評) 今止めても二十代や三十代の身体に戻るわけじゃない。最大の楽しみがなくなる。と、よけい寿命が縮まってしまつてはいないか。

紐かんで生きる自由がほしい犬
(評) 「この紐が邪魔なんだ!」と噛みついて首を振る犬。もしも、私が括られて自由を奪われたら、やつぱり紐を噛んで首を振る。

子殺しのニュースに映る三輪車
(評) 子供はみんな、お母さんが大好きだ。そのお母さんに殴られ、虐待されて死んでしまった子供。どんなに悲しかったことだろう。

春を待つ出刃包丁を研ぎながら
家中がクローゼットで物置で

損得になるとじつくり思案する
大人にも子供にもある悩みごと

急逝を知らぬボトルが棚にある
カレンダートイレにも貼り年明け

仏像に安室奈美恵のような顔
恥ずかしいわたしが映る洗面器

三文の損をしてでも朝寝坊
早退をしてから熱がずっと引き

角砂糖お前も消えて役に立ち
逃げ水とわかつていても片想い

居ない方が気楽でしようと家を出る
たそがれる川を眺めてばかりいる

昨晚の記憶を孫に試される
親父どのあなたの歳を越えました

システムキッチン湯の沸く音は変わらない
メイドインチャイナしかないトースター

南限も北限も無き汚職かな
忘年会老女が競う恋の唄

和歌山市 喜田 准一

鳥取市 永原 昌鼓

唐津市 久保 正剣

弘前市 高瀬 霜石

大阪府 米澤 俣子

八尾市 田邊 浩三

三宅 保州

森田 明子

森田 明子

鈴木いさお

高島 啓子

稲葉 洋

三浦千津子

三浦千津子

大阪市 渡部さとし美
プタマンの列へバーゲン品かかえ

大阪府 初山 隆盛
大トロ食うタレント見てるあほらしさ

藤井寺市 太田扶美代
チャーハンの人參除く男なり

堺市 山本 半錢
兵児帯をたて結びする人でした

大阪市 伏見 雅明
雨漏りの跡あちこちに老いふたり

和歌山市 木本 朱夏
黒猫の金の眼に春兆す

京都市 中野 六助
捨て猫の眼で爪を噛む少女

福西 茶子
いろいろと事情があつて福袋

島取市 福西 茶子
馬鹿になる葉ひねもすテレビ漬け

弘前市 福士 慕情
海岸のゴミもこの頃多国籍

雪国に住んでいるから雪を掻く
新規開店カード一枚持たされる

八王子市 播本 充子
グーバーグーバー手袋を選っている

高槻市 佐甲 昭二
胡蝶蘭自分で買ったことがない

よい事のあつた昔が胸に棲む
無愛想な電話の顔が目に浮かぶ

海南市 小谷 小雪
人間の都合でベツト値下げされ

母のため笑える会話とつておく
河内長野市 坂上 淳司

美しい国のモデルはアメリカか
アンコール指揮者消えたり出て来たり

福原市 居谷真理子
飲みこんだ涙水琴窟が鳴る

ロゼワイン飲んで演歌の酔いになる
尼崎市 山田 耕治

正月も帰らず元氣ならばよし
人形が捨てられているゴミ袋

同窓会少しの自慢ぶらさけて
ゆつくりと遠いトップを追いかける

吹田市 大谷 篤子
ゆつくりと遠いトップを追いかける

西宮市 片山 忠
正月に妻と乾杯したけれど

小遣いを少し不純に廻したい
東かがわ市 池内かおり

へこたれんように三食欠かさない
安静を乱して去んだ見舞客

枚方市 海老池 洋
中吊りを見てるしかない満員車

悪人の多い国が僕の国
鳥取市 田村 邦昭

天罰と思えば痛み少し減り
大洲市 花岡 順子

枚方市 伊達 郁夫
じんわりと漢方薬が馴染む歳

和歌山市 古久保和子
一人一役私は靴を揃えている

大和郡山市 坊農 柳弘
ミサイルの届かぬ距離で手酌酒

米子市 政岡日枝子
お婆さんばかり住んでる隣保班

鳥取市 土橋 睦子
薄味の料理に慣れぬ頑固爺

三田市 北野 哲男
脇役の妻はキムチのトウガラシ

高知県 いの 静草
ジューゲムほど長い神代のフルネーム

岩出市 村中 悦男
胸張って賞罰なしと言えません

年輪を数えなくなる貯木場
病経て仏壇によく手を合わせる

鳥取市 有沢せつ子
検診に行く勇氣なく竹を踏む

金持になる夢は買うだけで済み
和歌山市 たむらあきこ

繕いをしながら生きて待つ初日
ありふれた風景なのに初日の出

堺市 村上 玄也
回復と老化が競い合う病後

やることもやらす不遇を託つてる

大阪市 岩崎 玲子

月きれいひとりの夜はお姫さま
世間では捨てる掃除がほめられる

加東市 中上千代子

ワンルーム夢一杯の親ばなれ
成るように成ると骨盤ゆるがな

豊中市 神野宇乃子

頂いた厚い手帳に何書こう

藤井寺市 鴨谷瑠美子

夜の道バッグかかえて命懸け

島取市 岸本 宏章

のっそりと朝の鏡に亡父がいる

岸和田市 中岡 香代

ジョギングへ行くならゴミも出しとい

河内長野市 水谷 正子

ビバルデイ春はそこまで来ています

八尾市 田中トシエ

ささやかな財産ドアの鍵一つ

尼崎市 春城 年代

岩波文庫こんなに小さな文字だった

唐津市 仁部 四郎

デパートに用あり駅弁コンクール

米子市 青戸 田鶴

吹雪く夜は何も思わずすぐ眠る

交野市 田岡 九好

古希なればはや絢爛と死ねる歳

島取市 土橋はるお

風花を分けてスクールバスが行く

八尾市 高杉 千歩

餅焼いてお米が減らぬ春炬燵

大阪市 前 たもつ

思いつ切り自分時どきはめてやる

香芝市 大内 朝子

人とひと一気に酒が近くなる

池田市 上嶋 幸雀

ちよいワルを気取る薄着で風邪をひき

島取市 録沢 風花

終る日が分らないから笑ってる

シドニー 森本クックバラ

爪切った猫を薄着でだつこする

藤井寺市 高田美代子

買い物はしないと決めたバスポート

尼崎市 田辺 鹿太

雑壇に悩みがゼロの顔ばかり

東かがわ市 伊勢八重子

出てる物みな片付けよ孫が来る

西宮市 門谷たす子

抜けられぬトンネルだつて歩かねば

唐津市 宗 水笑

行かずとも植山街の中にある

和歌山市 柏原 夕胡

小指の先にちよつと止まっただけのひと

倉吉市 山中 康子

点滴と雲の行方を追っている

美祿市 安平次弘道

野放図な男階段踏み外し

加東市 黒崎美紗子

何よりのご馳走ですと湯につかる

弘前市 櫻庭 順風

人口は過疎でも心過疎でない

寝屋川市 平松かすみ

感謝状上げたいひとりガードマン

寝屋川市 岡本 勲

ぬくもりをちよつともらいに絵本展

尼崎市 長浜 美龍

良からぬ事が起らねばよし温暖化

豊中市 水野 黒兎

バス停に元学校の名が残る

和歌山市 榎原 公子

欠札の暮らし結構清々し

取手市 葛西 清

広い家建ててロインが忙しい

倉吉市 松本よしえ

ブランドに凝る女の子お金持ち

堺市 加島 由一

小春日和絵になる祖母と猫がいる

大阪市 柴本ばつは

すぐ油断するので困る春財布

島取市 岡本 幸枝

初孫を待つ産院の夜が白む

八尾市 吉村 一風

お天気と孫と妻には逆らえぬ

八王子市 川名 洋子

チヨイ悪のオヤジの視線眩し過ぎ

奈良市 矢野 良一

京湯葉の味あるようないいような

東京都 清原 悦子

歩くしかない道だから前を見る

横浜市 金森 徳三

働いている人が居てお正月

三田市 阪本 藤朗

公園に風揚げを見ず三が日

八尾市 中島 春江

お賽銭いくらあったか神知らず

三田市 堀 正和

桜湯の中に迷いが浮いている

鳥取県 佐伯 やえ

春になる独楽へ油を注いでおく

日立市 加藤 権悟

湯治場に七福神の貌ばかり

高槻市 左右田泰雄

前向きの姿勢で拝む初日の出

和歌山市 坂部かずみ

初笑い友が集まる喫茶店

和歌山市 寒川 武

注連飾つけた車は私だけ

三田市 上垣キヨミ

若水を汲んで歯ブラシ取り替える

宇部市 平田 実男

学歴が邪魔して地下足袋が履けず

河内長野市 村上 直樹

金盃ひとつ企業戦士の大動位

堺市 矢倉 五月

ときめきとまでは行かぬがちよっと好き

倉吉市 野口 節子

三十年に母の手紙がとつてある

大阪府 小栢こずえ

手作りの仕事こしらえ呆け防ぐ

高槻市 瀧本きよし

妻旅行朝から一升瓶抱え

三田市 石原 歳子

マフラーに首をすくめて春探す

吹田市 早泉 早人

待ちきれず春を詰め込む予定表

東大阪市 谷口 義

タンポポが咲いたブラウスでも買おう

鳥取市 倉益 一瑤

脳半分ずれたまま出るピカソ展

西宮市 坪井 孝一

抽象画どんな批評もあて嵌まる

唐津市 山口 高明

ホルモンが足らぬおんなの声尖る

紀の川市 木村 徑子

そしてそれから見事につなぐ聞き上手

今治市 渡邊伊津志

すぐやれば度忘れせずに済んだ筈

今治市 塩路よしみ

太陽が昇り洗濯したくなる

羽曳野市 酒井 一壺

愛情を形にせよと攻められる

吹田市 穴吹 尚士

貧乏と二人三脚したまんま

米子市 小塩智加恵

核となる人が居るから広がる輪

大阪市 井丸 昌紀

プライドを忘れて歳をとつてゆく

松江市 安食 友子

音読を時雨が誘う小半時

東京都 岸野あやめ

褒められているのは中身よりドレス

京都市 都倉 求芽

手紙書くほか所在なし外は雪

芦屋市 黒田 能子

ぬくぬくとカイロを腰に冬の旅

尼崎市 春城武庫坊

信号黄に立ち止まる人走る人

橿原市 安土 理恵

もったないだからすつかり平らげる

札幌市 三浦 強一

行間に内緒内緒のある日記

堺市 奥 時雄

その日まで謙虚に過ごす次期社長

大阪市 奥村 五月

強い酒飲むが沖縄長寿国

吹田市 太田 昭

昭和史のうねりに耐えた土踏まず

河内長野市 針生 和代

軍拡の足音がする防衛省

誹風柳多留——一篇研究 19

山田 昭夫・増田 忠彦
山口 由昭・小栗 清吾
伊吹 和男
清 博 美

122 ぎんなんが落ると楊枝置いて立ち

山田 浅草寺の本堂の周辺や奥山一帯には、楊枝見世や五倍子見世などが数多く出店していた。水茶屋同様、板屋根の葦簀張りの仮小屋だが、いずれの見世も若い美人を置いて、楊枝や五倍子などや鳩の豆などを売っていた。野暮な浅黄裏や鼻下長族は、その美女目当てに行くのだが、

やうじ見世さて出来そつて／＼ 末 15
なかなか出来なかつたようだ。それでも大繁昌だつたという。

奥山に大きな銀杏の樹があつたから、主題句はその辺りでの光景であろう。気の利いた話題などない野暮天の、時間繋ぎのための行動。なお、評判の柳屋お藤が居たのもこの辺

りである。

あのいてう何年ほと、浅黄いひ 拾二 31
ぎんなんかさそならふのと浅黄つら

山口 賛。ぎんなんを拾おうというのでしよう。

小栗 楊枝店の句には間違いないと思うのだが、状況がよくわからない。まず、「銀杏」と「楊枝」の組合せは、やはり「柳屋お藤の句」と決めてよいのではないかと思うが、その店で「誰が何をするのか」よくわからない。磯説は、「野暮天が楊枝を置いて立つ」ように読めるが、何のために立つのだろうか。万句合の前句は「すくひ杜すれ」だから、山口説のように銀杏を拾おうというのだろうか、いくら野暮天でも、あの悪臭を放つてカブレ

やすい銀杏を拾いにいくものだろうか。楊枝を叩いている親父が手を休めて銀杏拾いに掛けるという解釈では、あまりに野暮天か？ 伊吹 磯賛。銀杏と楊枝で浅草寺を引き出せば、それで正解という句だと思ふ。

清 銀杏と浅黄は、川柳の約束の一つともいえよう。
「ぎんなんが落ると」は時間の経過を言おうとしているのではなからうか。長居していた浅黄がフットしたキツカケで立ち上がった。そのフットしたキツカケは、銀杏が落ちたことでは如何。

123 おやぶんハこしをくわらく／＼御門出る

山田 親分が腰をがらがらさせながらお屋敷の門を出る、というのだが、どんな場面か判然としない。

親分のこしハ鳴子の風をうけ 宝日鶴 2
という、主題句の親分の様相を思わせる句があるが、この句の前句「たいそうな事／＼」から考えると、色々な鍵などを腰にぶら下げていたのかもしれない。何れにしてもはつきりしない。また、何の用事でお屋敷に行つたのかも分らない。ご教示賜りたい。

めつたでハ親分帯ハしめぬ也 玉 17

山口 親分の腰を振った大形な様だけに思えるのですが不明。

伊吹 賛。遣り手などと同様に、親分が鍵の束をガラガラと音をさせながら家を出る所だと思つた。

鍵のつく腰に細イハ見あたらず 宝10札2

また、親分の家の出口を揶揄して御門と言つたのでは。

清 「腰をぐわら〜」は、どうも鍵のようだ。

124 浅きうらやわらでぎうをきつく也 ママ万

山口 柔は「火柔術。やわらじゅつ」。きづくは「つついて責める」(「日国」)。

待てど暮らせど来ぬ敵娼、腹を立てて妓夫に八つ当たりしている浅黄裏。浅黄裏でも「柔」はお手の物。元はといえは手前がもてないからだに、妓夫にしては大迷惑。

ふられると武勇をふるふ国詞 拾四23

御手前か喜助か時にアノ女郎 七四36

山口 賛。不粋の極み。

清 賛。

125 てつじやうて御玄関へ来るおそろしさ

山口 鉄杖は「鉄で作った杖。鉄の棒。鉄拐。てつかい」(「日国」)で、本来鬼の持つもの。それを持つて「御玄関」つまり旗本あたりのお屋敷へ来たのは、金貸しの座頭であらう。無論借金

の取り立て。

坐頭のほうとのに逢ふと大きく出 拾九31

増田 賛。鉄杖は揶揄で、木の杖をこう表現したかったのでしょう。

山口 賛。借金取りを鬼に譬えたのでしよう。清 賛。

126 喰いつみを三十日に喰ッてしかられる

山口 食積は「①正月に年賀客に儀礼的に出す取りざかなで、蓬莱台や三方に米を盛り、熨斗おしと、勝栗、昆布、野老とろろ、干柿などをそえたもの」(「日国」)。それを大晦日に食つたというのだから、「しかられる」のは当然だろう。

喰つみハ松に日の出のけしき也 七六29

清 賛。

127 田楽を喰ふ内まゆ毛かぞへられ

山口 眉毛を数えられるは「眉毛の数を数えられると狐狸の魔力にかかつて化かされると

いう俗信から、狐や狸に化かされる。だまされる」(「故事俗信」とわさ大辞典)こと。

吉原に近い真崎稻荷の狐色に焼けた「田楽を食う内眉毛数えられ」、吉原行きとなつてしまった。悪いのは狐(色の田楽)で、当人の関知するところに非ず。

真崎で焼田楽もきつねいろ 一〇二13

清 賛。

128 あらためにあふとハかたい紅葉也

山口 「改め」は中川御番所での舟改め。

紅葉の名所としては、海晏寺、正灯寺、それに弘法寺が知られていて、柳句にもたびたび登場する。海晏寺は品川鮫洲にあり、また、正灯寺は浅草竜泉寺だから、それぞれ品川や吉原の遊里に近いので、それを騙つて遊びに行くといふことになっている。その点、下総国真間の弘法寺は距離もあり、近くにいかかわしい所もないから、「堅い紅葉」となる。真間に行くには中川御番所(小名木川が中川へ通じる所にあり、通行の川船を検査した)を通らねばならないから、「堅い紅葉」は弘法寺の紅葉ということになる。

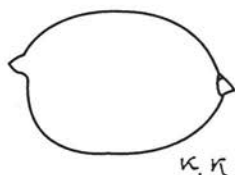
色このまざるハ関所を越て行

清 賛。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)



「満 足」 川 上 大 輪 選

大金も借金もなく日向ぼこ
親だけが満足してる熱通い
満足に新聞読んだことがない
完走へふつつ笑みのこみ上がる
今日もまた自己満足の五七五
満足の底がだんだん浅くなる
散り際も満足そうな寒牡丹
ああ飲んだ食った喋ったさあ寝るぞ
この貌にわたし満足しています
満足な暮らしがさせる二重アゴ
満足をしている熊は森を出ぬ
満足じゃ余は満足じゃ介護バス
五体満足で何かが欠けている
満足な教育受けてフリーター
満足な答が出ない北の空
満足に喋れないほど飲んで寝る

東かがわ市 清川 玲子
大阪府 神野千恵子
和歌山市 福本 英子
寝屋川市 森 茜
大阪市 井丸 昌紀
豊中市 江見 見清
出雲市 伊藤 玲子
河内長野市 村上 直樹
神戸市 山口 光久
和歌山市 田中 みね
海南市 堂上 泰女
東京都 長谷川康子
さいたま市 星野 育子
日高市 根岸 方子
藤井寺市 若松 雅枝
大阪市 榎本日の出

「満 足」 松 本 文 子 選

満足に歌えないのにマイク持つ
切りますと言えば満足そうな医者
フルムーン今日は私に主導権
満足に気付く暇なし生きている
満足を追い求めると切りがない
戒名に満足してる遺族 寺
人間ていいなたくさん夢がある
たつぷりと飲み言うことは言ってきた
賽銭箱は満足をしています
七人の敵に満足しています
温泉で声高らかにいい湯だな
満足な顔が並んでいる飲み屋
初日の出に満足僕の地平線
満足度ライン上げてから孤独
満足しようもつと苦しむ人が居る
満足な一生でしたありがとう

堺市 村上 玄也
海南市 三宅 保州
八王子市 川名 洋子
鳥取県 飯野 葛子
東大阪市 佐々木満作
三田市 北野 哲男
松原市 玉置 重人
松江市 川本 畔
東大阪市 谷口 義
和歌山市 上地登美代
米子市 林 瑞枝
黒石市 相馬 一花
和歌山市 牛尾 緑良
京都市 榎本 宏子
東大阪市 北村 賢子
寝屋川市 富山ルイ子

とか言うて満足そうな顔の色

満たされて何だかとてもつまらない

満足の尺度伸びたり縮んだり

胃袋を満足させるまで喋る

日溜りに黙って君と満ちている

満足がわたしの前を通り過ぎ

満足をしたらとたんに惚け始め

神さまがおまけをくれる尊厳死

満足の印にチューをしてくれた

お隣のゴミに満足したカラス

おいしいと言うから明日も頑張ろう

賽銭箱は満足をしていない

満足にお悔み言えぬまま帰る

満足をしたのか風船が割れた

満足を歩けるうちに恋もする

ひと色を加え満足そうな皿

ほどほどの満足でよいオムライス

切りますと言えば満足そうな医者

布団ふつくらしい案配の満足度

秀句

人間を満足させてばらが散る

我楽多をながめうつとりする時間

一と一足せば二になる満足感

軸吟

ステーキの厚さに申し分はない

雲南市

菅田かつ子

大山市

金子美千代

札幌市

三浦 強一

大阪市

伏見 雅明

羽曳野市

徳山みつこ

和歌山市

田中 すず

京都市

高島 啓子

弘前市

高瀬 霜石

出雲市

森 茂美

四條駿市

吉岡 修

和歌山市

柏原 夕胡

東大阪市

谷口 義

尼崎市

山田 耕治

藤井寺市

高田美代子

吹田市

大谷 篤子

長岡京市

山田 葉子

富田林市

中井 アキ

海南市

三宅 保州

米子市

政岡日枝子

西宮市

西口いわゑ

尼崎市

春城 年代

豊中市

神野宇乃子

満足な挨拶もせず飲んでいる

究極の満足ですかデスマスク

ケータイに乗って満足やつてくる

満足以新聞読んだことがない

十分にしたらったと掌を合わす

満足の程度が違ってお金持ち

満足へ等身大を生きている

おいしいと言うから明日も頑張ろう

布団ふつくらしい案配の満足度

満足と思えば雨も止んでくる

ふる里にみんなと眠る山がある

天寿全う真つ白い母の骨

満足が時どき胡坐かきたがる

満ち足りた日々へ時計もあくびする

愛燦燦満ち足りているサンルーム

満足と言えぬ暮らしが性に合い

イナバウアー成功でした満足度

満足はつらい昔があつたから

来期には君に銀河で抱かれてる

秀句

人間を満足させてばらが散る

満足がわたしの前を通り過ぎ

満足をしたのか風船が割れた

軸吟

満ち足りし花のにおい風の匂い

豊中市

安藤寿美子

和歌山市

古久保和子

大阪市

榎本 舞夢

和歌山市

福本 英子

島根県

伊藤 寿美

芦屋市

黒田 能子

香芝市

大内 朝子

和歌山市

柏原 夕胡

米子市

政岡日枝子

出雲市

小豆沢歌子

篠山市

遠山 可住

八王子市

播本 充子

出雲市

城 多喜

和歌山市

楠見 章子

砂川市

大橋 政良

大阪市

三浦千津子

伊丹市

山崎 君子

大阪市

小谷 集一

紀の川市

木村 徑子

西宮市

西口いわゑ

和歌山市

田中 すず

藤井寺市

高田美代子

駅 弁

相馬 一花選



駅弁の日本縦断成し遂げる
駅弁に会いたくなくて旅にでる
駅弁があるから空を陸にする
見て聞いて食べて駅弁試食会
駅弁はお国訛りの味がする
駅弁の香り目尻の皺が伸び
駅弁を何時でもまるく食べている
駅弁の津々浦々の見本市
駅弁に郷土の匂がてんこ盛り
駅弁の陶器大事に持ち帰り
動くまで駅弁じつと膝の上
頬落ちるほどの駅弁探す旅
駅弁売りの声なつかしむ鈍行車
駅弁に土地の自慢をぎゅっと詰め
駅弁が旅の楽しさ倍にする
駅弁の思い出ためる箸袋
ふる里を忍ぶ駅弁進む箸
駅弁の鮭がふるさと恋しがる
鱈寿しに呼ばれ飛び乗る湖西線
スーパーで駅弁を買う倦怠期
駅弁を分け合う旅の夫婦箸
駅弁が夫婦喧嘩をやわらげる

明子 ミツ子 淳司 柳弘 強一 伊津志 順風 愛情 慕也 藤朗 日の出 俣子 北朗 典子 日出子 銀波 活恵 英子 哲代 権悟 歳子

駅弁が好きでたまらぬ旅マニア
駅弁と熱いうどんの出前待つ
容器にも風格見えるますの寿司
駅弁を窓から買えぬもどかしさ
ふるさとを孕む駅弁包装紙
人情の香りただよ駅弁だ
デパ地下で駅弁行脚してきます
門限を破り駅弁手土産に
駅弁へ意地悪をする発車ベル
駅弁へ並んだ幹事乗り損ね
駅弁も大学もなく市になった
駅弁を買う三分の離れ業
乗ればすぐ駅弁開く女旅
駅弁の甘さに負けた皮下脂肪
イケメンの横で駅弁平らげる
佳
駅弁屋お召し列車に振り向かず
旅馴れてうまい駅弁見逃さず
まず駅弁それから風にまかす旅
駅弁の蓋から食べる戦中派
駅弁を横目に母のにぎりめし
人
駅弁で小さな義理をつなぎ止め
地
蟹寿司の駅弁提げて蝶になる
天
駅弁を選ぶ男の眼女の眼
軸
駅弁が顔をしかめる喫煙車

岳水 時雄 政勝 哲史 岳 ばっは 茶子 幸雀 准一 四郎 盛夫 欣子 輝夫 幹子 正剣 庸佑 弥生 霜石 哲男 一粋 雄々 播本充子

咲 く

小川てるみ選

野仏の視野で野菊が咲いている
福寿草咲かせて一つ歳をとり
咲くいのち散る日のいのち美しい
下積み耐えて花咲く春を待つ
地図にない道で綺麗な花が咲く
雪椿津軽で春を待っている
馬鈴薯の白い花咲く北の果て
待ち切れず春を咲かせる予定表
タンポポが微笑み返す道の端
嫁が来た我が家が花がパツと咲く
今宵咲く小さな花の息づかい
ひと息に咲いて名残は惜しまない
花火師の苦勞は見事空に咲く
永田町詭弁の花が咲くところ
ひっそりと咲けば美德を褒められる
ひっそりと咲く気の花を騒がれる
一つ散り一つ咲いてく冬薔薇
おそ咲きの姉に華燭の灯が点る
どんな花咲かすんだらう子の未来
親娘していつか咲く日を待っている
トレードにいまにひと花咲かす意地
さくらまで咲かせたタウンミーティング

俊子 泰生 志洋 (安) 悦子 (清) 銀波 倫子 早人 幹子 美義 昌碧 四郎 孝雄 可住 正剣 賢子 理恵 水笑 像山



咲けば散ることを知らない水中花
あの手術家が咲いた頃だった
わたくしだって咲いてますのよねこ柳

遅咲きの花です性根据えてる
株分けて従兄弟はこの花便り
妥協せぬ女であらう黒いバラ

ひと花を咲かすまで咲く生命
曼珠沙華咲く頃母の忌がめぐる
咲きなさいこの世に精のある限り

大好きなひとのおそばで華と咲く
あの方の胸に私を咲かせたい
どの花もみんなきれいと白い画布

淡々と咲いてポトンと落ち椿
トンネルを抜けて花咲く丘が見え
住

住

眠い目を月下美人に覗かれる
絵手紙の中で一輪咲かす花

夕張に咲いた新成人の意気
梅干しの誇り気高く咲いた過去
一粒の種にドラマの花が咲く

人

咲き誇る花も迷いの中にいる

咲き切つて花は明日を考える

地

さくら咲くとうとう一人きりになる

軸

こつこつと咲かせた花が逞しい

正雄
のり子
ばっは
茂代

(志) 善代
千信
ひかり

(備) 英子
隆盛
とし子

朝子
まみ子
充子

こずえ
螢

慕情
すず

(告) 幸子
哲男
章久

登美代

扶美代

高瀬霜石

年度末

水野 黒兎選



息抜きがしたい男の年度末
年度末診察券も草臥れる
血圧の薬はなせぬ年度末

領収書年度末にはかき集め
滞貨処理気ばかり焦る年度末
喫煙所洩れる人事の年度末

年度末社宅情報妻に聞く
悲喜こもも駅にドラマの年度末
甘い自己評価して待つ年度末

年度末春一番にとばされる
斑雪のこる津軽の年度末
年度末老いには老いの句読点

年度末日本に穴が開いている
年度末になれば地球を掘り返す
年度末道路工事は季語になり

住

年度末も命を守る救急車
ざりざりで帯が結べた年度末
決算が夫婦でちがう年度末

年度末またはぐるまが狂い出す
あちこちで継ぎ接ぎしてる年度末
計算合せて金が足りない年度末

人

計算合せて金が足りない年度末

年度末年度始めもない野良着

地

遠ざかりゆくものばかり年度末

軸

何もかもパッチワークの年度末

螢
活恵
かつ子
那珂子

一知
勇治

庸佑
蜂朗

慕情
たす子

柳歩
登美代
六助

泰女
善信

四郎
愛論
洋子

ミツ子

脇

夏目一粋

初歩教室

題一 渡る

三宅 保州

私の川柳観から(二)

☆趣味やたしなみとしての川柳は、苦しいばかりではつまらなく長続きしにくいもの。川柳を楽しむことを心掛けたいものです。

楽しみは頭ひねって五七五 保州

☆川柳は生き物である。なぜなら喜怒哀楽がある。音字という頭も手も足もある。個性と主張がある。何より人間そのものである。

☆人間の存在しない川柳は、役者の居ない舞台のようなものである。

☆作句における大切な技法の一つは「省略」である。上手な省略は佳句を産む条件の一つである。僅か十七音字の句は如何に省略するか佳句の鍵がある。説明を省略して訴えたことを広げられたら最高である。

川柳は十七音字の無限大 保州

【添削・批評句】

渡る世に鬼は何匹居るのやら 六助
いるいない渡る世間に鬼とかは 乃りこ

正しくは渡る世間に鬼はなし 柳歩
昔から渡る世間に鬼は居る 稔

故事の「渡る世間に鬼はなし」とかテレビ番組のタイトルの「渡る世間は鬼ばかり」を下敷きにしたいわゆる本歌取りの四句ですが、余程作者の存在感のある句にしないと本歌のイメージに負ける句になり勝ちです。

渡り鳥国境のない空を飛び 勝久

渡り鳥国境知らぬ自由さよ 淳

大空を自由に行ける渡り鳥 (河)洋子

この三句の発想は既に何句も詠まれている、余程工夫しないと新鮮味に欠けます。次の二句を参考にして下さい。

地球は一つ国境のない渡り鳥 凡柳

この国へ期待してくる渡り鳥 明

渡り鳥八の字連ねて北の空 美はる

夕闇へ黒点となる渡り鳥 のり子

一句とも俳句調です。作者の存在する川柳

を。例えば「渡り鳥に乗って行きたい遠い国」

原 渡り鳥忘れずに来たよくぞ来た 章司

添 渡り鳥よくぞ戻って来てくれた

原 二度三度石をたたいて渡る橋 那珂子

「石橋を叩く」だけでは諺の域を出ません。

原 年寄りと笑うな誰もが渡る橋 (燭)節子

格言、言い伝えの殆どそのまま過ぎます。

原 ウソつくな渡る世間は鬼だらけ クッパ

句品を損なう表現は避けたいものです。

添 暗いニュース渡る世間に鬼多し 光子

原 人当たりよくて世渡りうまい人 光

説明にすぎません。作者の思いを詠みたい。

添 ついて行けませぬ世渡りうまい人

原 世渡りが下手で家でも頑固者 孝子

悪いことはかりでなく良いことも詠みたい。

添 真面目すぎ世渡り下手なおとうさん

原 かづら橋渡る途中にある思案 (H)信子

思案するのは常識的なきらい

添 かずら橋思案をすると渡れない アヤ子

原 春風がもうすぐ渡る大和川

固有な自詞はその必然性がある場合のみに

添 春風は川を渡ってやってくる

原 渡る風何故か厳しい老いの坂 みさと

悲しい句になります。前回きに詠みました。

添 老いなりといえども渡る風に乗る 冷子

原 あぶない橋渡って元も子も無くし

添 危ない橋渡って元も子も無くし 雅代

原 吊橋を渡って決め付けた日々

添 吊橋を渡って決め付けた日 宇乃子

原 足腰を鍛えて渡る揺れる橋

ウイットと穿ちのある句に変えませんか

添 足腰を鍛えています歩道橋

原 風に揺れ悲鳴が上がる渡り橋 百合子

添 吊り橋の揺れるにつれて悲鳴あけ

原 かずら橋渡つてくらす人も居る 信雄
 添 かずら橋スイスイ渡る土地の人
 原 若い輪に上手に渡る楽天家 福世
 添 若い氣で上手に渡る楽天家
 原 丸裸渡る世間は甘くない (白) 信子
 添 欲出して渡る世間で丸裸
 原 仲良くね世渡りうまい友のそば 美紗子
 添 世渡りの上手な友についてゆく
 原 世渡りが下手のまんまで終りそう 映子
 添 世渡りが下手でも君と二人なら
 原 親ゆすり世渡り下手でお人好し 紀雄
 添 世渡りが下手納得の親譲り
 原 人生を渡る夫婦の友白髪 柁子
 添 共白髪までも渡ってきた安堵 真一
 原 荒波の渡る世間に神もいる
 添 誠実に渡ると神も居る世間
 原 世渡りが下手だが人情は厚い キヨミ
 添 世渡りがとつても下手なお人好し
 原 まだ黄た渡る氣押さえて待つ 孝明
 添 渡りたい氣持ち押さえる黄信号
 原 ボタン押し白杖渡るありがとう 弘泰
 添 白い杖渡りるまで見とどける
 原 ヴーメラン世間を渡り親の手に 俊子
 添 古里へウターンしたブルーメラン
 原 損な役ばかりで性格はめられる 尚
 添 損な役嫌がらないで褒められる

原 水溜りよいしょと渡るカラ元気 (高) 洋子
 添 水溜まりひよいと渡れるはずだった
 原 リホームでバリヤフリーにして渡る 貞月
 添 バリアフリーのリフォーム終えて渡り初め
 原 橋渡ししたが経過はメールだけ 麗
 添 橋渡ししたが音沙汰無い二人
 原 こっそりの娘の縁談知れ渡る 智加恵
 添 娘の縁談まとまるまでに知れ渡り
 【少し工夫すると佳くなる句】
 原 吊橋を一つになって動く影 (川) 洋子
 添 吊り橋で一つになっているふたり
 原 やがて来る彼岸へ渡る足鍛え 夢
 添 やがて往く彼岸へ渡る足鍛え
 原 渡りに船乗った途端に沈み出す はじむ
 添 渡りに舟と乗った途端に沈み出す
 原 海渡り日本がやっぱり好きでした 玲子
 添 海渡り日本がやはり好きになり
 原 渡るのは見たことがない歩道橋 武
 添 渡る人あまり見かけぬ歩道橋
 原 和食ブーム海を渡って日本の美 ヒロ
 添 和食ブーム海を渡って見直され
 原 パーテンにキイを渡してもう三杯 たん吉
 添 下へでリズム悪く三杯は動く。発想は抜群
 原 パーテンにキイを渡して飲み直す
 原 ほろほろと傘寿の橋を渡つて 勇治

【佳句】
 不渡りの苦しさバネに花開く
 路地裏を流し歌手へと渡り着く
 まだ余白あるから渡る丸木橋
 迷わずに一気に渡る虹の橋
 虹の橋渡りたかった幼い日
 虹の橋渡ってみたいランドセル
 嫁姑渡り廊下の鉢合わせ
 渡り物でもありがたいカニの足
 満中陰も極楽へ渡る頃
 内科外科渡り歩いて友あえる
 手みやげを渡しそびれてまた戻る
 信号を渡り景色を変えてみる
 赤信号渡る大人を見る子供
 【今月の推せん句】
 吊り橋で計算済みの手を握る 宇野幹子
 伝統的なかいぎやく性のある句です。
 渡り切るまでは見守る親心 吉村 幸
 道路等のみでなく人生全般を詠んでいます。
 綱渡りする子に投げる縄梯子 木村徑子
 親心を具象に表して成功しています。
 【私の句】
 渡り終える一歩手前にある油断
 今日という川を渡つてこそ明日
 (登録された方には役員が添削して返送します。)

秀句鑑賞

同人吟 西 口 いわゑ

— 2月号から

実を言うと白が一番頑固です

井 丸 昌 紀

阪神淡路大震災も今年1月17日をもってまる十二年、新聞とテレビで報じられています。改めてあの悲惨な情景がよみがえってきます。忘れたい、忘れたくない、忘れてはならない記憶です。

さて、皆様の喜怒哀楽のいっばいつまった句、この背景の状況などを想像しながら、じっくりと拝見させて頂きますと、その句が生き生きと私に迫ってきて、胸を熱くしております。特に怒りの句では、公職についている人の不正な行為、談合、天の声等々数句ありました。その怒りを川柳に詠み込む、川柳人を頼もしいと思います。

壁にぶつかりながら長年川柳をやっている私ですが、こうして丁寧によませて頂いたお蔭で、今更ながら川柳についていいな感慨を深くしております。そして自分が作句するときのことを考えますと、一句たりともおろそかにはできません。私からみますと、みんな秀句ですが数に限りがありますので、お許しを願いたいと思います。

白は何色にでも染まるという先入観があります。代表的なのが、花嫁は白無垢です。でもその花嫁が夫の思う色に染まるかどうかは疑問です。そして世の中には、白を主張して止まない頑固者もいます。作者のこの一句で考えさせられました。

恋の歌ひとりぼっちの時唄う

有 沢 せつ子

ひとりの昼下がり、青春時代に思いを馳せ、あの出会い、あの別れ、恋のタイムトンネルで感情が高まり、恋の歌を口ずさんでいる口マンチックな一時です。

そこまででなければ笑ってすむ話

海老池 洋

人間は興にのると、ついでが過ぎてしまうものようです。ましてやお酒が入っていたりすると、歯止めが効かなくなり、回りをうろたえさすような失言をしてしまい、本人も後で臍を噛む事態になつてしまいます。

泰然自若ほんとは腰が抜けていた

高 島 啓子

何か大きな出来事があった。皆が動揺している中で、泰然自若としている人物、頼もしいと憧れていたのに、後で聞けばあまりのことに腰が抜け、泰然としているより仕方なかったとか。ユーモラスな一句です。

ベットたち妻の命令しかかぬ

石 谷 美恵子

退職後の我が家、ちよつと悔しいが主権は妻に移ってしまったことを、賢いベットたちも察しているようです。

割り勘と聴いて勢いづくお酒

福 士 慕 情

思わず、くすつと笑ってしまいました。おごつて頂くとなると、少しは遠慮気味になり何となく相手を意識してしまいますが、割り勘となれば、もう此方のものとはかりに勢いづく、お酒の味も一入です。

大銀杏のまつ黄はあの世かも知れぬ

小 川 賀世子

橘高薫風先生の「銀杏散る風の祭を見る如し」という有名な句がありますが、誠に銀杏が黄色く染まり、はらはらと散る風景をみるが作者の想いのように、この世のことではないような不思議な気持ちにしてくれます。

新米のセールス若さ買ってあげ

吉田 幸子

余り上手とはいえない、若いセールスマンを前にして、母親のような情をかけつつ品物を買ってあげた。自分の息子を見るような気持ちになったのかも知れませんが、母とは、ある意味では弱いものでもあります。

買ってから魔法だったと気づく服

榎本 宏子

女は美しいものに憧れます。ましてや自分を美しく装ってくれるであろう洋服、マネキンを見つめているうちに、自信がわいてきた少々高価であつても悔いはありません。いそいそと持ち帰り、改めて鏡の前に立つて見て、ああ、あの雰囲気とマネキンの魔法にかかってしまった、と気づきます。

賽銭で決める神様頼れない

奥村 五月

人間は何か事が起きると、日ごろ無神論を称えつつも神に手をあわせませう。でも生きた神様は賽銭の高によって左右されるとか聞きます。やはり自分を頼るのが一番でしょうが。

芝居だとわかる娘の朗らかさ

加島 由一

あの朗らかさには空虚なものがある、親の手の届かないもどかしさを表わしています。

息吸うて吐いて悔しさ反古にする

石堂 潤子

落ち着け、おちつけと深呼吸してその場の空気を乱さないように努力する作者、その甲斐あつて一夜あけると、あれは何だったんだろう、なにも言わなくてよかった。自分を褒めてあげたい心境です。

四コマの漫画の中にある文化

大谷 篤子

新聞の四コマ漫画は時代の先端を走っていると思います。作者の審美眼に期待します。

二トでも気にはしている老いた親

瀧本 きよし

二トだからこそ親の心配はつきまません。折角、大学まで出したのにと、駄目な子ほど可愛いものです。でも本人も卒業当時は希望に燃えていたでしょうに、紆余曲折の果ての二トだと思ひます。親の心配が一日も早くとけますよう祈ります。

おおらかに生きるトンビが舞うように

大橋 鐘造

このころは、せかせかと生きているように思います。作者のように、皆がトンビが舞うように、ゆつたりと生きてゆけるようになれば総理の称えている、住みやすい、美しい国になると思います。

エステしてきれいになったらどうしよう

太田 とし子

エステして綺麗になる。女としてこんな嬉しいことはありません。堂々と胸をはって街を闊歩してください。読む人も浮きうきさせてくれる一句です。

文化勲章ちよつとレトロなアクセサリー

寺川 弘一

文化勲章を、レトロなアクセサリーと表現された作者さすがです。ユーモアを感じます。

夕焼けを見渡す好きな場所がある

田中 章子

落日のあの光景を見ると、誠に心が癒されます。作者は夕焼けを眺める、広々とした場所を見つけたのです。そこで一日の疲れを癒してもらっている。正に自分だけの黄金の場所です。

カーナビが欲しいこの世の迷い道

植田 一京

カーナビのように、人間もロボットにすべて、指示されて生きてゆくとしたら、つまらない人生だろうな、とは思いますが、迷路で何かに頼りたい、抜け出したいの心境を詠み込んだ重い句だと思います。

飯の世の約束ことに埋れてる

小林 妻子

—水煙抄

秀句鑑賞

—2月号から

小川 注 湖

ブルドーザーに踏まれ大根痛かろう

西村 益子

暖冬で野菜類が出来過ぎ各地で廃棄処分された。大根も痛かろうが、種蒔きから育てた野菜を踏みつぶす農家の心情も痛い。輸入冷凍野菜が多いのに消費者の気持も痛む。同感。物忘れもとの位置まで聞きにゆく

百田 幸

ふと何を探しに來たかなと思うことがある。もとの所に戻ると不思議に思い出す。仕事より物探しに時間を多くかけている。歳のせいだけではないと思う。私も経験者。

十二月八日も遙か遠くなり

近藤 秋 星

真珠湾奇襲に始まった太平洋戦争、日本も世界も苦しい悲しい惨禍を経験した。敗戦六十年戦争を語る者が少なくなり、パソコンで戦争を面白がる子が増えいいのでしょうか。

旅立つ子送る野良着の過疎の駅

乾 春雄

卒業？就職？都会へ、過疎地から人が減るのは淋しいが、子の将来を願う母は野良着のまま無人駅で手を振る。野良着に郷愁あり。二人から起承転結またふたり

原田 すみ子

新婚で第一膳、共働き、子育て、進学、就職。給料明細を気にした生活もあった。そして子供は独立結婚、マンションへ別居、また第一膳の生活。夫婦三十数年を振り返る。この歴史を起承転結とはうまいまとめ。

誰にでもすねに傷あり二つ三つ

峯村 勲弘

同感。われだけで隠したい思いはあるもの。人生長く重ねた証しかも知れない。しかし報道で見る大臣や国会議員の隠し持った傷が公になるのを見ると、自分に都合よい法律（事務所費等）が作ってあったのかとさえ思う。

ニュータウン今では長寿だけの街

岡本 勲

私の街と同じだ。約四十年前大型モデル住宅団地として造成され、三十歳半ばの世代が六五〇戸入居した。今そのままに七十歳代半ばの高齢者団地となり、自治会は少子高齢化の福祉対策に取り組む。よい知恵が欲しい。

あまるたびもつたいたいと腹の中

津田 シルク

今、飽食満腹が当たり前、テレビの大喰い日本一決定戦という無駄喰い競争の放映に怒りを覚える。戦中戦後を忘れてるのは淋しい。ディレクターの心情が分からない。

ふる里の歌が聞こえる由紀安田

西川 義明

人の心には童謡に描く故郷の風景はいつも美しい。安田由紀姉妹は故郷の大切さを歌ってくれた。文化庁が「親子で歌いつこう日本の歌百選」を発表した。これら童謡を胎教から愛すれば、いじめもなくなるのでは…。

ありがたい響きです耳の底

武島 ちよえ

ありがたいという言葉を忘れた人が多すぎる。人の文字は支え合って立っている。助け合うことには感謝の気持が必要だ。自然に出てくる「ありがたい」は美しい。

外遊の総理夫婦は手をつなぎ

助川 和美

欧米の首脳が夫婦で手を取ってタラップを降りる姿は見慣れているが、日本の戦後生まれ総理の開明思想だ。鹿鳴館外交のように外国の真似だけでは困る。だが新首相の二人三脚外交には頼もしい新しい日本の姿を見る。



沖浜 正宏さん(享年80歳)

を偲んで

小島 蘭 幸

暮れも押し迫った十二月三十日、正宏さんの親戚の方に呼び止められました。「小島さん正宏がお世話になりました。十二月十六日に亡くなりました。ご存知だと思いますが岡山、川崎、大分に献体をしましたので葬儀は遺骨が還る二年後になると思います」……。私は突然のことで「葬儀の日が決まりましたら是非ご連絡下さい」というのがやっとでした。正宏さんは昭和六十二年六十歳で竹原川柳会に入会されました。持ち前の明るさで大きな呼名で句会を盛り上げ、大会出席の音頭もいつも率先して下さいました。そんな正宏さんでしたから、会員の皆さんから「是非偲ぶ会を」の声も自然に出たのだと思います。

二月三日に開催した「沖浜正宏さんを偲ぶ会」で私はある川柳大会出席の途中、正宏さんと二人で見た大きな美しい虹の話をしました。少年のような瞳で「この虹を見ただけで大会へ出席して良かった」と言われた正宏さんを今でも、ハッキリと覚えています。

平成十年二月に古希の記念に句集「旅路」

を発刊、平成十三年四月には弓前の川柳公園に句碑を建立。句碑の除幕式が終わって「俺の分身が出来た」ととても嬉しそうに句碑をなでてもらった姿も忘れられません。

虹を抱く人のモラルは美しい 正宏
正宏さんは闘病生活の中で「人間万事塞翁が馬」と題して小文を書いておられます。

：今ここで逃げてはいけん、不幸だと思っていた下腹部の穴が幸せに転じたのだ。助かった命ならまだまだ努力して「あるがまま」に生きよう、その命燃やして燃やして生きてみようと思っている昨今である。

最後の最後まで明るく前向きだった正宏さん。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

正宏さんを偲ぶ作品

さわやかな笑顔すてきな人でした

勇士逝く雲の墓標に太い虹

寒の空確かに柳友の声届く

正宏と大きな呼名黄泉の国

ゆく雲にひねもす風は鳴くばかり

合掌

太虚

万年

笑子

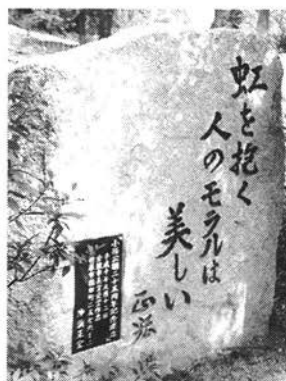
節夫

静風

お人柄しみじみ偲ぶモラルの碑
まなうらにとわに笑顔の正宏さん
逝きてなお献体愛の灯を消さず
正宏という詩人のありき虹の碑よ
大きな虹はあなたの笑顔だと思ふ

遣句抄

盆栽にこだわりの無我の境に入る
よくもまあ古希まで生きた志願兵
朝顔が二つ開いた朝の涼
オベの傷よりも心に深い傷
傷だらけの僕を見つめる旅もある
古い殻破る若さを買っている
人間味豊かな愛のボランテア
外食は渾近くと決めている
いいリダー僕を持ち味うまくだす
タクシーで通院できる幸もある
過疎の地に我が世の春を唄う草
精いっぱい生きて無名の僕だった



房淑子
不路子
蘭朽

本社二月句会

二月七日(水)午後一時
アウイーナ大 阪

春を目の当たりに感じる暖かい陽光に恵まれた二月句会は、百十五名の参加を得て定刻に開催された。

はじめに逝去された同人澤裕子さん、安本晃授氏、沖浜正宏氏、乾喜与志氏の冥福をお祈りして黙祷を捧げる。

今月のお話は和歌山の三宅保州理事。

十七年川柳塔祭りの(・・紀伊山地の霊場と参詣道)の続編、「紀州偉人伝」について。

弘法大師、真田幸村、徳川吉宗、紀伊国屋文左衛門、華岡青洲、濱口悟陵、南方熊楠、佐藤春夫、松下幸之助、有吉佐和子に、番外編の清姫までを取り上げ、その人物像と功績を分かりやすく楽しく紹介し、最後はご当地ソング、水森かおりの「熊野古道」で美声を披露、句会前の緊張をソフトにほぐした。

(富美子記)

月間賞は京都市の都倉求芽さんに輝く。

司会美籠・昭脇取り扶美代・(久)十代受

付(志)十代・(田)章子 清記(直樹)

席題「素直」

古川

奮水選

国なまり聞いて素直になる私
おかめでも素直でやさしウチの嫁
素直には医者注意がきけぬ酒
美しい国と素直に思えない
はめられた毬は素直に弾みだす
褒め言葉素直に聞いている佳き日
素直にはなれず意固地な冬のバラ
三歳を相手素直に馬の役
もう少し素直になれという大地
譲られた席へ妊婦のありがとう
大好きなひとのそばでは素直です
素直な子反抗しだす年になり
三回めふんふんふんと母の愚痴
飲み仲間なので素直に喋れます
どの鍋も合わせられます昆布だし
素直な子先を案ずる母の愛
嫌いに素直に託げる嘘ひとつ
雛いだと云うて別れたあかんたれ
四月馬鹿素直な人がすぐかかる
一言で素直になれる青リンゴ
大好きと言つて米寿の二人酒
素直には成りきれなくて酒たばこ
年令に素直でないぞ厚化粧
深呼吸したら素直になっていた
素直だけが取得笑顔が魅力的
素直さを褒めて引き出す子の長所
表情にすぐ出る人で嘘が無い

賢子 寿美 保州 恵子 啓子 朱夏 希久子 柳弘 朝子 美智子 たもつ 天笑 日出子 妙 一風 森子 千里 光久 森子 柳弘 尚士 義 みつ子 千津子 美代子

素直さが出世の邪魔をして困る
くれた娘が素直になれた嫁く朝
ネクタイも下着も妻の言いなりに
宇宙から見れば素直でない地球
幾久しくとも素直に角かくし

佳

手をつなぐ素直な妻は認知症
頼りないほど今日は素直な妻でんな
こわい顔してはりますが素直です
ロボットは素直に不平等なく動く
パソコンの素直な文字に顔がない

人

素直に吐いたら優しく聞いてくれ
空っぽになつて素直に嘘を聞く

天

素直に弾けば弦の音まで澄んでくる
ミスプリも素直にコピーされている

軸

兼題「きつかけ」

徳山 みつこ選

葬式の帰りに血圧計を買う
きつかけを探すと愛につき当たる
謝る気あるがきつかけ掴めない
仲なおり朝の光をきつかけに
ええがなと言われて買った派手な服
きつかけを探しあぐねる魚心
きつかけは手作りチョコで描く絵文字
恋人のひと言タバコやめさせる

東吉 則彦 保州 ばつは 章久 太郎 月子 萬的 天笑 篤子 比ろ志 哲男 アキ 庸佑 耕治 尚士 直樹 時雄

きつかけは筋が良いとの師の言葉
 きつかけはダイヤで戻る夫婦仲
 春の訪れ無菌室から出た赤ちゃん
 骨折がきつかけいい嫁きたもんだ
 鈍くさい人だきつかけあげたのに
 きつかけを実は探しているニート
 地獄絵のヒロシマを見たあの日から
 きつかけは薔薇が苔であつたころ
 黒百合のハガキにピツと通じ合い
 一枚の絵がきつかけの旅仕度
 更生のきつかけかあさんの涙
 母の死がきつかけごんた立ち直る
 名人の失敗談で立ち直る
 きつかけがないまま恋は通り過ぎ
 じれったい人だきつかけあげたのに
 禁煙のきつかけ良性のポリプ
 厳格な父へはずれていくレール
 好きな先生100点がとれました
 きつかけは先生くれた五重丸
 猫飼うて別れ話はうやむやに
 堰を切るきつかけでした通り雨
 いきつかけつまんでみたピンセット
 きつかけさえあればと無念がる男
 社長の椅子内部告発して奪う

玄也 章久 シマ子 ばっは 好 郁夫 ダン吉 森子 なたよし 恵子 賢子 正雄 時雄 尚士 たもつ 扶美代 啓子 美代子 明子 千代 理恵 洋 富子 房子 理恵 朝子 修

立ち直りのきつかけコラムから拾う
 人 こうなつたきつかけウッフ内緒です (久) 千代
 地 春色を纏うと蝶になつたがる 美代子
 天 神様がきつかけくれた人と添い 天笑
 軸 きつかけは無限量きよろししています
 兼題「礼」 出口 セツ子選
 頂いた命お礼に献血車
 まだ動く自分の体に先ずは礼
 深々と夕日におじぎして帰る
 ありがとう妻に催促された礼
 礼服を忍ばせて行く夜行バス
 裸木から芽を吹く千の風は礼
 目礼はした名前が出てこない
 礼状の手書きの文字が跳ねている
 先に礼言われご馳走する羽目に
 団塊の夫に礼言う定退日
 礼状へ無心ちやつかり添えられる
 また陳謝最敬礼をするトップ
 失礼で済まぬと審議拒否される
 繊細なお方のマナー疲れちゃう
 失礼な言葉平気で吐いてはる
 孫誕生中山さんへ岩田帯
 ジーパンの穴から抜けていく礼儀
 ジーンズの穴から洩れている礼儀

富子 千代 美代子 天笑 哲男 日の出 いわゑ 一歩 美籠 美代子 房子 美花 玄也 欣子 准一 洋 准一 太一郎 淳司 富子 朱夏

衣食住足りて礼儀も軽くなり
 礼儀の二字貼つてやりたいコンパクト
 抜ける空ついで敬礼をしたくなる
 一身上詮索しないのがマナー
 晴ればれとお礼の出来る内祝
 産んでくれてありがとうなど言われても
 ノーサイド礼を交わした手が熱い
 参観日親に礼儀を教えたい
 厳しかった姑が介護に手を合わす
 寝る前にご先祖様に礼を言う
 礼状に一句添えたい春の風
 盲導犬礼儀はちゃんと知っている
 義理チョコにお礼の方が高きつき
 亡き人へ伝えたかった有り難う

千枝子 たもつ 千恵子 (矢) 五月 朝子 理恵 郁夫 集一 潤子 富美 富美 朋月 月子 明子 賢子 日の出 洋 潤子 森子 希久子 正雄 ダン吉

兼題「響く」

河内 月子選

来い来いとお寺の鐘が鳴り響く
シンバルが招待券を眠らせぬ
水仙を束ねてごらん響くから
夫唱婦随打てば響いて五十年
和太鼓の響きところが脈を打つ
よい話すぐ涙出て困ります
脳幹にぎりり虫歯を削る音
柏手を響かせ邪心遠ざける
恋をするハートが響く手話の指
二日酔い妻のソプラノよう響く
雷鳴が響いてケンカ小休止
カラオケの続き風呂場で響かせる
ご近所に鳴り響いてるうちのけち
反響の深さよ海が荒れてくる
バリトンが響く二月の風の中
足音の響きにだつてある個性
失言が響き国会揺れている
よく響く声を買われてサクラ役
地響きが悲鳴に替わる競馬場
家計簿に響かぬように跳ねている
女房がテレビ体操始めたぞ
響き合う話題は金の要るはなし
響き合うことが減つたねおとうさん
美しい富士の裾野に射撃音
白寿だが達者に響く心電図
男にも響きの悪い産む機械
ツーと言いいカーと響いていた昔

螢 哲男 瑠美子 いさお 千恵子 耕治 直樹 好 朝子 淳司 いさお 蕉子 森子 美代子 三喜夫 遠野 和夫 淳司 さくら 時雄 森子 理恵 たかし 奮水 則彦 准一

響かなくなつた枕がふたつある
遠い日が響いてきそうしやばん玉
響き合う夫婦でいようなんて嘘
守るより攻めよと滝の音響く
天の声地の声響く温暖化
佳
母ちゃんに背くと小遣いに響く
オカリナを響かせ森を出る詩人
響かなくなつて年金半分こ
活断層生きてるぞと地鳴りする
チェンソーが響いて森が泣いている
人
ハイトーン電話の母はまだ元氣
地
追伸の一行クサリ響くなり
天
笑い声響き貪り神逃げた
軸
よく響くふたりに入るすぎがない

兼題「ユニーク」

村上 玄也選

ユニークな主張さわめく会議室
ネズミ取るユニークな猫飼うている
ユニークな男の背にある孤独
ユニークな旦那の世話にかかる手間
友達に宇宙話す奴がいる
宇宙人みたいな娘ふたり居る
ユニークな話の好きな帽子掛
ユニークとやんわり偏固いなされる
朱夏 篤子 千代 啓子 比ろ志 玄也 朱夏 幸雀 公誠 俣子 みつこ 義子 希久子 庸佑 哲男 千里 公誠 楓楽 扶美代 岳人 セツ子

ユニークな憲法なのに変えたがる
怒鳴り合うユニーク夫婦仲が良い
ユニークな替え歌が座を盛り立てる
ユニークと特価の服をはめられる
ユニークな舌を三枚持つっている
ユニークな人ねと言われあきらめる
私が描くとライオン猫になり
ユニークな口調で痛いところを突く
青い目の女が迎える古都の宿
坊さんがバイトで歌うジャズ喫茶
不便さが体力維持という間取り
ユニークな言葉が増える日本語
ユニークな意見も入れて輪ができる
寡黙だがあいつがいれば座が温い
ユニークな祝辞嬉しいブライダル
ユニークな兄ちゃんがいれば恥かしい
ユニークな水着裸と変わらない
ユニークな意見でいつも少数派
ユニークな意見は横に置いとかれ
ユニークなお子さんといい角立たず
ユニークな変換ミスのメール来る
女体のかたちして大根が育ち
ユニークな社長にちゃんとした専務
住
清貧をユニークだと時代言う
大阪のおばちゃんが出るコマーシャル
ユニークな意見と褒めてはつとかれ
それぞれの連ユニークな阿波踊り
尚士 篤子 千津子 五月 朱夏 修 好 寿子 セツ子 直樹 千津子 朋月 いわゑ 丹吉 鍾造 時雄 正雄 郁夫 みつこ 明子 麗 森子 則彦 明子 公誠 見清 章久

ユニークな名前前で覚えられている 月 子

人 竹トンボに自動装置が付いている

太 郎

地

朱書通り書けぬ個性をはめられる

好

天

生きている道がばいばあちゃんから学ぶ 賢 子

軸

ユニークと言つて貶さず褒めもせず

兼題「覚悟」

河内 天笑選

死ぬ覚悟してもお呼びでないらしい 螢

イラストと内視鏡とが覚悟さす 哲 男

不意打ちの言葉に覚悟ためされる 美 義

芸捨てる覚悟を決めた知事の顔 倫 子

色褪せた覚悟禁煙まだ出来ぬ 千津子

肺癌を覚悟の煙草吸っている 朋 月

たばこ断つもう後戻りなどしない 寿 子

美味珍味肥満覚悟で食べている 千枝子

誕生日ケーキを食べるのも覚悟 セツ子

覚悟して来たのに酒と寿司が出る 正 雄

腹決めて話す覚悟の深呼吸 好

ご家族にお話がある内視鏡 シングルマザー立派の子供育てます

覚悟などせずとも迎えきてくれる 賢 子

腹据えてかかれは開けゆくあかり たもつ

介護する覚悟うながす遺産額 萬 的

子と同居口のチャックを閉め直す 尚 士

苦勞する覚悟文学こころざす 朱 夏

泥かぶる覚悟で受けるまとめ役 鐘 造

積まれたら覚悟も骨も溶けてゆく 修

おめでと〜三つ見ちゃんだ〜覚悟して (五)

会者定離いずれ覚悟の時がくる 理 恵

熟年離婚ボクに覚悟ができてない 五月

いざという時はやつぱり一人だな シマ子

貧乏を覚悟家業を継ぐことに みつこ

生涯を過疎に捧げる医者夫婦 律 子

ゼロになる覚悟もなくて欲をかく 俣 子

藤川が打たれりや負けを覚悟する 千恵子

まだ着れる捨てる覚悟がまた逃げた いさお

浪人の覚悟に親は首を振り 潤 子

どやされる覚悟すんなり嫁にくれ さくら

覚悟した年金離婚ないらしい 朝 子

魂は売らぬと決めて生きてゆく 一 歩

諦めた姿で泳ぐ槽のサメ セツ子

私より貴男の覚悟待つてます 洋

棺桶に覚悟してない顔がある 妙

職を引く覚悟ないのに辞めさされ 時 雄

暗転の地球に覚悟する蜚 義 子

階段の昇り降りにもいる覚悟 さくら

のびのびにしているその時の覚悟 富美子

本人は呆けてまわりが覚悟する 啓 子

遅かれ早かれ神にお返しする命 求 芽

創立50周年記念 第18回時の川柳交換川柳大会

日時 5月12日(土)

10時30分開場 開会12時20分

会場 兵庫県民会館9階ホール

会費 2000円(記念品・発表誌呈)

昼食は各自お済ませ下さい(地下に食堂)

講演「情念から大衆へ」私の川柳の歩いた道 斎藤大雄氏(札幌川柳社主幹)

兼題 各題2句

「明るい」 京都 坂根 寛哉 選

「守る」 高槻 久保田半蔵門選

「弓」 岡山 濱野 奇童 選

「塔」 堺 河内 天笑 選

「傘」 大阪 田中 新一 選

「城」 神戸 赤井 花城 選

「雑詠」 神戸 平山 繁夫 選

特別課題 1句

「晴れる」神戸 卜部 晴美 選

特別課題の入選句には景品を進呈します。

席題なし 欠席投句拝辞 各題締切12時

賞 知事賞 市長賞ほか多数(合点式)

懇親宴 5000円 同館10階 当日受付

当日、平成18年度時の川柳作家賞並びに

第27回ときせん賞入賞者の表彰を行います

主催 時の川柳社

後援 兵庫県・神戸市・神戸市教育委員会

兵庫県文化芸術協会・朝日新聞社他

おどろおどろ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

三幸川柳教室

喜田 准一報

一喝を浴びて画像が停止する
 割り切りが上手でまうい絵が画ける
 砂に画く夢を小波に掬われる
 孫が来て余生の下絵画さかえる
 画き慣れた筆が謀反を起こして
 裸婦像を画くとあなたが覚えてくる
 裂けた実へ墨で味出す石榴の絵
 初恋のときめき戻るラムネ瓶
 こつそりと覗いた母の小抽出
 とときめいて倍の疲れがどっと来る
 シャッターが見てた昭和のときめきを
 初任給貰うときめき忘れない
 とときめいて明日の奇跡を呼び寄せる
 とときめいてまた人間の生乾き
 コンビニでギヤルの間を歩いてる
 夕方になればコンビニ二値下げする
 コンビニに負けるはずないおでん煮る
 コンビニで雨宿りしてトイレ借り

八重子 智三 幹子 純子 当代 美枝子 宏夫 和子 登美代 起世子 孝義 碧 保州 次根 一步 信子 かずみ 義雄

コンビニと寝袋だけのよい暮らし
 コンビニを味方につける農繁期
 コンビニにかじられました顎の張り
 コンビニの灯火へ寄って来る迷子
 大学を出てコンビニでフリーター
 コンビニで一月一日おでん買う
 逃げ腰でセールスマンは犬を撫で
 優しくさこつこ猫で声も今のうち
 撫でるように母は丸めたよき餅
 過去は過去今日のドラマを撫でる風
 黒髪を撫でて女が揺れている
 川柳塔おっぱい吟社 木村あきら報
 見え透いた嘘にもすがる欲の皮
 言葉では足りず真心添えておく
 輪の中に入れてあげましょウツの友
 老犬の頼りにされる夫も古い
 じつくりと煮つめています今日の幸
 ライバルに疲れた顔は見せられぬ
 集金にヘソクリが減るお留守番
 温もりを少し残して年を越す
 自家製の梅酒で二人のクリスマス
 要らぬ物再利用され生き返る
 衣食住片目つむって生きてます
 川柳塔みぞくち 小西 雄々報

昇 幸 子 公 子 桂 香 朱 夏 徑 子 町 子 伊 子 准 一 賢 八重子 貞月 かり あり 美枝子 宏夫 和子 登美代 起世子 孝義 碧 保州 次根 一步 信子 かずみ 義雄

アデランス付けて女神に会いに行く
 白髪染め笑う鴉が二羽三羽
 漆黒の髪を誇った亡妻偲ぶ
 八十路坂引いて引かれて共白髪
 思い切り茶髪にかえて若づくり
 髪形を変えて和服で初詣で
 お下げ髪なびかせ少女風にのる
 髪の毛と談合したい無精髭
 高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報
 度忘れしアノソノナニと出てこない
 留守電にまかせて炬燵から出ない
 留守電の声ききながら仕事する
 良き時代友は居留守をしなかつた
 インターホン鳴つてもすぐに立てないの
 居留守には出来ぬサンタがやってくる
 葬儀屋が暇な友引かもしれぬ
 好き同士迷信なんか怖くない
 迷信も古い坂越える友にする
 迷信と言いつつ避ける北枕
 神風が吹くと信じていた戦
 迷信がいっぱい詰る村祭り
 妻と来ておもしろいはずがない穴場
 おもしろい隣ばかりに来る歳暮
 何かおへんかおもしろいことほろいこと
 おもしろいと言われ仮面が外せない
 おもしろい男の舌を抜いてやる
 呟いてひとり飲んでる縄のれん
 ぶつとつと呟くことが癖になり

智恵子 鈴枝 信雄 豊枝 和代 静江 正光 雄々 祐作 泰雄 昭子 公子 郁郎 宏章 美義 美弘 尚士 郁夫 重人 昭二 宵草 美籠 惠美子 庸佑 治三郎

鬼の留守壁に呟くひとり言

面影に呟く今日もひとり酒

物語聞いているように見る画帖

お大事に金では買えぬ命です

ナツメロを唄いあの日父と居る

トラブルを鎮めるように除夜の鐘

身の程に合った歩幅で行く八十路

台本のとおりピエロを演じよう

団塊の世代根性抱いたまま

夕焼けて口笛までが赤く鳴り

ふれあひの風に揺れてる縄のれん

川柳ふうもん吟社

夏目

一粒報

病名の癌は天罰かも知れぬ

丸く洗っている心差し上げる

善人の出口に待っている浄土

あこがれたマドンナ今は山の神

線香の灰になるまでおんな彩

居酒屋の椅子に今夜もどっこいしょ

六十億人類載せた星の鬱

わたくしにできるギリギリ寄付をする

天罰を受けぬひと日へ掌を合わす

百人が鯛百匹を食う宴

マドンナはほんととはいつも寂しがり

洞窟に住んだ頃は良かったな

葬儀費も無いしうかうか死ぬません

どっこいしょ今が華だと生きている

万物の霊長という素寒貧

天罰に恥じぬ真心もっている

活恵 幸雀 稲子 武史 乃りこ 典子 義一 葉一 孝一 比呂志 洋々 みち子 欣之 節子 森子 完司 よしえ 富子 日の出 忠良 邦子 金祥 鬼桜 幸子 無限

出口などいらぬあなたと歩く道

線香とモグサにあった母の愛

切れたあと余韻が匂う良い電話

生き甲斐のところでどこに瘤がある

マドンナに家出誘っているところ

天罰も恐れ逃げた怖い女

天罰は覚悟大根踏みつぶす

隠坊さん線香臭い妻逃げる

どっこいしょでかいお腹と春を待つ

人類の敵はやっばり人類だ

どうしても欲しギリギリまで値切る

うぬぼれた猿天罰か樹から落ち

家族の和欠けて木枯らし吹いてくる

ギリギリに耐えて怒声をかみ砕く

線香が消えてあなたはもう居ない

ほたる川柳同好会

水野

黒兎報

カルチャーを始めて上司追い越した

しつかりと結びすぎたか赤い糸

爺ちゃん十八番始まり和む会

一年の暮らしは花を友として

表向きは夫唱婦隨の夫婦です

しつかりとチラシを読んだら忙しい

新手法だまされぬようオレオレに

しつかりと見る今日の月明日は老け

裏表無いよう子等に名前付け

しつかりとせんからあんな放つとけん

プランターのネギをつまんでみそ汁に

ほどほどにまた夢もあるわが暮し

あらた 一瑠 孝男 帆雀 公弘 茂登子 善夫 益子 三津子 美雪 圭一郎 毅 一京 春名 一粹 見清 宇乃子 雪子 桂子 昭子 春代 肋骨 契子 信男 幹治 勇治 正三郎

佳句地十選 (2月号から)

野下之男

手の内を見せて仲間にしてもらう

人の字を支える棒が老化する

百万ドルの夜景に雪が降っている

本能が性善説を曲けている

ガン告知ビュッとまわる風車

古傷を歌の文句が無でいていく

満月が宇宙の話してくれて

ふところの深さに負けた初対面

冬眠をする気たためる皮下脂肪

ペランダの竿へ夫を干したまま

しつかりと生きてゆこうとスクワット

失敗も猪突猛進年男

子沢山その日暮らしの宝もの

しつかりと旅のカバンに夢を詰め

この年で習い始めたハングル字

しつかりと百円握り孫寝込み

程程のしつかり女房腹で寝ぬ

うぶみ川柳会

小谷美ツ千報

明日まで夢を残しているうぶふ

性懲りもなく風船を膨らます

萎れても散らないバラの自尊心

ばうばうたる大地旅路に足止まる

一〇〇号の画布大山を支えている

残り火がばうばう燃える巡り合い

くにお 黙光

いゝゝ 好文 蘭子 節彦 嘉彦 正躬 蘭 六もつ 一箇

洪味まで画布からにじむ柿一つ
秋の色心に画布に残していく
河川敷広々画布を染める秋

美知江
京子

君が代の一番は歌ったことがない
お見舞が玉子で良かった日もあった

輝夫
高明

赤い靴はくとダンスも炎えてくる
天国の夫に見せるフラダンス
あの甘いラストダンスでこうなった
お別れはスローな曲にしてほしい
震度七の日から余白になる日記
手の震え誇りを捨てたコップ酒
長いながい道のりだった母の紋
追憶に男のロマン炎え残る
風化した追憶つぎはぎして辿る
夜なべの母ふと思ひ出すばたん雪
泥道を這い出た人のものわかり
もう一度お手をどうぞと言われても
ありがとうラストダンスはやはり妻
八十路坂もう道草もしておれず
わたくしを私に戻す風の道
ラストダンス妻に予約を入れられる
スロースローいつかは華になるダンス
激震の悼みを抱いたルミナリエ
蒔いた種刈る日がつづく風の道
追憶の彼方によいとまけの唄

一風
真理子
修

高見盛負けると萎む癖がある
戦争に懲りたと言っばらしい旗
海ほうほうサンダル残し拉致される
蹟いて萎えた自分に腹が立つ
貴女なら萎縮するより豪快に
萎えかけた花も水切りして咲かす
下手でよい画布一杯に描く勇氣
波がしらほうほう冬の日本海
苦も欲も捨ててほうほう生きてる
二十四時間続く点滴懲り懲りだ
イケメンの髪ほうほうは許される
ホームラン画布一面を飛び出した
萎まぬように日だまりに母を置く
少しずつ萎んで軽くなりました
残された時間に春があるように
千枚田千のキャンパス千の月
残り滓同士で踊るおてもやん

龍枝
かつみ

夢に出る亡夫の頑固は変らない
許し合い支えにもなり五十年
いよいよの八十路ゆっくり坂がかり
ゆっくりと話してツボは押えてる
この線まで妥協きめてる腹の内
八十路坂許してもらう事ばかり
ゆるす気で窓一ぱいに陽を入れる
許された一時帰宅が元気づけれ
試験すみゲーム遊びを許される
ゆっくりと熟成味噌の家の味
許された女心があさまし
許さぬが勝手にしろと言うておく
来年へ夢を繰越す除夜の鐘

精一
純子
美緒子
二英
美紗子
靖子
多美子
開子
照代
かほる
つや子
哲男
可住

六助
良一
孝子
洋子
隆盛
春雄
富子
和夫
理恵
朝子
笛生
柳弘
のりこ
秋雄
道子
弥生
美千子

貴女なら萎縮するより豪快に
萎えかけた花も水切りして咲かす
下手でよい画布一杯に描く勇氣
波がしらほうほう冬の日本海
苦も欲も捨ててほうほう生きてる
二十四時間続く点滴懲り懲りだ
イケメンの髪ほうほうは許される
ホームラン画布一面を飛び出した
萎まぬように日だまりに母を置く
少しずつ萎んで軽くなりました
残された時間に春があるように
千枚田千のキャンパス千の月
残り滓同士で踊るおてもやん

幸枝
芳江
あづま
照彦
玲子
和枝
節子
重忠
芳光

柳柳茶はしら

文男
幸子
盛夫
かつ子
美千代
百合
秀水

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

陸子
よしえ

仁部 四郎報

仁部 四郎報

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

水笑

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

保育園時代がパパとママの恋
ひい孫にもう脛かじる歯が見える
事運ぶ手はずがくるう落し穴
早乙女の手甲を消したコンパイン
チャンネルを回せばどこもバカ騒ぎ
初詣で巫女の袴に若返る
方便のはずの嘘から振り返り討ち

宣子

柳柳茶はしら

柳柳茶はしら

雪不足その後大雪なんてまあ

京都塔の会

都倉 求芽報

まみ子

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

相棒のとても素敵なおエピソード
針の穴抜けた噂が棒になる

南花

まだまだと余力充電して八十路
旅先で拾った恋をどうしよう

聖子

子には子の親には親の旅日記
酔うほどに芝居心が目をさます

恵美子

いろいろなドラマもあつて旅の空
地図広げ夫婦異なる旅プラン

はるみ

堀炬燵やっぱいいとはめる客
飛行雲今日ではどこまで旅に出る

好栄

長旅へ真直ぐゆけと道祖神

かつ子

棒に振る娘の縁談をきいている
棒きれを集めたき火へ寄る噂

ちよえ

相棒が消えてばかり穴があく
北風に向く添え棒の無い不安

伸子

明日へのノルマをつなぐ棒グラフ
折角のチャンス見のがし棒にふる

清利

孫に振るタクト当てにはしつくれぬ
一本の棒が凶器になる世代

玉恵報

いざと言う突つて私が甘くなる
口車にのつて一日棒に振る

あやこ

甘言の裏で光っているナイフ
ピカドンへ棒立ちの過去まなうらに

文代

甘い言葉についついのつていた不覚
杖になる努力している細い棒

とめの

棒に振る娘の縁談をきいている
棒きれを集めたき火へ寄る噂

真

明日へのノルマをつなぐ棒グラフ
折角のチャンス見のがし棒にふる

あすなろ

孫に振るタクト当てにはしつくれぬ
一本の棒が凶器になる世代

絹子

いざと言う突つて私が甘くなる
口車にのつて一日棒に振る

静子

甘言の裏で光っているナイフ
ピカドンへ棒立ちの過去まなうらに

たづ子

甘い言葉についついのつていた不覚
杖になる努力している細い棒

みさえ

棒に振る娘の縁談をきいている
棒きれを集めたき火へ寄る噂

美佐子

明日へのノルマをつなぐ棒グラフ
折角のチャンス見のがし棒にふる

巴子

孫に振るタクト当てにはしつくれぬ
一本の棒が凶器になる世代

悦子

いざと言う突つて私が甘くなる
口車にのつて一日棒に振る

喜美子

はじ芽

エミ子

敏夫

みつえ

さちこ

玉恵

熊子報

たづ子

房子

蓄水

江美

宏一

哲子

忠

五月

直

孝一

晴美

わこ

いたる

折杭

美代子

順子

相棒のとても素敵なおエピソード
針の穴抜けた噂が棒になる

甘すぎた話の裏が読めなんだ
後棒の内助で今日のおれがある

甘いとは知りつつ口も手も出ない
反論へ辛抱をしたこの拳

代読に棒読みされた日の祝辞

西宮北口川柳会

黒田

一日を大事に生きる朝の水
生きているあかしお腹がすいてくる

平成に生きて昭和は夢の跡
早や米寿自由奔放に生きている

生きているこの実感がすばらしい
ちちははへ返す恩です強く生き

日本で生きて二ホンをばかにする
夫から初めて聞いた有難う

このままで生きて行きますこのママで
初の子をみな当て嵌めるお正月

初めてのむず痒くなるアデランス
初孫の笑みお月さまより輝いて

初めてと論うてるまわりに長けている
満員車の輪につかまっているピエロ

年輪の節目に隠れているドラマ
箱根駅伝アンカー迎え歓喜の輪

輪が出来ると人間模様美しい
車座になると話がよく弾む

狙うのは二番手でよい冬の月
老いてなお頑固な余生恥とせず

春蘭

義子

能子

順子

美代子

折杭

美子

ふさぎ込んだときに吉祥天の笑み
寒風の青テントにも朝がくる
一葉と英世が飛んだお年主
セーターも神戸で買えば都会的
友元氣ますます凝った賀状くる
指折って数えて偲ぶ父母の恩
迷信は信じてないが逆らわず
遺伝子はちよぼちよぼなのに子に期待
足るを知るなどと氣取らぬいい笑顔

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

人の輪が増えてしんどいこともある
マンションも子供が増えるベビーカー
福の神と役人大きい方へ向く
仲間といふこの半日が福タイム
福娘ちよっぱり鼻が高すぎる
強引に我が家へ誘う福の神
童心へ戻るひととき福は内
新年は福をつけるとみなめでた
七福神も一人乗ると沈む舟
幸福を感じた頃はどのあたり

岸和田川柳会

原 さよ子報

腕力が自慢の兄は遠い人
いじめっ子腕力よりも意地悪さ
ロボットの腕力かきる近未来
腕力で弾圧的に黙らせる
腕力と知力備えた方望む
娘が親に離婚したらに父慌て

光 久
富喜子
閑 子
歳 子
松 煙
曙 蝶
二 英
新太郎

浅 子
寿 海
香 代
珠 子
弘 子
ふみよ

慌てるといつい本音飛び出ます
戒めの第九条が揺れてる
戒めを正座で聞いた健気な子
戒めを肩に受けて座禪堂
三猿の戒め大事に守ってやる
苛めっ子強く抱きしめ言うてやる
ことしの字命と書いて戒める
上役になって頭の下げどうし
上役の居ないお酒の旨いこと
部下一人今夜もくぐる赤のれん
上役と鉢合わせする特価市
社で威張り家でごみ出しする上司
割勘と言えず上役腹を切る
双子ちゃん四つ子の靴がランラン
同い年共に介護がいる夫婦
同い年新生児室ごんな夢
同い年妻に君付けされている
慌てると言う先生が慌ててる

長 柳 会

村上 直樹報

残り福徳利の底に二三滴
若がりお洒落な小句を捻る
まだ伸びる新芽摘まずに育てたい
福福し顔はしていて火の車
ポンペイの貴重な遺物日の目みる
湯煙にとっふり沈む至福とき
福娘なつたとたんに玉の輿
内緒です株価ぐんぐん上昇中
家族の和大切に今日を生きて

淳 風
幸 子
守 子
野 添
ダン吉
蛙 城
植 代
俊 昭
泰 弘
笑 司
和 美
仁 緑
岩 夫
房 枝
ゆ い
清 吉

直 樹
ヒ 口
明 子
武 男
輝 子
靖 博
も こ
マ サ
靖 子

福袋女のすごさ争奪戦
好きな児に摘んだれんげをあげた恋
歳末の一掃セール待つコート
大切に芽はれ自由の無いペット
ガンの飼は早目に摘めというタバコ
これ以上乱れないよう花を摘む
新年の夢を包んだ福袋
ほどほどの欲大切に生きている
大切なものは聞かれ先ず命
三代代そろって楽し福笑い
アスファルト野辺の花摘む道はない
今日もまた脳細胞がこぼれ散る
摘み取った夢の供養か虹の橋
抽出しの奥にしまったままの恋
摘み忘れた蕾立派な花をつけ
クローバー摘んで幸せ保存する
大切な家族の絆夕の膳
亡母さんの糠床今も生きている
百福さん栄誉賞ですカップ麺
福を呼ぶ丈夫の窓を開け放つ
金婚や丈夫な妻の大切さ

川柳塔のぞみ

播 本

良心に時々他所見して貰い
にくらしいあなたをくくる鉤括弧
改札機診察券で閉じられる
良心をゴミの中にも入れている
分厚い本から良心を掴み出す
目を閉じていれば心が澄んでくる

英 美
敬 二
登 美子
和 一
正 一
よしお
正 子
芳 野
たけし
けい子
不二雄
和 子
一 慧
正 博
正 美
三 和子
美 代子
淳 司
史 幸
富美子
幸 雄

つよし
ますみ
哲 男
那珂子
きよし
勝

恋一途良心さえも眠らせる
良心を削りながらも生きている
ラッキーは働きの門に立つ
ボツクリを念じはつくり逝つた母
欲しかった服が今日から値下げされ
山小屋を閉めるおでんが音をたて
良心と組んずはくつして暮らす
不摂生したが血圧知らぬ顔
バラ銭を必ず入る募金箱
良心の双葉に水をやりつつけ
ラッキーセアソフは向いた神に会う
下手だけどいつもブービー賞を取る
メモリーの入場券が手の中に
同居でも良いと元氣な嫁が来る
神様がときどき味方してくれる
餅つきの初体験をする祭り
ラッキーでしたこの夫との五十年
ラッキーな顔看板にして生きる
良心の尺度怪しい年の暮れ
もう心離れましたとドア閉める
ラッキーゾーン分相応の風が吹く
お餅でも焼きましようかと雨止まず

川柳塔わかやま吟社 牛尾 録良報

賀世子 由一 慕情 方子 リッ 尚士 哲代 権悟 光久 奮水 桃葉 千里 宣子 シマ子 朝子 あやめ 康子 保子 充子 夕胡 保州 裕美 大輪 朱夏

虫干しも兼ねて晴れ着を歩かせる
平常心を装うている火吹き竹
平静を装いマグマ抱いている
固い絆で二人を結ぶ貸衣装
気持まで装うことはないんだよ
流行らない店新装を繰り返す
正月の装い母の割烹着
笑い飛ばす打たれ強さを装って
装えば三毛もいそいそついて来る
美しい日本和装の似合うひと
明星を方角にする挑戦者
旅にチャレンジ北の端から回ろうか
喜寿すぎて恋にチャレンジする若さ
愛あける側へチャレンジゆつくりと
核の発明それから地球狂いだす
はてなからページを開く発明家
本好きなボクちゃんの夢発明家
心読む機械出来たらどうしよう
宇宙空間まだ発明があるヒント
発明のヒントとなった妻の愚痴
諸手あげ地球を癒す案を待つ
発明王いじめ許さぬドラエモン
ノーベル賞を貰う発明社を伸ばす
脳トレが未来をつなぐ発明家
十二歳にしてお見事なおばけ傘

尼崎尾浜川柳会

山田耕治報

精子 登美代 徑子 泰女 順子 東吉 小香 和雪 稚代 克子 あきこ 豊太 佐一 千代子 英子 怜 紀久子 輝子 三喜夫 富美子 よしこ 三男 寿子 和 江美 桃花

子や孫に頼りにされて母元氣
旅つづく神においのち返すまで
どっち断わろうかたのしいことばかり
ちよつとの間ハッピーな夢みた馬券
鑑定に出した絵皿に値がつかぬ
偽りの過去消してゆく千の風
ハッピーが成田離婚を秘めている
美しい国には遠い事件事故
あらたまたまの床に亥の子の絵皿置く
自画像の絵皿に涙混ざつて
パソコンがどどん漢字忘れさす
迎春の匂いが満ちている茶間
白無垢も貴方好みの彩に染め
猪突猛進そんな元氣はさらにない
絵皿から四季の匂いが満ちてくる
向日葵を咲かすゴッホの絵の具皿
空白の時間が長い冬の底
実りある朝を模索する絵皿

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

よし子 里江 耕治 美代子 五月 宏一 昭三 龜与子 イサミ 孝一 きよし 朋月 正治 義芳 全彦 比呂志 鹿太 美籠 いさお 静子 久仁子 フジ 光男 耕策 真一 みつこ ヨシ枝

風船へ希望吹き込み青空へ

発車ベル立ち食いソバがまだ冷めぬ

ふうふうと喘いでるのはボクの影

買物に葱がはみ出す鍋の時季

鍋料理喋って食べてああしんど

寒い風夕餉は鍋という予感

割れ鍋の綴じ蓋つとめ五十年

料亭の鍋に政治の裏がある

毎日がチャンコ鍋です老い二人

闇鍋の中でわたくしが煮え詰まる

夫婦ではないと知ってるばたん鍋

社のバッジはずせばあなた温かい

金バッジ大樹の陰を恋しがり

金バッジ一票ずつの足し算だ

蝶々のバッジが似合う森英恵

九条を守るバッジを光らせる

捨てられぬバッジの中にある思い

社のバッジはずせば寒い無位無冠

揉めそうな気配へそつと席を立つ

逃げ道を断てば勇気が湧いて出る

石橋を叩いて運をとり逃がし

川柳大坂

長井

善純報

幸せが続くようにと初詣で

年金に合った大きさ鏡餅

今年こそ掃除小まめにやりぬくぞ

獅子舞の鼻した嫁も初詣で

幸せの華を咲かせている笑顔

よく響く太鼓を妻が持っている

一壺

六點

扶美代

猿査

栄一

庸佑

章司

元紀

かつみ

美代子

重人

喜久子

一知

敏

アヤ子

ダン吉

悦子

りつえ

泰子

惠勇

志洋

はつとけない人だ笑顔が美しい

感謝する心で祈願初詣で

政策を猪年急に曲げれない

善人の運は願わぬ作業服

運のいい男でいたい男一直線

美しい日本にしたい年始め

猪口干して新春祝う年男

本年も見飽きた二人おめでどう

ありがとうの五文字が響く温かさ

亥の年に真っ直ぐ生きた誓い立て

汗知らぬ額についてこない運

さて今年どんな夢見る年男

猛進の年にゆくり生きていく

運命の出合いだったか猪に会う

新年は金運つくぞと天の声

反省をバネに新春飛び上れ

初政治家の悪を一掃願う春

初日の出森羅万葉として

感謝あり新宿で拝む初日の出

初詣で今年も並の願い事

門松も知らぬ孫にもお年玉

元朝に見えた七十路の一里塚

信頼をあまりされても肩がこる

猪に負けじ一直線に突走る

川柳塔きやらぼく

福代

天雀報

いつまでも親六十を甘やかす

寒波の夜想い出話語り合い

桃太郎のパワーを餅に福は内

柳昌

珠生

ひろゑ

孝一

一風

章久

利昭

彦太

柳弘

東吉

重人

一步

笑風

美花

和

喜楽

司

洛醉

かよこ

功

五月

隆司

いっふみ

善純

千代

雪江

瑞枝

冬の日を自分の時間ゆつくりと

この国に産まれて好きな米の飯

何時からか遊泳範囲狭くなる

秋夜長亡夫へ亡悼へ糸電話

守ってよ兄の命を亡母に言う

再生がきかぬ鱗が褪せてゆく

取り戻そう大事な時間だった

急ぐ事もなくなりほんに間に抜けた

太い幹過ぎた時間問いかける

未練あり出しては仕舞う不要品

夕顔のつるを下して冬仕度

この道の奥釘めきの地藏さま

年とともにふえるくすりにすがりつき

大根がぐつぐつ煮えて温かい

弟と一緒にいたい花時計

神さま仏さま裏切らないで生きていく

病葉の一枚を手は今朝の霜

華やかに氷の上で咲いた花

流れ藻と魚の家族の長い旅

雨の日にまぶしく光る屋根瓦

川柳塔鹿野みか月

土橋

ビリオドを打ったが背中押してくる

二次会へ行くかと妻が袖を引く

太陽も新しくなりお元日

几帳面一皮むけば頑固者

押入で荷くずれしない几帳面

几帳面な時計はいつも五分前

七草にこたわり持つて粥を炊く

春枝

富美子

恵子

紫泉

那珂子

ふみ

亜弥

玲子

寿々子

初枝

章江

田鶴

晶子

日枝子

やえ

すみゑ

ゆき

千春

筆報

幸枝

睦子

完司

弘子

公子

節子

永子

七草にそつと入れとく力餅
 みどり児の乳ばなれ粥を炊いている
 風邪熱に孫の手づくり粥が出て
 七草粥食べてゆつたり春迎え
 去年今年まだ間に合つて寝正月
 度忘れへ呆けを案ずる去年今年
 几帳面手書きの年賀状がくる
 几帳面三度きちんと食べている
 几帳面満点ママのしつけ糸
 舌打ちをさても無理に領取証
 几帳面な父の日記は筆書きで
 樟腦を切らしたことのないタンス
 几帳面に地球が回り生かされる
 新札は表と裏を二度数え
 戒名も墓も作つて待つている
 年賀状表も裏も楷書体
 掃除機を四角四面に動かす
 あの男となら安心と妻がいう
 折りたたみ椅子が気性に合っている
 正解の漢字を電子辞書で引く

あかつき川柳会

山本

柳昌報

富久江 かおる 保子 みどり 汲香 くに子 武彦 久枝 彩子 実満 きみ子 武子 茶子 忠良 蟹郎 孔美子 石花菜 和子 照彦 盛桜 螢

岩清水一滴を集め大河なり
 毒一滴たらずと味がひきしまる
 一滴の血も九条が守りぬく
 一滴の目葉大きな口を開け
 うちの義母どうもがんで骨おれる
 骨のある男だ言い訳はしない
 反骨を支えた僕の五十年
 骨惜しみするまい氣力まで萎える
 骨休みしない出来ない母でした
 七光とは思えない目刺し焼く
 光明は九条にありペンを取る
 ストロウの先で光明を綴る
 許されて僕でも白い骨になる
 美しくない闇僚達の金使い
 闇僚がドミノのように崩れ出し
 知事ですと恥ずかしくつて言えません
 ワーキングプアはじつと手見るばかり
 宇宙から見ればひとしずくの命
 点滴をみつめ命と向い合う
 シェフの味あの一滴のタイミン
 談合にだまつておれぬ納税者
 出る杭に喉の小骨がむず痒い
 のつべりと責任取らぬ安倍首相
 教基法かえていじめは消えますか

豊中もくせい川柳会

江見

見清報

紀雄 扶美代 正 守彦 美世子 シマ子 六助 美花 見清 冬葉 柳弘 美智子 勝弘 蕉子 楓楽 保州 重人 修 福世 慕情 正坊 幸泉

えべっさん済んでお酒が抜けてくる
 亡母の夢見た日は心弾んでる
 笑いすぎ福はどこかへ通り過ぎ
 それなりの暮し幸せだと思ふ
 砕けた夢に滲んだ汗の万華鏡
 バラバラにしたいお人が一人いる
 やがて逝く命だ磨きかけておく
 耳掃除してから聞くいい話
 火の色に命をかける刀鍛冶
 本命でなかった妻が横にみえる
 富士山を世界遺産にしてみせる
 座の隅でここにこして居るだけの母
 あと幾度けんか出来るか若い二人
 初孫の誕生長い刻を待つ
 賀状にはせめて自筆の一字でも
 それなりに生きて賞罰には無縁
 それなりに二人三脚半世紀
 笑い拗ね泣くのも恋の道具なり
 懸命に生きると運が寄ってくる
 うしろ向きになつたら鬼もよく笑う
 戦はないが粗末にする命
 初春や母住む里に雪が舞い
 夢いっぱい吸うて待ち遠しい夜明け
 酔つてない生れて直ぐに赤かつた
 役付きで彼もそれなり苦労する
 そのうちに私の部屋もゴミ屋敷

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

森に入り森見失う一人旅

啓生 玲子 和子 慶子 早人 宇乃子 比る志 満寿巳 萬的 寅次郎 幸雀 哲男 夢 知香子 郁子 見清 勇治 美義 尚士 求芽 肋骨 都代子 則彦 巴子 タミ 寿美子

森不作グルメの熊が里に来る
今年また木守りの柿と冬支度
三代代今年も無事に祝ひ膳
老いの欲今年も抱いて生き延びる
雨戸繰る今年の息を吸い込みぬ
世界中飛んで来ただろ渡り鳥
紅白を見つつ世界の明日思う
地図の上で世界旅行を企てる
アリガトウ笑顔の店に福が住む
寒空に柿の実一つ我に似て
新年を迎えしための障子貼り
両の手につかむ瞬間覚めた夢
奥の間に篝の立つた年始客
古い家に古い家具あり去年今年
夕顔という名の渚なめこ汁
皆主役顔光らせて初詣で

川柳さんだ
北野
哲男報

昭三
しづ子
幸子
守弘
薫
ユキ子
正子
紀乃
寛之
千恵
忠
和子
年代
純
芳子
武庫坊
哲男報
美紗子
雅司
和代
開子
章子
正和
歳子
忠
修
千代子
光久

余生ではないまた今日が新らしい
みの虫がときどき宇宙のぞいてる
堪忍の二字が読めない人が増え
ヌードルの王百福に大感謝
頬つたを叩いて迷い吹き飛ばす
初詣で御神酒を出さぬ神が増え
試着室背筋を伸ばすから似合う

竹原川柳会
時広
一路報

わたくしの味方の電子辞書開く
花開く夢みて夫と草むしる
パウー全開前べりの靴みがく
哀愁のまつた中で梅よ咲け
家計簿を開くと子等の育つ音
バラ開く娘の住む方へ飛行雲
開運を信じ哲字ひとつ持つ
易の灯へふたりで開く掌が温い
半眼にしても真実見えて来ぬ
十年日記開くとどつと過去の声
三面鏡開けてガッツを取り戻す
私の開花前線上昇中
丹精の菊満開は文化の日
優しさをたつぷり包むマタニティ
たつぷりと助走をしたがまだ助走
たつぷりの母乳よ母子美しい
美しい国とや哀しみ多すぎる
美しい国です貧富の差はひどいです
ありがとう素直に言える幸せよ
遠くてもわかる私を呼ぶ声だ

千代
順子
藤朗
二英
朋月
好文
哲男
一路報

美しい殺気が満ちる歌留多会
まだ出来るフアイト満々鎌を研ぐ
千滴の海に遺跡の大鳥居
一服を点て人生を語り合う
平凡という幸せの満ちた皺

八尾市民川柳会
宮西
弥生報

孫受験茶断ちして待つサクラサク
悔い残る昨日を過去にして過す
曇り顔子供に見せることはない
過去はまだ静かにわたくしの回り
愛妻がゆつたり暮らすはくの死後
ゆつたりとノルマを脱いだ赤い靴
両の手を開いて今日をやりすこす
ゆつたりと両手広げて待つ天寿
ほころんだ梅の香りが春をよぶ
ゆつたりと座れる椅子にある重荷
一人旅夢の残照掻き抱く
ゆつたりと歩く性善説をとる
失敗も夢の途中にすればよい
小豆粥やんわり温い母の味
一病息災酒と女と置き薬
終章の風がゆつたりほほを撫で
目標は高い今年の棒グラフ
曲名に似た落ち葉を探している
今年こそ成果を出して笑いたい
山動くまで一匹の体当り
ゆつたりと見えて男に隙がない
モカ香るソファーゆつたり日が昇る

万年
力
房子
静風
一路
浩三
和夫
宏至
美千子
順啓
森子
秋雄
あかり
レイ子
弘風
正典
ダン吉
誠
寿鶴
柳弘
民
紀乃
定男
芳香
欣之
一風
柳伸

今年こそ買った日記はどこへやら
まっ白な画布に今年の夢を描く
宗次郎の笛とゆつたり森抜ける

南大阪川柳会

吉川

寿美報

十二月病気の友を先ず見舞う

十二月貸すも返すも鬼になり

十二月その場凌ぎの傘をさす

ブライドの捨場探しに旅に出る

簡単に媚は売らないベルシヤ猫

老いくの恋ブライドが邪魔をする

ブライドが二合の酒で溶けてゆく

能面の作り笑いに騙される

母子家庭なのに揺れてる男物

偽善者にだけ聞えてる天の声

かけひきも偽りもなく花は咲く

重い荷も平気で背負う母の愛

口出して押しつけられた重い役

信頼の二字を重々しく受ける

ニユース見る命はもつと重いはず

次世代に病んだ地球が重すぎる

重い話すらすら喋るカニの足

年の瀬に金借りに来た重い口

守彦 まつお 弥生 守美報 柳弘 昌紀 栄子 祥昭

一冊の本が心の穴埋める
行間に思いの丈を埋めておく
保護色という偽りで虫は逃げ
今年の漢字命の重さ見直され
浮草の偽り救う歎異抄
容赦なく庶民を襲う重い税

翠洋会

谷口

笑つたら笑い返して来る元氣

何は無くとも元氣印のお父ちゃん

初孫の帰省元氣を貰う朝

大企業だけが元氣な好景氣

口だけは元氣ランチを待っている

ワンカップ好きで元氣な父の艶

泣きながら獅子に噛まれている元氣

談合をしかと聞いている床柱

床柱のんきな家族だと思ひ

いつの世も愛が柱で揺るがない

もたれてた柱入院しています

茶柱の向うに見える春便り

刀柱揺らいで細りゆく父權

刀傷光る柱に維新あり

電柱の銅線益むら不均者

いつの間にか嫁が柱に成っている

集一 志華子 章久 三男 千梢 庸佑 義報 昭 恭昌 捷也 尚士 千梢 志華子 桃花 正雄 孝一 蕉子 満作 希久子 水昇 春 叡子 舞夢 日の出 集一 千歩 すみ子

よくもまあ三面記事の悲しさよ
黒豆の艶もひときわ当り年
泣き顔を見せると私駄目になる
色あせた写真で笑う母の顔
ばらいるでわたしも暮る聖子展
残酷な事件へ冬が這い上がる
口紅が明るいですな恋ですな
本心は二重かつこに入れておく
マスメディアつきつ消していく秘湯

岩美川柳会

石谷美恵子報

メニユーなどいぬ湯豆腐ワンカップ

人生のメニユーは神のてのひらに

政界のメニユー私は氣に入らぬ

どこを押してもメニユーの中にない私

残り物メニユーで足りる妻の留守

特売を見てからメニユー考える

七十の手習いメニユー句会入り

特注のメニユーは時価と書いてある

初鏡おのれの顔をみて笑う

吹雪く日も新聞受けに来る便り

人間になれよと千の風が吹く

吹雪く夜は独りもつがらのように寝る

吹けば飛ぶいのち一づがまだ惜しい

その先を言うて風が吹き荒れる

寄りそって生きたる社会の吹き溜り

吹く風に任せて仮の世を渡る

れんげ 絹子 美籠 照子 さと美 富子 理恵 楓楽 正坊 一瑠 公子 公節 乃 公乃 たぬ 清帆 雅女 陸子 茶子 よしえ きみ子 一粋 幸枝 かつみ 和子 一京

この上で死ぬと畳が敷いてある
寝転べば畳日本はいい国だ
願わくは畳の上で死にたいね
お百度を踏んだ石畳の凹み
はつとする畳の部屋と米の飯
大往生畳の上と決めてある
にんまりと畳の下にある秘密
嫁も来て孫も育った畳です
いい報せ茶の間に春の風が吹く

川柳塔まつえ吟社

三島

浜丘報

完司 圭一郎 孝男 蟹郎 節重 重忠 和枝 菖子 美恵子

うきうきと出かけて行つたハイヒール
うきうきと明日吹く風を待っている
うきうきと汚れた猫をあやして
里芋の皮がうきうき手古摺らす
どうせなら余生うきうき生きてやる
うきうきと古いページを繰っている
初めての出会いが人の運を決め
一秒の運で家族ら助かった
運がよけりや一億円の不当たり
運不運言わずあしたへ生きる汗
俺の運天眼鏡で覗かれる
運勢は人の出会いにふと開く

高知川柳社

川竹

松風報

たえこ 多喜 柳歩 柳坪 浜丘 桂子 幸生 螢 房子 茂美 注湖 愛宏 功 暖

面倒見良くて居候居りつづけ
面倒見よくてちよつぱり疑われ
面倒な話は明日へ酒にする
サークル檸檬 吉田あずき報
クリ頭並べゲンコの順を待つ
省かれる方についで入つて
苛立ちを押え兼ねて膝頭
そのうちに聞えてきそう頭石ッ
訥弁の口調が妙に受けている
優しげな頭 縄文土偶のヒト
誕生日維巾固く絞つて
頭でつかちばかりで前へ進めない
頭上注意したら小石にけつまずく
保険金みな満期となった幸不幸
呆けぬよう頭しつかり洗つとく
余生ではないまた今日が新しい
外出無用寝て食うこれでお元日
休肝日寡黙な男演じさせ
叩いても振つても知恵は出ぬ頭
フィクションの世界で思い切り遊ぶ

倉吉川柳会

竹信

照彦報

野の花を踏まぬモラルもにほんじん
美の国がモラル忘れた袖動く
ハッキリと言えはモラルに欠けている
有難う一言いえぬ兄に教え
最低のモラル嘘などつきませぬ
元旦に家族のモラル初詣で
賀寿恵

新しい朝たベルトを締め直す
ぐつぐつと眠りわたしの朝がくる
陽が昇る独り芝居は未だ続く
一ぱい水で元氣な朝になる
苦も楽へ今朝も百歳いい笑顔
次々と見送りホッと朝のお茶
年重ね猪年が少しうねり出す
猪に会つたら死んだ振りしよう
猪突性ちよつと押さえて共白髪
向う見ず走り孤独を噛んでいる
猪突だが安全運転しています
冷静に猪突取りなす神がいる
そのままだ美しいのに飾り立て
底辺を飾る言葉を選っている
お誘いがあつて早速顔飾る
まっすぐに自分を飾る白を着る
飾り窓あけて幸せ待っている
荒海に向かつて飾るものはなし

町紅 文子 多賀子 治代 ちえこ 博子 邦代 喜美子 幸子 たけし 紫晃 礼子 昌枝 静恵 蘭水 小水 知恵子

自分史の余白涙の跡があり
自分史の余白へ曾孫顔を出し
前略と書いて余白の有る葉書
余白などなかった母の子育て記
花まるを余白にくれた答案紙
自分史の余白たんまり取つてある
終章の余白へ取つて置きの事
面倒はかけたくないと母独り
面倒を掛けず近けますよう祈る
甘い顔するから面倒迷い込む
面倒見できる女将の太つ腹
面倒な話になれば背を向ける
面倒な毛糸をはどくりハビリに
面倒とコンビニ食でする昼餉
結婚は面倒だから言う怖さ

京子 正躬 美々 悦子 典雄 哲史 幸子 千鳥 孝雄 啓一郎 快風 三郎 暖

野の花を踏まぬモラルもにほんじん
美の国がモラル忘れた袖動く
ハッキリと言えはモラルに欠けている
有難う一言いえぬ兄に教え
最低のモラル嘘などつきませぬ
元旦に家族のモラル初詣で
賀寿恵

我が国の親子のモラル剥けて来た
まぼろしを追っかけまわし灰になる
ウォーキングして百歳を追いかける
数字だけ追い番組はうすつべら

追憶の君はたて髪青き馬

イノシシに追われて村が消えていく
春風に追われて歩くのに近い

後追つて泣いたあの子が親になり
唇に合う笛を追いかけて

象の耳バラリと電波はね飛ばす
電波をはじく千枚張りの面構え

縦と横電波の波形書いてみる
夫婦です以心伝心無の電波

とんどろけ落ちて風車が慌てだす
電波飛ぶ中へ正しくない噂

このからだ微少電波の指示通り
見えないが電波で体ハリネズミ

ウインクに乗せて怪しい電波飛ぶ
土鍋からめでたい湯気が立ちのぼる

おめでどうと言われて気付く誕生日
黒棒の主はめでたく年とらず

めでたいな借金のない年が明け
オレオレに乗せられるとはおめでたい

認知症電波障害かも知れぬ

川柳塔おとし

福田

登美報

開拓へ汗出したほど実りない
休耕田むかし流した汗わすれ

ご先祖が斜面拓いた梨畑

龍枝

石花菜

螢

次男

克枝

鬼一

和一

由紀子

芳光

完司

玲子

瑞子

きみ子

和枝

睦子

玲坊

悠子

茶子

萩江

喜美子

秋草

重忠

泰輔

照彦

多香

雄々

艶子

先人の拓いた道を広げよう
感動に巡り合う道切り拓く

新人の選手すくすく活躍し
すくすくと伸びて柱になるという

暖冬のあとの吹雪が身に刺さる
雪やこんこん歌を忘れた子供達

雪のない正月寂し山育ち
春雷が天地うならせ雪運ぶ

川柳藤井寺

高田美代子報

寂しさはお袋と呼ぶ人がない
給料を袋でもろたい時代

また来いと袋に詰める母の背な
思案する樋口か諭吉ボチ袋

十二月の顔が来年どう変わる
数の子もみかんも届く十二月

ネコ貸して下さい主婦の十二月
笑われて何んぼ吉本儲けてる

怖かった父が笑っている写真
仲直りという皺が増える構わない

仲直り笑い袋の紐をとく
聞き流す笑顔に負けたなと思ひ

惚れたのはあんたが先と笑い合う
ソテツの木こもを巻かれて春を待つ

枯れもせず悪も知らずに水中花
借金はないけど何か借りてある

友情はつかず離れず年の暮
命と書きいのちを思う年の暮れ

真一

幸次郎

小生

以和万津

知恵

風花

道子

清子

登美

いさお

淳司

アヤ子

シルク

栄一

重人

悦子

東吉

志洋

みつこ

鐘造

昭子

雅枝

静子

春蘭

扶美代

瑠美子

美代子

いいことは何もないけど年男
路地住まい猫も気軽な勝手口

ライバルの吐息をそっと見てしまふ
十二回開魂だけが立つている

景品の袋の中が気に入っている
ヤミ米をリユック戦後が遠くなる

苦笑いするのために買ったジャンボくじ
泣き笑い繁昌亭の楽屋裏

後添えの十二違いをやつまこれ
一つだけ違う金魚が面白い

姑を見送って妻よく笑う
一年の行方を捜す十二月

川柳クラブわたの花

山本

宏至報

歳月が善抜きをした僕の妻
ナツメロが様ざまなこと巻き戻す

もらつても着るに着られぬ派手な服
街路樹のいちよう黄葉が道照らす

群なせば淑女うるさくよく喋る
亥の年の夢が華やかくシクラメン

留守に来た息子親父の座にすわり
古稀迎え目指す歩みの道白寿

雪舟の墨絵に心正される
笹舟に明日の行方を聞いてみる

偉い人談合好きで嘘上手
紙切りの手先で生きたカブトムシ

至福のとき湯舟につかりハナ唄を
犯罪者被害者よりも救済し

行く先は定めまかせの木の葉舟

一歩

一知

庸佑

ダン吉

ヨシ枝

惠勇

一箇

六点

史郎

紀子

かつみ

婦美枝

晴美

俊子

ミツ子

博子

美代子

ふりこ

浩三

義明

八寿子

宏至

正春

宏

知佐子

莊治

耀一

笑い袋精一杯にふくらまず

あこがれるサイズに遠い体脂肪

ハツとする派手な女を値踏みする

あこがれは美と健康と愛妻家

悩みより漫画の本のいい展開

まつ白い紙も私も裏がある

小春日の猫も私も舟を漕ぐ

赤ちゃんの泣く声聞くとこちよく

うつの日は舌にころがす鮎一つ

悔し泣きしている秋の休耕田

信頼を背中に託し山登り

ぬるま湯につかっています私主婦

捨てられる運命を知る紙コップ

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

他所はよそ内にはうちのおもてなし

子供らの夢を揚げてる津軽風

あてのない我を迎える友がいて

介護度が軽く居場所が中ぶらりん

雪まだか迎えたくない雪ふぶき

冥土よりお迎え来てもまだ行けぬ

時間割迎えて安堵する学期

夢ひとつ空の青さにとき放つ

優しさで気難しさを持つ鬼面

団塊世代定年迎え惜しまれる

少年の夢を迎えた上野駅

保育園母の迎えを待っている

定年へ明鏡止水の土踏まず

(赤) 妙子

君江

民

(本) たえこ

幸枝

ますみ

いつみ

克美

美はる

はじむ

愛子

欣子

一風

洋子

成柳

初枝

柳子

てる

隼人

順風

銀波

ふさふ

花匠

雅城

井蛙

黙人

気難しい男レタスをむくように

赤提灯いつもの席が空いている

花一輪枯れきるまでは水を遣る

温かく迎えてやろう冬の蝶

次世代に緑の夢を引き渡す

富柳会

池

森子報

どん底を生きた不屈の床柱

お世話するよりされるのはもつと嫌

母偲ぶ柱に飾る菊の花

世話かけた子が面倒を見てくれる

北風と踊りあかそう木守柿

古傷に触れないままのレモンティー

今日の愚痴サブリメントにして飲んだ

愚痴つたら男が廢るから黙る

今日だけは非凡二人のフルコース

はずれてるリズムを乗せて風呂の湯気

世話好きな妻が溜めてる家事雑事

世話すれば応えてくれる花が好き

吃水線あたりでスイッチが入る

ぐち言えば善処しますとカタツムリ

文脈の柱しっかりゆるがさない

石柱に古人の息づかい

パソコンと喧嘩している部長との

椎の実を拾い昔の音を聞く

大黒柱の誇りを抱いて逝つた父

火柱になって飛び込む一大事

締めもさとり果てと冬帽子

和香子

花峯

慕情

五楽庵

森子報

紅紫朗

冬虹

一慧

鐘造

よりこ

登子

和子

淳司

佳子

隆彦

澄子

伸雄

アキ

彦次

巳代一

深雪

千華

萩乃

泰女

ひろこ

信子

まだ続くんでくずして愛ひとつ

へたの絵を続ける母と秋を溶く

凍てついた胸に真つ赤な冬薔薇

宴席のお世話はいつとも三枚目

打吹川柳会

野口

お祓いでちゃらにと祈る初詣で

健康祈願家のベツトも宮参り

ひまわりが最後に祈る空がある

あれこれと祈り賽銭玉一つ

キリストもイスラム教も空掴む

転ばない暮らしを祈るお年頃

手を合わせて御覧望みは叶うもの

お祈りが済んだら握る機関銃

トボけずに元気で居ることを祈る

初春に梅の蕾もウフフフ

初夢は夫にも内緒ウフフフ

ウフフではすまぬ孤独のど真ん中

歳よりも少なく見られ否定せぬ

ウフフ嬢ちゃん片眉毛描いてない

帳尻は意外ウフフをポケットに

影法師ウフフウフとついてくる

もう一つの自分の顔を見てウフフ

六ヶ国協理理想の歯が合わず

嫁行かず理想の高いお姉ちゃん

おせち食べ理想的ですダイエツト

空想と理想がいつもから回り

理想認定元宙に浮いている

あかり

鬼焼

欣之

森子

節子報

滋

禎元

克枝

公恵

和子

玲子

三津子

芳光

富恵

照彦

龍枝

きみ子

京子

重忠

和枝

やえ

螢

小生

久芽代

善江

睦子

孝恵

理想像高くペンチ温める

時々チュー理想の妻と五十年

理想だけが一人歩きでつかめない

大山の裾野は僕の理想郷

星くずになって百億年光る

逃げ水のような理想がつかめない

どなたにも迷惑かけず生きて死ぬ

三日間だけは理想の婿だった

川柳ねやがわ

森

来年も今年ぐらいの春で良い

来年の話している花の種

来年も妻と聞きたい除夜の鐘

子の果立つ来年少しは楽になる

来年も老人力をかがやかせ

足腰をきたえ転ばぬようにする

瓜坊も乗せてもらった宝船

来年も来いが見送る渡り鳥

ピンク着て乙女に返りたい来年

年ごとに来年早く来る不思議

トラブルが嫌で子どもを作らない

トラブルのネタは尽きないワイドショー

まあまあと母はトラブル丸く撫で

パソコンのトラブルマウス亀になる

トラブルをかわす笑顔があたたかい

トラブルもパソコンぐらいたつたらな

揉めごとにすぐ口出したがる隠居

家計簿をぎつしり埋めた特売日

かつみ

紀美恵

たけ代

幸子

石花菜

玲坊

完司

節子

茜報

じゅんこ

高栄

集一

亜也子

茜

ルイ子

日出子

庸佑

かすみ

たもつ

勇太朗

柳弘

一風

郁夫

朝子

なだよし

利昭

博泉

年金の目減り冬眠でもするか

冷静さ欠いてしまった一目惚れ

冷静に見すぎて婚姻忘れてる

舞い上がりクレオパトラに見えた君

財布から頭冷やせと声がかかる

軽く見たノロウイルスに脅えてる

ゴミ袋師走の愚痴も詰めて出し

居酒屋の穴があいてる十二月

直角に眠り直角に起きる朝

たそがれに指の先から染められる

トラブルの元はくぐった縄のれん

美しい国が税金上げてきた

城北川柳会

小谷 集一報

年男めでたい席で唄われ

テレビからめでたさ貰う三が日

めでたい日母は小さくかしこまり

いつまでも富士がうつてめでたい日

ふところ手しばし思案の独楽止る

止り際人生に似て独楽おかし

本当の技量は陰で褒められる

バーゲンの服を褒められても困る

讃えられいずれ捨て去るプチ文化

褒められる言葉に飽きた胡蝶蘭

優しさを褒め生き方を褒めてあげ

駅広場路上ライブに夢がある

品格を丸出しにする生テレビ

仁清

洋

鈍甲

弘風

修

さち子

麗

とし子

亜成

恵子

妻子

あやめ

はじめ

千歩

集一

萬的

恵子

とし子

たもつ

重人

あやめ

なだよし

典子

ルイ子

志華子

昭

夫婦万才ずつとライブでやってます

あきらめてあきらめてでも信じたい

歳重ね炬燵の守りが多くなる

子離れのチャンス息子が赴任する

家族一同まああるくなって暮したい

骨太の増税今も身に堪え

淀川の堤で拝む初日の出

許されて許して知った深い愛

今年また夢に終った三億円

常連がいないと妙に気にかかる

口癖になった神さま仏さま

里帰り初めに孫を迎え入れ

新しい暦に明日を発芽する

旗色が悪くなったら家を出る

今年こそもう一花の種を蒔く

喉に餅詰めぬ用心喜寿の春

(葉)明子

(小)昭子

達子

修

倫子

正

利昭

千里

弘風

春蘭

克衛

麗

郁夫

和夫

朝子

順三

第99回大阪川柳の会

日時 4月2日(月)午後5時開場

会場 北区梅田駅前第2ビル5階

生涯学習センター第一研修室

宿題 「鏗」佐藤 純一選

「もしも」三好 聖水選

「コマシヤル」坊農 柳弘選

「石」磯野いさむ選

締切 午後6時 会費千円

賞状 産経新聞社から秀句に賞状

欠席投句 3月30日迄(会員のみに)

■句集紹介

ピンチにはうつむ

かないで空を見る

奥田 みつ子著

田中正坊

ピンチにはうつむかないで空を見る

句集の中的一句だが、これがこの本の表題ともなっている。一九九九年、第一句集として『白い梅』を刊行したみつ子さんは、二〇〇六年三月、川柳句集『遠き人へ』を美研インターナショナルから、そして今回、この本を同出版社から発行した。

第一章「あるがままあるがまま」から「注文の多い病人」「白い部屋」「旅立ち」「アシタ天気ニナアレ」「転んでも遠くても」の六章から成り、一・四章に雑誌『華音』に掲載された若手の川柳作家として人気のあるやすみりえさん、日本情操文化学会会長の遠藤千舟氏との対談を加えている。

それぞれが価値のある内容を含んでおり、「川柳のココロ」麻生路郎の言葉」などとあいまって、(川柳の世界へのお誘いの本」と

もなっているが、私としてはやはり夫の発病から旅立ちに至る作品群をレクイエムとして鑑賞させて頂くこととしたい。

まず第一章では、次の句――

ピンチにはうつむかないで空を見る

さびしさのじんじん入る秋の窓

見栄捨てて自分をさらす冬木立

あるがままあるがままにと竹は伸び

空・窓・木立・竹に託して、病人を見守る

心情を詠んでおり、そこはかとなく胸を打つ。

「ああ、そうだったのか」と思い当たること
が少なくない。

第二章は、病気そのものを詠む。

注文の多い病人 外は晴れ

百日紅ガンと生きるもよしとする

ソナタ流れ放射線室人けなし

病気して夫婦 夫婦の味となる

続く第三章。

病室に地の果て思ふ風の音

残り少ない刻を分け合う白い部屋

おもむろに覚悟とやらを迫る日々

雨細し命の糸のなお細し

もう鑑賞の言葉は尽きた。私もかつて病人

や病気を詠んだことがあるが、この時ほどな

まじ川柳という表現の手段を知ったことに辛

い思いをしたことはない。

そして、最後の旅立ち。

穏やかな旅立ち空は透き通る

書斎いま風がノートをめくるだけ

主なき書斎にひそと座る冬

けさもまた生かされてみる霜の庭

しかし、残された者は生きていかねばなら

ない。むしろこれからが正念場かも知れない。

次の句は、その心情を端的に表現して余す

ところがない。

夕焼けに叫ぶアシタ天気ニナアレ

我が影と向き合っている夜の底

生きるとは信じることよ高い空

明日を見るために昨日の日を捨てる

いよいよ最後の章にたどり着いた。

茜雲炎えて私の旅続く

残照見事生きるべし笑うべし

亡き人のメールか月が美しい

ひとすじの道 転んでも遠くても

あとがきにも触れられているように、今年

六月が、関西学院大学名誉教授であった亡夫

の七回忌にあたり、供養の意味もこめられて

いるが、ほとんどの句に著者の思いがひそん

でおり、貴重な作品群となっている。著者が

今後、これらの句を生んだ時期の「あるがま

ま」の心情に生き、川柳の普及と指導にあた

られることを期待して、紹介文のペンをおく。

柳界展望

(優秀賞) ①西口いわゑ

②田辺鹿太 ③亀岡哲子

④黒田能子 ⑤山口光久

○南大阪川柳会18年度年間賞 西出 楓楽

○いずも川柳会、18年度いずも賞は次の通り。

へいずも奨励賞

○第25回没句川柳供養大会
12月10日開催。同人天位
六十億人類載せた星の鬱

松本よしえ
居酒屋の椅子に今夜もど

っこいしょ 新家 完司
あこがれたマドンナ今は

山の神 山下 節子
○川柳塔なら18年度最優秀

句は次のとおり。
止まりかた知らず狂って

いく時計 居谷真理子
○京都塔の会年間最優秀賞

山田葉子。多得点賞①三宅
満子 ②榎本宏子 ③都倉

求芽 ④大野百合子 ⑤高
島啓子

○西宮北口川柳会平成18年
度年間賞は次の通り

(カップ永久保持者)
亀岡 哲子

▽御芳志御礼△
同人岡本久峰氏から初句会

御祝儀として金一封拝受。
▽出版△

木村初子さん(同人和歌山
市)は句集「残照」を上梓。

変形版31頁
▽同人動向△

○西出楓楽理事長は「川柳
かまいし」(遠野市)1月号

に「定型について」を執筆。
○奥田みつ子副主幹は12月

20日発行の華音5号誌上に
於て、やすみりえ・復本一

郎(神奈川大教授)と川柳
鼎談を行った。百人一首を

川柳に詠んだ切り口の巧み
を語り合った。

○NHK学園発行の季刊誌
『川柳春秋』掲載の「名句

鑑賞」を85号から前たもつ
副理事長が担当する。

○同人中村れんげさんの日
常が週刊新潮1月18日号に

取材を受けて紹介された。
▽訂正お詫び△

新同人紹介(1月承認分)

両川 無限

一笑・公弘・完司・洋々・朱夏推薦

坂上 のり子

一岳人・直樹・淳司推薦

三宅 満子

一求芽・たもつ・楓楽推薦

美籠・きよし・楓楽・たもつ推薦

代表者会の件②各地川柳大

会への対応について③誌友

拡大の為の川柳塔誌近刊分

の配分④各部報告事項⑤そ

の他、次回は3月7日(水)

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
ほたる川柳同好会	13日(火)午後1時から 奥・煮る・わいわい	豊中市立宝池公民館 阪急・モノレール 宝池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
高槻川柳サークル卯の花	15日(木)午後1時半締め切り 濃い・知恵・がっくり・国 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子
岸和田川柳会	17日(土)午後2時締め切り 当り・いじる・虚ろ・オープン	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳藤井寺	18日(日)午後2時15分締め切り 棒・なごみ	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
川柳ねやがわ	18日(日)午後1時半締め切り 別れる・力士・誘う・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	18日(日)午後1時半締め切り こつこつ・内気・驚く	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい川柳会	19日(月)午後1時半締め切り 決める・不思議・タイプ 自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブわたの花	23日(金)午前9時半から 漬け物・庭・パワー・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市川柳同好会	24日(土)午後6時から 焼く・コップ・素質・女	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
三幸川柳教室	24日(土)午後1時から 遊ぶ・咲く・にこにこ	勤労者総合センター4F 会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
はびきの市民川柳会	25日(日)午後2時締め切り ひたひた・グルメ・耳 「重い」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷺駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川柳ふうもん社	25日(日)午後2時締め切り エキス・生か死か・魔法	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
川柳塔みぞくち	26日(月)午後7時半から 定年・咲く・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南大阪川柳会	26日(月)午後6時から 人気・ぼちぼち・らしい 自由吟	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都塔の会	26日(月)午後2時締め切り おざなり・混じる・暗示	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328 ブアン青雲202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6629-6914) へご連絡ください。

3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	1 日(木)午後 1 時から 慣れる・天・花瓶	奈良市立中部公民館4F (近鉄奈良駅④出口歩5分) 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62-6 渡辺富子
尼 崎 いくしま	2 日(金)午後 2 時締め切り 芽・道・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
富 柳 会	3 日(土)午後 2 時締め切り 即・糸口・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
城 北 川 柳 会	3 日(土)午後 1 時半締め切り 段差・浮く・くすくす・自由吟	旭区老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮駅 3 番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉 吉 川 柳 会	3 日(土)午後 2 時締め切り 我慢・早速・おかしい	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 唐 津	5 日(月)午後 1 時半から 連休・貸す・マンション	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
堺川柳会	9 日(金)午後 2 時締め切り 種・負ける 「トルコ(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	10 日(土)午後 2 時締め切り 時計・酔う・シズシズ	倉吉市上灘町 9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川 柳 塔 ま つ え	10 日(土)午後 2 時締め切り 欲・休日・甘い・別れ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木 9-23-22 三島松丘
川 柳 塔 みちのく	10 日(土)午後 5 時半締め切り 無料・手渡す・ばらばら	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ 1 階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川 柳 会	11 日(日)午後 1 時から 姫・しくしく・滑る・雑詠	山本コミュニティセンター 3 F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま	11 日(日)午後 2 時締め切り 迷路・張る・ゲーム 「調味料」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	12 日(月)午後 1 時から 深い・テーブル・結ぶ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町 2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	13 日(火)午後 2 時締め切り 竹・焦る・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太

編集後記

☆特集エッセイ「私の宝もの」にたくさんのご応募をいただき有難うございました。四月号にて発表させていただきます。

☆一月号「檸檬抄」の題の誤りについては、各川柳会代表の方に会員諸氏へのご連絡を頂きましたこと御礼申し上げます。年末年始にかかり、連絡行き届かなかったこともお詫び致します。

たった一字の誤植切なき霜夜かな 小田島季走
これは朝日新聞、折々のうた欄へ昨年12月掲載された俳句です。編集人として身につきまされる一句に共鳴反省したり自戒したり切ない霜夜を過ごした次第です。

☆母は1月25日京都の老健施設で98歳の誕生日を迎えました。1フロアー50人ほ

どが、数人ずつのテーブルに分かれている食堂で誕生日の特別メニューをいただき、祝って貰いました。母は幸いにも、充実した施設で大切にされ、穏やかに暮らしております。介護士さんや他の職員さんが排泄、入浴、食介等笑顔でお世話

をされている姿には頭が下がる思いです。認知症の方にも、本人の尊厳を傷つけぬよう対応しておられます。介護福祉士の制度ができた当初は23万人中8割が女性だったそうですが、今は男性もほとんどん資格をとって、入ってこられます。

☆一方では、介護職の現場は離職者も多いとの事です。労働条件、待遇にも不満があるらしいのです。働いて下さる方にも、入所者にも陽の当たる場所となるような行政を願わずにはおれません。

ひとこと

初歩教室年間賞を受賞して

川柳を本格的に始めて、今年で九十一年になるが、賞を頂いたのは三度目である。

まず最初は二〇〇五年に地元紙山陰中央新報で「恋という苦手な橋をまた渡る」で年間賞を受賞。

次に二〇〇六年の島根県民文化祭川柳の部で銅賞を受賞。(どうせなら宇宙へ響く恋をする)

そして今回、思いがけない全国レベルでの賞を頂いたのである。

初歩教室では同想句や添削・批評句として取り上げられたことも何度があり、まさか自分が頂けるとは思ってもみなかった。

一月八日の受賞式ならびに句会では、皆さんが歓迎してくださり非常に嬉しかった。

受賞に驕ることなく、三十八歳らしい若々しい句を作っていくかと思う。

(相見 柳歩)

○戦後、家を焼かれて大阪に帰りそびれた疎開児童の私は、奈良県の片田舎で本に飢えていました。幸い旧家の友達から「蔵に本が沢山ある」と聞き、借り物の唐草の風呂敷で山ほど背負って帰り、読み終わって返しに行き、また借りて帰りました。佐藤紅緑や佐々木邦、吉川英治の新書大図記、宮本武蔵、新三國志などを貪るように読みました。

○大阪の中学生の頃に貸本屋が出来、小銭を握り締めて新刊書の順番を待ちました。棚の隅の海音寺潮五郎を読んで、時代小説に強く惹かれるようになりました。

○その後、山本周五郎を知り、司馬遼太郎、藤沢周平、池波正太郎と立て続けに輩出した時代小説の大家に没頭しました。昨今はこれら名人の膨大な旧作を読み返しつつ、平岩弓枝、北原亜

以子、澤田ふじ子、宇江佐真理、佐藤雅美らの新刊を待っています。

○定年後にふと川柳の門を叩いたことから、勉強にと古本屋で買った「俳風柳多留」に、小説で慣れ親しんだ江戸の世界がはあつと広がっていました。喜び悲しみ、笑い泣く、庶民の世界は今も変わりなく詠み続けられていて、とうとう川柳の虜になったのです。(尚)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(5月号)

地名

都府
道市
県
姓
雅
号

きりとらせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

檸檬抄投句用紙

「吸 う」 (3月15日締切)

5月号発表

松本 文子 選 — 共選 — 川上 大輪 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県道
府 姓
雅号

地名

市都
県道
府 姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



年
月
日

○ ○		紹介者	電話	住所	氏名
年	年			〒 —	
月から一年	月から半年				
9800円	5000円				

該当の方に○をつけて下さい

市阿倍野区三町2-10-16 ウエムラ第2ビル 202
川柳塔社（電話 06-6629-6914）

大阪市阿倍野区三好町2-10-16 ウエムラ第2ビル 202

川柳塔社（電話 06-6629-6914）

振替 0098015133368

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

5月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (8句) 河内天笑選
水煙抄 (8句) 奥田みつ子選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄 (2句) 松川本大輪共選
抄 (2句) 鴨谷瑠美子選
一路集 (3句) 夏目一粋選
初歩教室 「アリバイ」 (3句) 三宅保州担当
「マンション」
「貸す」
「連休」

6月号
檸檬抄 「デザイン」
一路集 「午後」「遺伝子」
「コンビニ」
初歩教室 「傘」

本社3月句会

とき 3月7日(水) 午後1時開場・2時締切り
開催時間、締切り時間に注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし
兼題 「寒い」
「マニア」
「数」
「撫でる」
「錯覚」
会費 1000円
投句料 500円
前島由一選
加島由一選
村上直樹選
大内朝子選
神夏磯典子選
山本希久子選
河内天笑選
(各題2句以内)

本社4月句会

7日(土) 午後5時半から
兼題 「さばさば」「柱」「スマート」
「減る」「突然」

第25年度 夜市川柳募集

第10回 「馬」天根夢草選
ハガキに3句 3月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までお願いいたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇七年(平成十九年)三月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六二九六九一四番

振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

第31回 全日本川柳2007年栃木大会

日時 平成十九年六月十日(日) 午前十時開場
会場 鬼怒川温泉あさや コンベンションホール華厳
〒三二二五九八 日光市鬼怒川温泉滝八三三

交通機関 東武鬼怒川温泉駅からダイヤルバス(5分・有料)
宿題 第一部(事前投句)
TEL 〇二八八(七七)一一二一

高校生・一般の部 四月十五日締切(当日消印有効)
「並木」平山 繁夫 選 「滝」橋田呂久朗 選
「安全」太田紀伊子 選 「アジア」深町 金鳥 選
小・中学生の部 四月十五日締切(当日消印有効)
「ときどき」弘兼 秀子 選 「学校」前 たもつ 選
「自由吟」加藤 鯉 選

専用紙のない方は、2×16cmの句箋一枚に一句宛記入・各題二句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記。
投句料 一、〇〇〇円(定額小為替・現金書留)を同封して左記宛
郵送のこと。(但し小・中学生は無料)

投句先 〒530-0041 大阪府北区天神橋二丁目北一―一九〇五
(社)全日本川柳協会 宛
TEL 〇六(六三三)二二二〇 FAX 〇六(六三三)二四三三

宿題 第二部(当日投句)十一時十分締切
「刻む」久保田元紀 選 「蔵」小金沢綾子 選
「少ない」金子美知子 選

第二次選者 塩見 草映・斎藤 大雄・西来 みわ
田中 新一・佐藤 美文

会費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)
表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞
大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ
全日本川柳栃木大会実行委員長 高梨 宗路
全日本川柳栃木大会実行委員長代行 吉本 瘦児

△表彰式典・前夜祭で案内▽

◎表彰式典 平成十九年六月九日(土) 午後五時三十分

(功勞者・平成柳多留入賞者・大会十年連続出席者)

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場に於いて
会場 鬼怒川温泉あさや コンベンションホール華厳
〒三二二五九八 日光市鬼怒川温泉滝八三三

参加費 八、〇〇〇円(会食・アトラクション)
大会・前夜祭のお問い合わせ先
〒三二二〇二一 栃木県壬生町安塚九二四一〇〇
川俣秀夫 方 日川協栃木大会事務局 宛
TEL 〇八〇(一〇三七)八九八〇 FAX 〇二八二(八六)一七五五

大会・前夜祭参加費の送金先 四月十五日必着
郵便振替口座番号 〇〇一四〇一一五五六九二九

△宿泊・観光ご案内▽

宿泊 鬼怒川温泉あさや

宿泊料金・一泊朝食付・税込み

観光 世界遺産の日光を訪ねる 日光東照宮・輪王寺 他
一、〇〇〇円〜一七、〇〇〇円

日時 六月九日(土) 十二時〜十七時
集合 鬼怒川温泉あさや玄関前
申し込み三十五名以下の場合中止または料金変更にて実施します。

宿泊・観光のお申し込みは、別紙(ハガキ)申込書に記入し、ご送付下さい。四月十五日必着です。

宿泊・観光の問い合わせ先

JTBトラベランド宇都宮西口 担当者・上野治男
TEL 〇二八(六二五)八一五一 FAX 〇二八(六二五)三七二六